

第1章 吉田遺跡第I地区A区の調査

1 調査の概要

吉田遺跡の発掘調査は、1966年7月に第I地区A区から始まった。吉田遺跡調査団が発行したガリ版刷りの『山口大学構内吉田遺跡調査概報』によれば、「A区は昭和41年6月20日に構内循環道の工事中、台地の端を掘り下げた際多量の弥生式土器が出土したことから同月25日に予察を行ない、弥生中期と古墳後期の両遺物包含層が存在することを確認した。7月7日から20日まで緊急調査を実施（後略）」としている。また、当時の写真を保存したアルバムの註記には、「施設暗渠設置のため、臨時排水溝を掘さくした際弥生式土器の包含層と古墳時代の包含層に掘り当たったため、遺構の露出している個所とその付近の緊急調査を行なった。」と記述されている。これらのことより、第I地区A区が現在の大学本部事務局前及び大学会館前の構内循環道と、それに付随した北側排水路であることが想定される（Fig.33）。

上述した吉田遺跡調査団の概報、当時の記録写真（Fig.31）から吉田遺跡第I地区A区の調査が全面調査ではなく、排水溝掘削により露出した遺物包含層部分周辺を掘り広げる部分発掘であったことがわかる。当時の土層断面図や、土器に註記された「トレンチ」が部分発掘の地点を示すものと思われる。土層断面図は第5トレンチまであり、5カ所で部分発掘が行なわれたと思われるが、土器には第4トレンチまでの註記しかない。さらに、調査区の平面図が散逸している為、発掘地点を知ることが不可能である。

遺構は正式な『山口大学構内吉田遺跡調査概報』によれば、「台地の末端が南に低まる傾斜面では、弥生時代中期の土器が充填した不整形のピットを検出した。」との記述がある。これは、第4トレンチを示すものと思われ、当時の出土状況写真

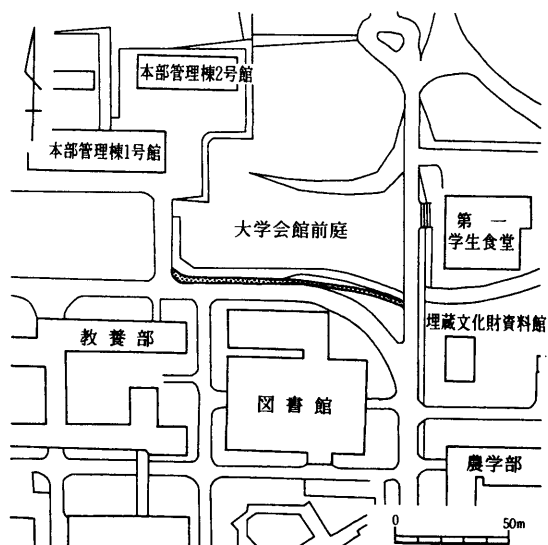


Fig. 33 A区調査位置図

(PL-7)などが残されている。部分発掘であった為、遺構平面図は残されていない。

なお、Fig.36は第Ⅰ地区A区出土土器と同じコンテナに収納されていた表面採集の土器(PL-8)である。「S41 6 24 平川(校内)」「S41 6 26 平川(校内)」の註記がなされている。6月25日に行われたという予察の前後であり、予察と併せて吉田遺跡の分布調査が行われていたことを、物語る資料である。

2 層位

現在、吉田遺跡第Ⅰ地区A区の土層断面図は、第2トレンチから第5トレンチまで残存している。当時の土層断面図には標高の記載がなく地点も不明である為、基本層序を示すのみにとどめたい。ただし、第4トレンチとされる地点については、弥生時代中期後半の何らかの遺構であると考えられる為、西壁断面図(Fig.35)を掲載しておく。

吉田遺跡第Ⅰ地区A区は、次のような基本層序(Fig.34)である。

第Ⅰ層：耕土、厚さ20~30cm 第Ⅱ層：茶褐色土、厚さ30~35cm、土師器や須恵器を包含する(包含層Ⅰ)
 第Ⅲ層：黒色粘質土、厚さ15~55cm、弥生土器を包含する(包含層Ⅱ)
 第Ⅳ層：灰青色砂質土、厚さ20~25cm、弥生土器を包含する(包含層Ⅲ) 第Ⅴ層：茶褐色砂礫(地山)

第2・3・5トレンチでは地表下110~140cmで地山面となるが、第4トレンチは地表下50~70cmに地山面がある。標高が記入されていないため明らかではないが、弥生時代中期後半の遺構があることから、第4トレンチ部分が高まった地形の可能性がある。



Fig. 34 A区基本層序模式図

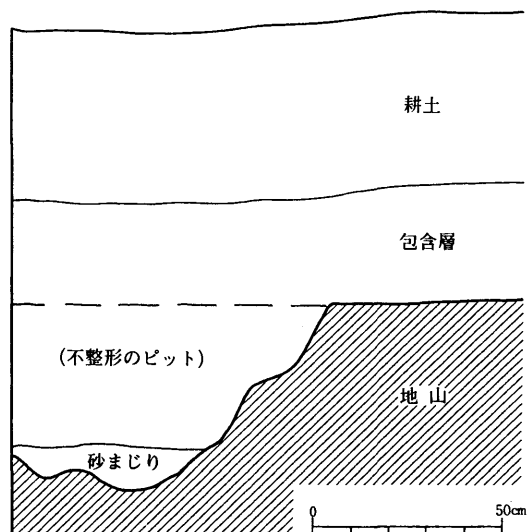


Fig. 35 A区第4トレンチ西壁断面図

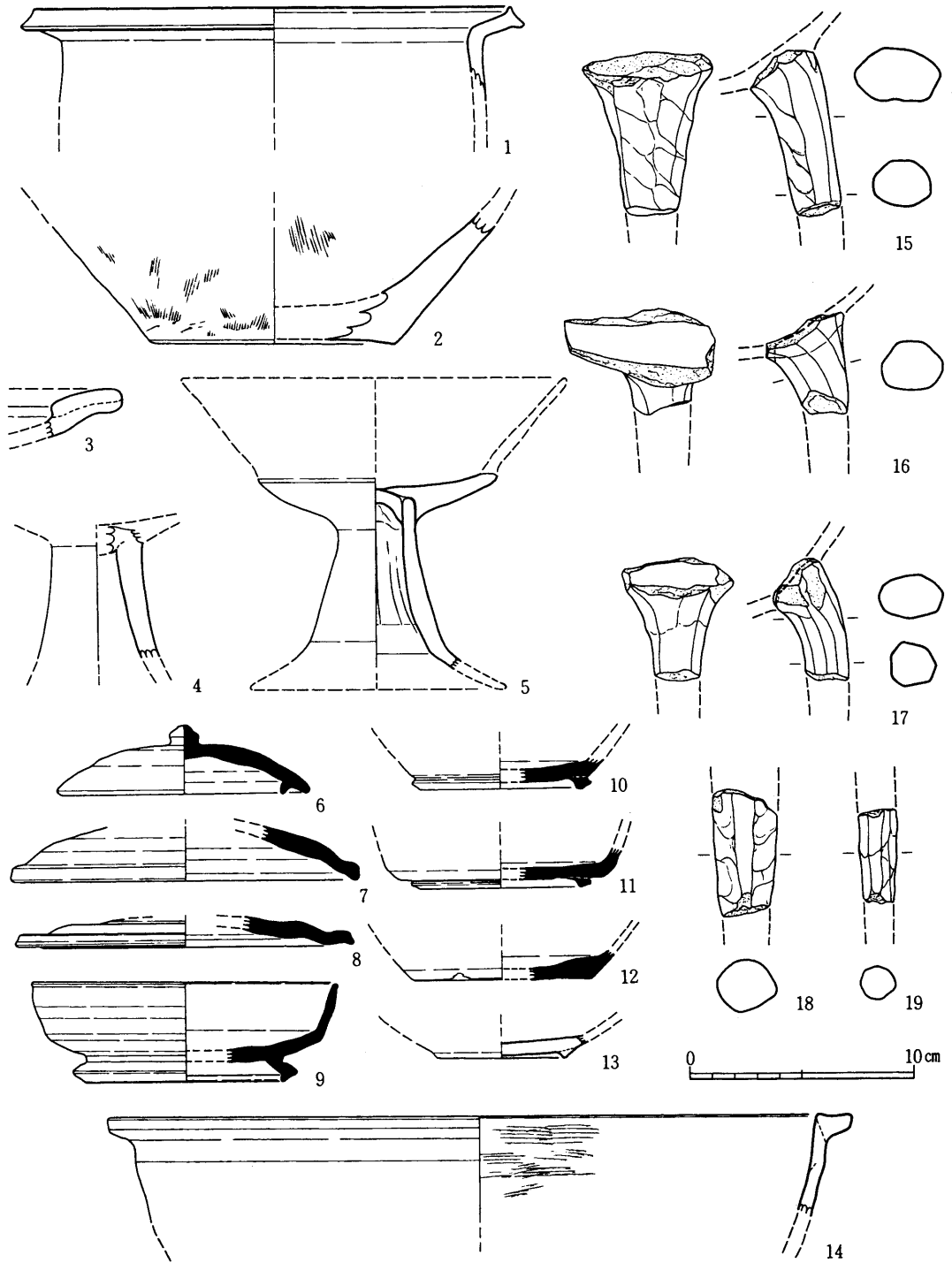


Fig. 36 吉田遺跡表採土器実測図

3 出土遺物

第Ⅰ地区A区からは、弥生時代中期後半・古墳時代前期を中心に、弥生時代前期から中世までの土器が出土している。また、帰属時期は明らかでないが、石器類も出土している。

本資料は1966年に発掘されてから、コンテナ内に各出土トレンチごと袋に仕分けられて保管されてきた。しかし、袋の註記と中の土器の註記があわないもの、異なった註記の土器が同じ袋に入っているなど、過去に混乱していることがうかがえた。註記のない資料も多数あり、各出土トレンチ別に掲載することは不可能であった為、各時期ごとに類別、掲載した。ただし、出土地点の註記があるものについては、観察表にまとめた。

なお、第4トレンチ出土の弥生時代中期後半土器については、遺構一括と考えられ出土状況写真もある為、付篇三で接合関係から遺構一括資料の復元を試みた。

弥生時代前期 (Fig.37～42, PL.8・9・10・11・12)

壺 (Fig.37-20～22・25・26, PL.9・10)

20～22は前期前半、25・26は前期後半の壺である。22は口縁部と頸部の境に段を有する。内外面にはミガキが施されるが、外面には一部ハケ痕を残す。21は精製小形壺である。風化が著しく色調は赤褐色を呈し、内外面の調整は残っていない。頸胴間の粘土紐接合による段、同じく口頸間の段、胴部が張る特徴は板付Ⅱa式小形壺に類似するものである²¹。

25は長大化した頸部外面に、板状工具（無条線）による押圧沈線が11条以上施される。口縁部内面には1条の突帯がめぐる。内面の最終調整がミガキであるのに対し、外面はハケ調整を残す。26は頸部が長大化した無文の壺である。内面にはハケ工具痕が残される。

甕形土器 (Fig.37-23・24, PL.10)

23は前期前半の甕であり、24は前期後半の甕である。23は口縁部と胴部の境に段を施す。口縁部には、強いヨコナデが施されるが、部分的にハケを残す。24は風化及び土中鉄分の付着が著しい。外面には横方向のハケ調整を施す。

鉢 (Fig.37-27, PL.9)

無頸壺とも呼べるような頸部のすばまった球体の胴部をもつ。口縁部は欠失する。無文で、内外面にはハケ調整後にミガキが施される。

有文壺底部 (Fig.37-28～31, 41-110, PL.10)

28・29・110は、胴部側を低めることによって、胴底部間に段を作り出す壺底部である。30・31は底部側面に、貝による押圧沈線を施す壺底部である。30は鋸歯状圧痕のつかない、31は鋸歯状圧痕のつく貝殻が用いられている。

出土遺物

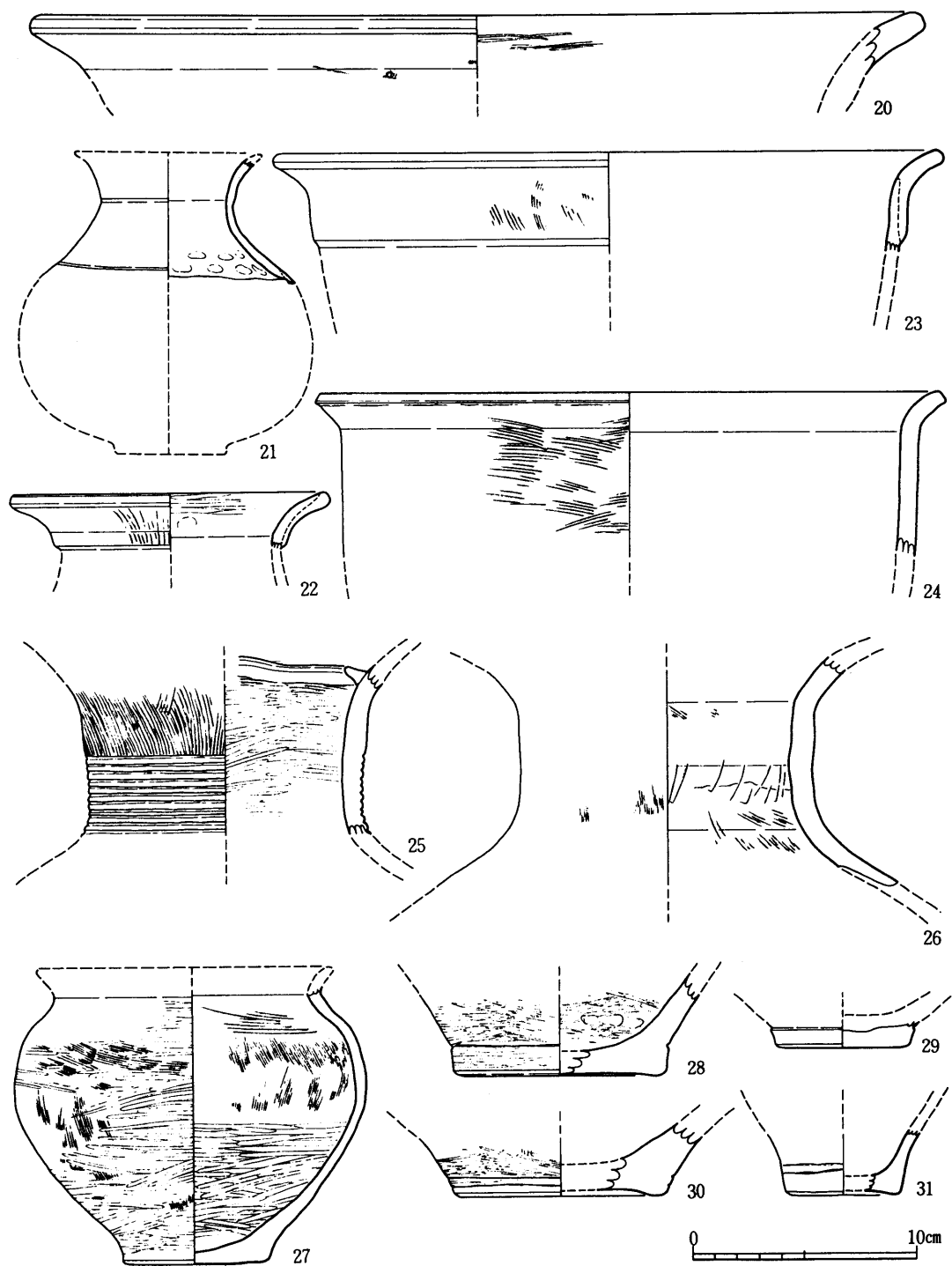


Fig. 37 A区弥生時代前期土器実測図 (1)

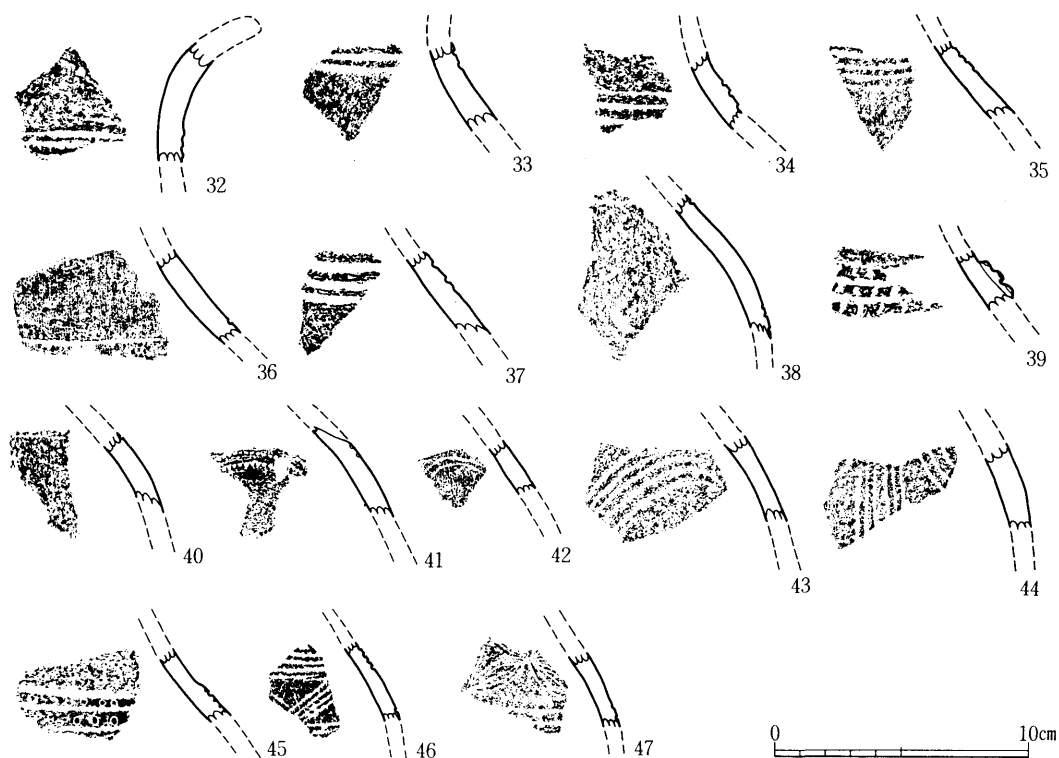


Fig. 38 A区弥生時代前期土器実測図 (2)

有文壺 (Fig.38-32~47、39-48~81, PL.8・9)

文様をもつ破片を拓本によって表示する。32~38は沈線のみのものである。32~35は偏平で幅の広い削り出し突帯上に、沈線を加えるものである。32は板状工具（条線有り）による押圧沈線である。33は風化のため沈線工具は不明である。34は板状工具（無条線）による押圧沈線である。35は鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧沈線である。36・37はヘラ描き沈線である。36は最終調整のミガキ後に沈線が施される。38は鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧沈線である。

39は貼り付け突帯である。偏平で幅の広い突帯を貼り付けた後、2条の沈線を施し3段の突帯とする。突帯上にはキザミを施す。

40~44は連弧文をもつものである。40・41は鋸歯状圧痕のつく貝殻、42・44は鋸歯状圧痕のつかない貝殻による施文である。43はヘラによる施文である。

45は沈線間に竹管の連続刺突文をもつ。46は鋸歯状圧痕のつく貝殻による山形文である。47は鋸歯状圧痕のつく貝殻による木葉文である。

出土遺物

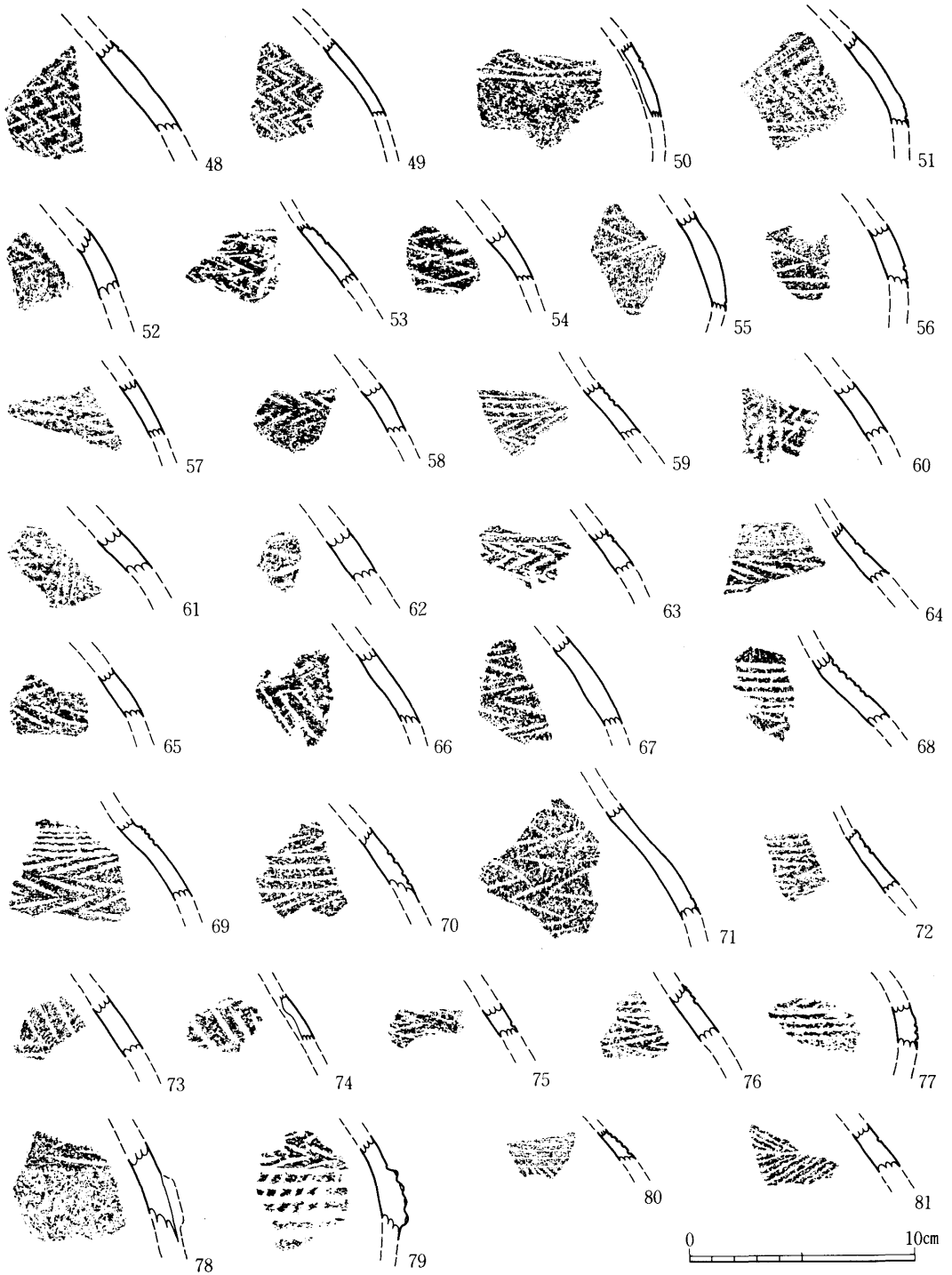


Fig. 39 A区弥生時代前期土器実測図 (3)

48～60は鋸歯状圧痕のつかない貝殻による羽状文である。48・49・60は貝殻押圧幅の一単位が短い。48は破片上端に胴部文様帯上部を区切る直線文がわずかに残る。なお、外面に赤色顔料の付着していた痕跡がある。60は文様帯に、2条の縦の仕切り線を入れるものである。

50～59は貝殻押圧幅の一単位が長いものである。50は2条の直線文によって、胴部文様帯下部を区切る。この直線文も、鋸歯状圧痕のつかない貝殻の押圧による。53は頸胴間に段を有する。段の下に、胴部文様帯上部を区切る2条の直線文を施す。55は破片下端に文様帯下部を区切る直線文がわずかに残る。56は2条の直線文によって、胴部文様帯を区切る。この直線文も鋸歯状圧痕のつかない貝殻の押圧による。59は破片上端に胴部文様帯を区切る直線文が四条確認できる。

61～79は鋸歯状圧痕のつく貝殻による羽状文である。61は文様帯に3条の縦の仕切り線を入れるものである。63は破片上端に、胴部文様帯上部を区切る直線文が2条確認できる。直線文は鋸歯状圧痕のつかない貝殻の押圧による。64は2条の直線文によって、胴部文様帯上部を区切る。直線文は鋸歯状圧痕のつく貝殻の押圧による。68は6条の直線文によって、胴部文様帯上部を区切る。直線文は鋸歯状圧痕のつく貝殻の押圧による。69は頸胴間に段を有する。段の下に胴部文様帯を区切る4条の直線を施す。直線文は鋸歯状圧痕のつく貝殻の押圧による。70は鋸歯状圧痕のつかない貝殻によって施された、4条の直線文の上下に羽状文を配置する。72は頸胴間に段を有する。段の下に胴部文様帯上端を区切る3条の直線文を施す。直線文は鋸歯状圧痕のつかない貝殻の押圧による。75～77は削り出し突帯を有する。78～79は貼り付け突帯を有する。78は貼り付け突帯が剥離し、剥離面にハケ調整が残る。

80・81は綾杉文である。80は最終調整であるミガキが施された後に、ヘラによって文様が施される。外面には赤色顔料の痕跡が残る。小形有文精製壺の破片と思われる。81は鋸歯状圧痕のつく貝殻によるものである。

有文鉢 (Fig.40-82, PL.9)

口縁部は欠失するが、直口で碗形の形態と思われる。胴部上半に6条以上のヘラ描き沈線が施される。内外面は風化するが、ミガキ調整が残る。

有文甕 (Fig.40-83～109, PL.9)

83～101は文様が沈線のみのものである。口縁部が残存する83～92のうち、口縁下端部にキザミを施すものは、83・86・88・89・92である。91は口唇部全面にキザミを施す。沈

出土遺物

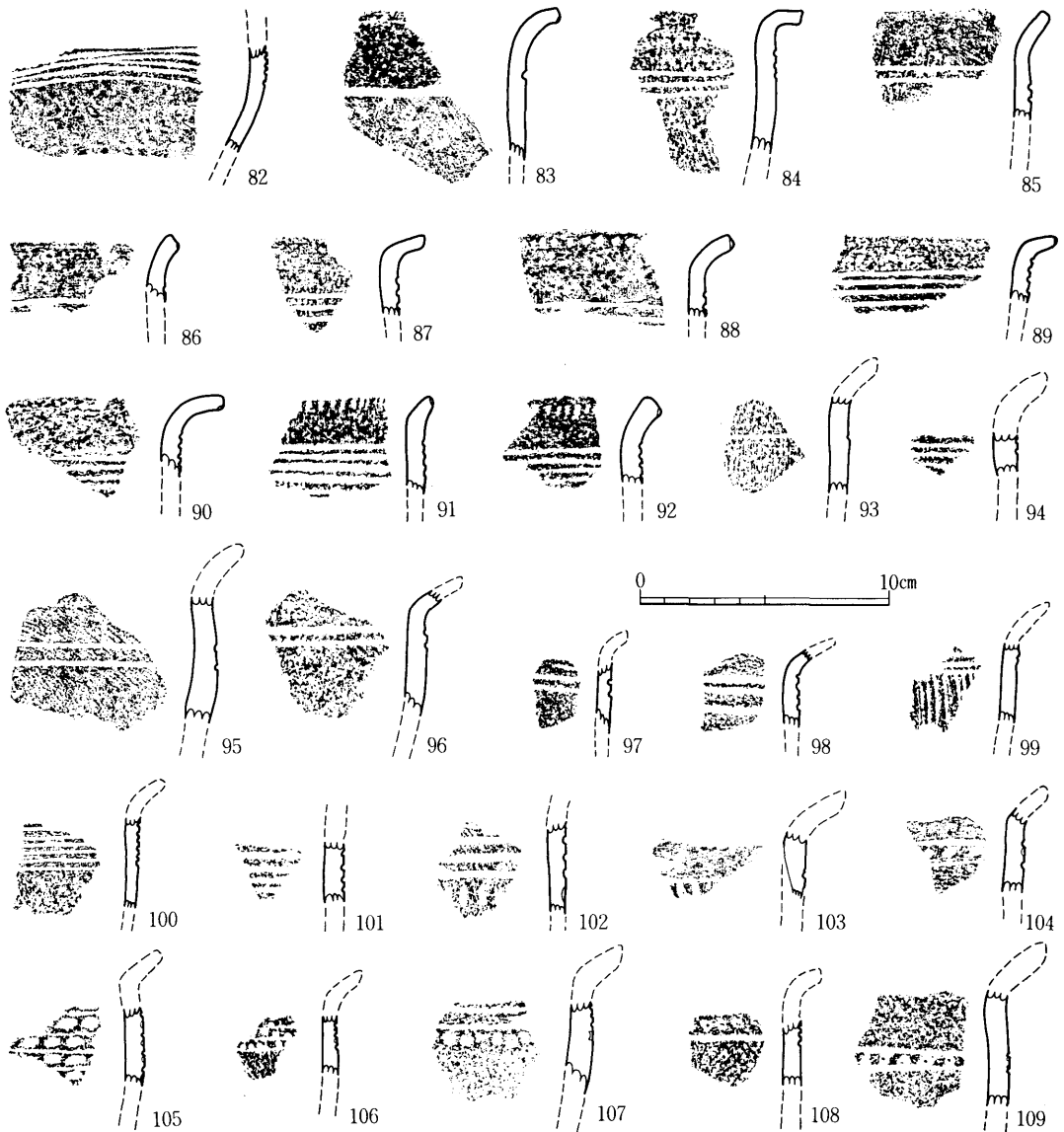


Fig. 40 A区弥生時代前期土器実測図 (4)

線は93・97が板状工具（無条線）の押圧によるもので、残りはヘラ描きである。89～92・100・101は沈線が5条以上の多条のものである。99は削り出し突帯上に、沈線を1条施す。

102～106は列点文を施すものである。102は沈線下に、ハケ状工具を縦に使用して列点文を施す。103～106は沈線間に列点文を施している。106は棒状工具状の先端が尖った工具による施文と思われる。

107～109は、竹管状工具による刺突文をもつ。

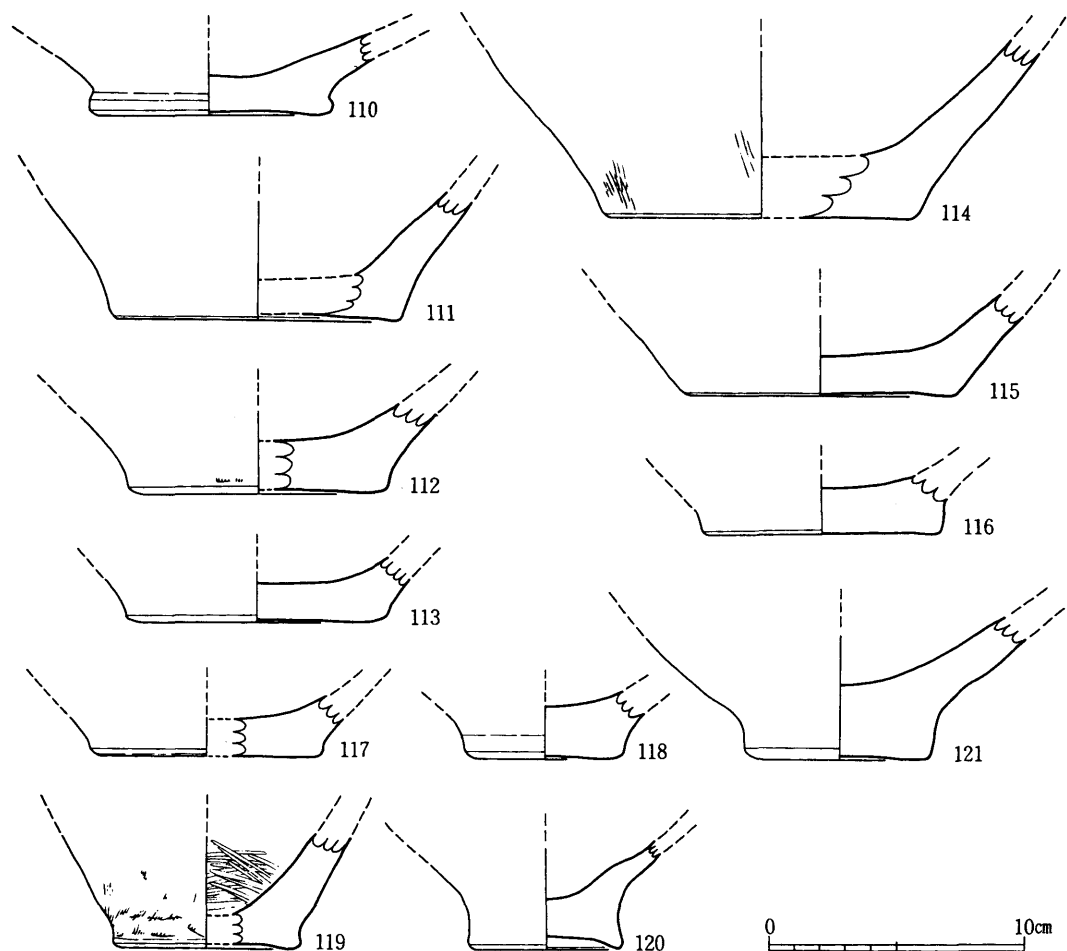


Fig. 41 A区弥生時代前期土器実測図 (5)

壺底部 (Fig.41-111~120, PL.11)

先述した有文の28~31・110に対して、無文の壺底部である。確実な前期弥生土器の特徴はなく、他時期の壺底部に対して若干の形態の違いや胎土の違いから区別したものである。他時期底部が含まれていない、とは言い切れない。

111~118は平底の底部である。いずれも風化が著しく器面調整がほとんど残っていない。わずかに112と114に、ハケ痕が残る。119は底面にケズリが施されやや凹底になる。外面調整はハケ後ナデ、内面調整はミガキである。110~118とはやや形態が異なり、鉢の底部の可能性もある。120・121は突出する底部である。小砂粒が多量に混ぜられている。風化のために調整は残っていない。壺以外の底部の可能性や中期に降る可能性もある。

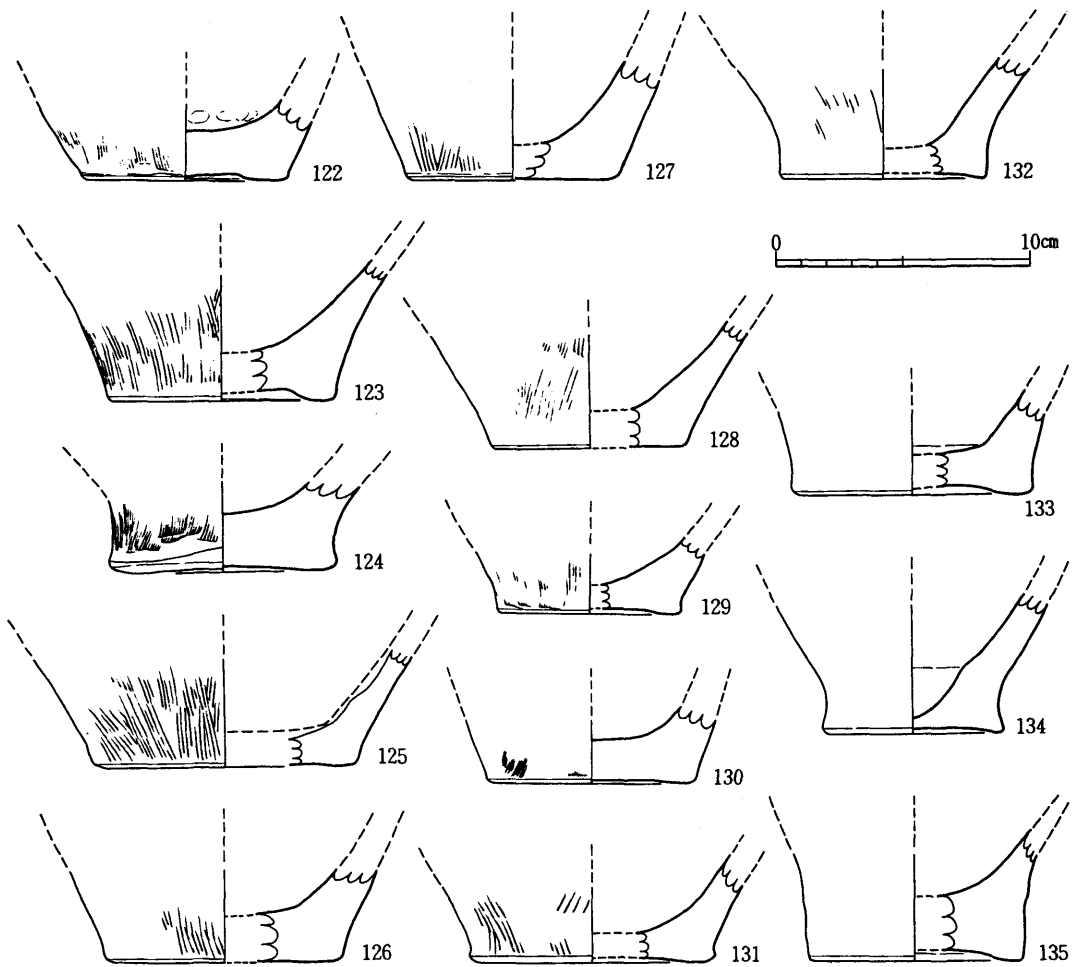


Fig. 42 A区弥生時代前期土器実測図 (6)

甕底部 (Fig.42-122~135, PL.12)

壺底部に対して甕底部は、前期と中期の形態変化が激しく、他時期底部とのある程度までの識別は可能である。

全体的に風化は著しい。122~127は外面がハケ調整で、内面がナデ調整のものである。122・123は底面が低い高台状になる。弥生時代前期に特徴的な甕底部である。122の底面にはモミ圧痕がある。128~131は外面がハケ後ナデ調整、内面がナデ調整のものである。

132~135は、前期と断定できないものをまとめた。132~133は、内外面ナデ調整である。134は2次焼成により器面の荒れが激しく調整が残っていない。135は円筒状に突出ぎみの底部で、中期に降る可能性がある。

弥生時代中期 (Fig.43~54, PL.13~22)

第 I 地区 A 区出土土器の主体を占めるのが、中期弥生土器である。また、その大半が中期後半に属するものである。これは「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピットを検出した」と概報にあるように、弥生時代中期後半の遺構を検出したことに起因するであろう。これら弥生時代中期後半土器には、第 4 トレンチの註記をもつものが多い。前述したように第 4 トレンチは、「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピット」に相当すると思われる。事実、この「不整形のピット」出土状況写真に写った土器片には、第 4 トレンチの註記がなされている。第 4 トレンチの註記をもつ土器には、垂下口縁壺や北部九州系土器があり、遺構共伴していた可能性がある。これについては、付篇三で検討を行ったので参照されたい。

なお、明らかに北部九州系の土器と識別できるものについては、その記述にあたって他の土器と区別した。同じく甕の中には、瀬戸内特有の特徴を有するものがある。これも区別して記述した。

北部九州系無頸壺 (Fig.43-136, PL.13)

球形の体部に水平に張り出した口縁部をもつ。口縁端部はやや肥厚する。底部は平底であるが、ややくぼんでいる。最大胴径は器高をしのぐ。器高41.9cm、最大胴径43.2cm、口径23.8cm、底径10.4cmを測る。ほぼ完形に復元できる。

胴部上半に 3 条の、胴部中央に 5 条の低い断面 M 字状突帯をもつ。胴部上半の突帯は上端、下端とも均等にナデられるが、胴部下半の突帯は上端だけに力が加わり、下端は接合痕を残したままとなる。器形に左右されたものと思われる。口縁端面は断面 M 字状突帯と同じく中央がややくぼむ。突帯が断面 M 字状をなすのは、北部九州系土器の特徴である。突帯貼り付け時のヨコナデ手法に起因するものであろう。

外面調整は、底部から胴部上半突帯の下まで横方向のミガキである。突帯及び突帯間にはミガキが施されない。内面調整はハケ後ナデのようであるが、丁寧にナデられており、ハケの痕跡はほとんど残らない。底面付近に一部残る程度である。底部側面には、横約 6.5cm、縦約 1.8cm の穿孔が施される。この穿孔は焼成後の打ち欠きによるものである。廃棄時に行われたものであろうか、その特殊性が考えられる。

また、この無頸壺はその胴部突帯破片が、「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピット」出土状況写真に写っている。第 4 トレンチ遺構出土土器として断定できる資料である。

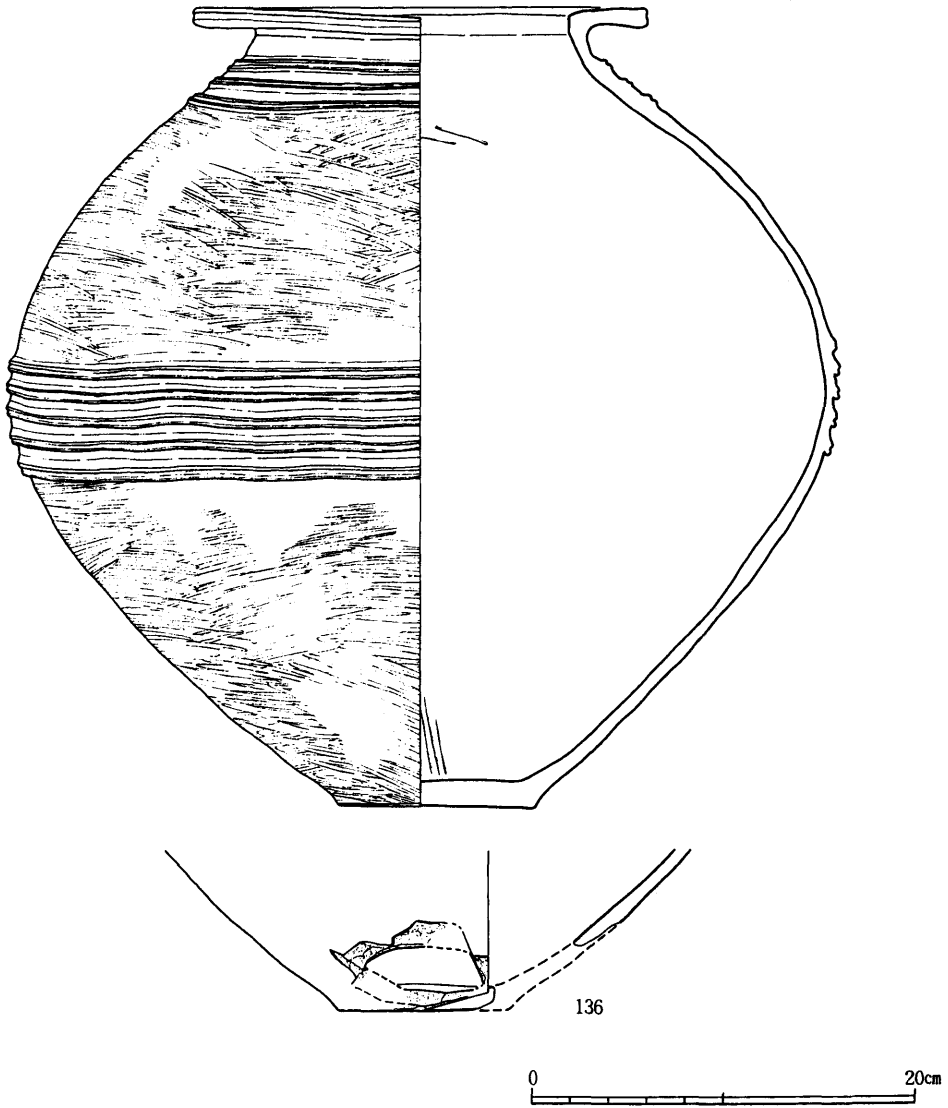


Fig. 43 A区弥生時代中期土器実測図 (1)

このタイプの無頸壺は「無頸壺Ⅱ類」と呼ばれ、北部九州でも遠賀川以東地域で盛行する。山口県では豊浦郡菊川町下七見遺跡第14地区・SK-98³⁾から上半部が出土している。山口県では全形を知りうる例はなく、この吉田遺跡第I地区A区出土土器が初例となる。ただし、北部九州で出土するものとは若干異なる部分がある。北部九州の無頸壺が胴部中央から上半に、等間隔に離して一条ずつ突帯を貼り付けるのに対して、吉田遺跡のものは胴上半部と胴部中央に突帯を帯状にまとめて貼り付けている。一つの地方変容形であろうか。

北部九州系壺 (Fig.44-137~141, PL.13・16)

鋤形口縁をもつもの、断面M字状の突帯をもつものを一括した。137は長大化した頸部と、外に水平方向にのび内面を肥厚させた鋤形口縁をもつ。頸部は5条まで、断面M字状突帯が残存する。外面調整は風化しており、判読することができない。内面調整は、ナデである。山口県では奥正権寺遺跡第V区SD-1⁵⁾に類例がある。

138は137の壺と同じタイプの鋤形口縁の破片と思われる。139は外面にあまり口縁部が突出しないものである。140は、137の壺と同じタイプの頸部片と思われる。141は胴部に断面M字状の突帯を貼り付ける。

北部九州系広口壺 (Fig.44-142~144, 46-163, PL.13・14)

143は器壁が厚く、口縁端部に面をもつもので、142・144に比べ若干古手の様相がある。口縁部には強いヨコナデが施され、内面がややくぼむ。胴部外面調整はタテミガキ、頸部外面調整はタテミガキ、内面調整はナデである。142は球体の体部をもち、口縁部がラッパ状にひらく。口縁端部はヨコナデによって跳ね上げ状になる。内外面ともに土中の鉄分が付着し風化がはげしいが、頸部外面調整はタテハケ後タテミガキ、胴部外面調整はタテハケ後ヨコミガキである。内面は丁寧にナデられる。

144は胴部上面に張りをもち、口縁部がラッパ状にひらく。口縁端部はヨコナデが施され、端面が凹線状にくぼむ。胴部下半調整は、底部方向からのタテケズリ後タテミガキ、胴部上半調整は横方向のケズリ後ヨコミガキである。頸部にはミガキが施されず、ハケ調整が残る。内面は丁寧なナデ調整である。この広口壺の破片が「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピット」出土状況写真に写っている。

163は胴部上半より上を欠くが、その器形より北部九州系広口壺胴部と判断した。他のものに比べやや大形である。外面調整は底部側面を左方向にヨコケズりする他は、タテハケ後にタテミガキが施される。内面調整はハケ後ナデである。

小形短頸壺 (Fig.44-145~148, PL.13・14)

145は胴部上半に張りをもち、口縁部が広く外反する。口縁端部は面をもつ。胴部外面調整はタテハケ後ナデである。内面はナデ。146は胴部中央よりもやや上に張りをもち、口縁部がラッパ状にひらく。口縁部はヨコナデによってやや跳ね上げ気味になる。外面調整はタテハケ後ナデ、内面調整は丁寧なナデである。147は長胴の胴部に短く直立した口縁部をもつ。外面はタテハケ後丁寧なナデが施される。内面も丁寧なナデである。148は下膨れの胴部に短く開いた口縁部がつく。体部外面調整はヨコミガキ、内面は丁寧なナデである。148は「不整形のピット」出土状況写真に写っている。

出土遺物

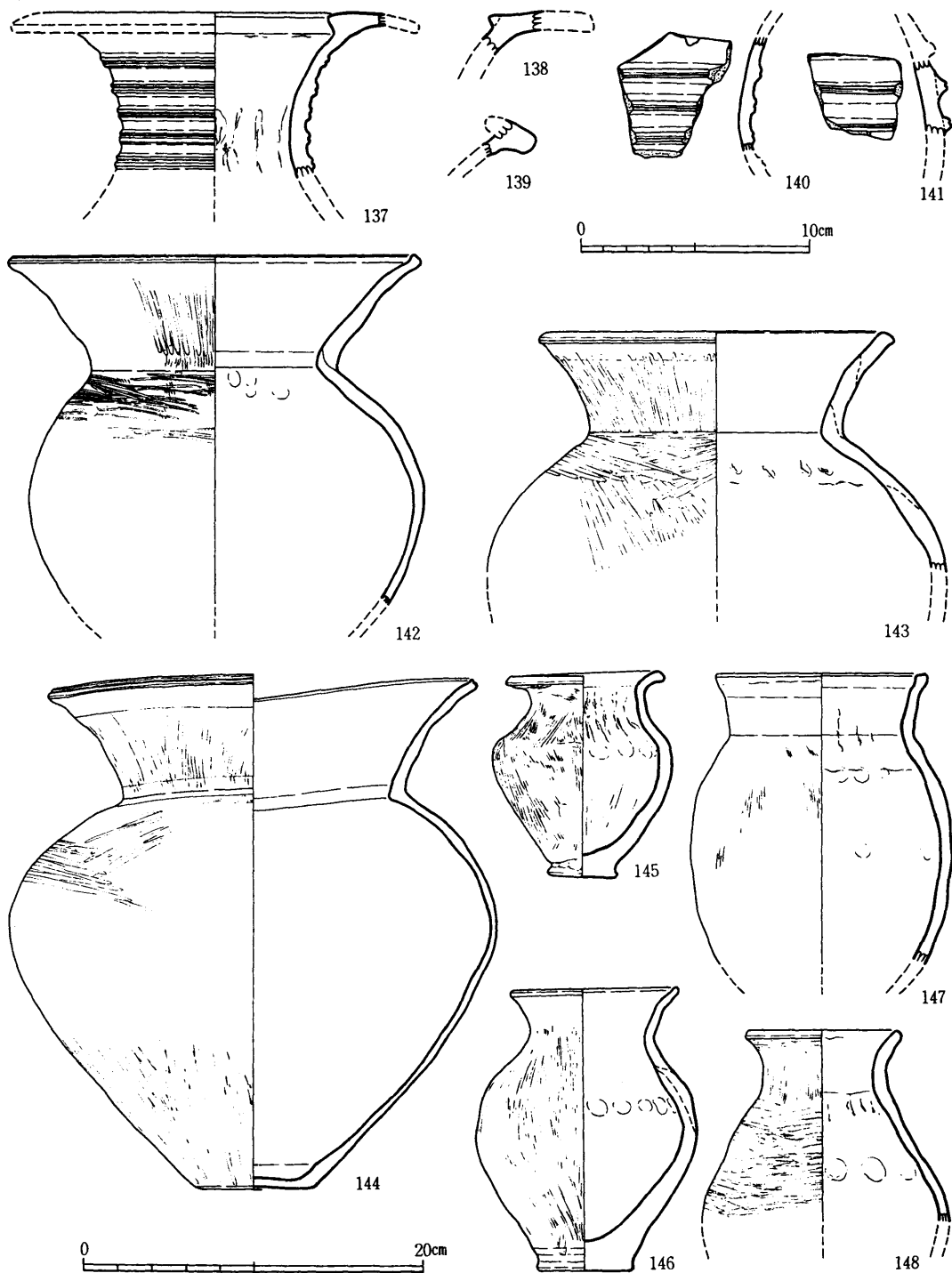


Fig. 44 A区弥生時代中期土器実測図 (2)

垂下口縁壺 (Fig.45-149~162、46-164・165、47-166~171、PL.14・15・16)

162は胴部下半を欠くが、口縁部から胴部上半までの器形を知ることができる。胴部は丸く、さほどすばまらない頸部にラッパ状に開いた頸部がつく。口縁垂下部は、垂下というよりは斜め下方向に突き出した形態となる。頸部には3条の細い断面三角突帯が施される。垂下部外面には板状工具先端の押圧による山形文が施される。胴部外面調整はハケ後ヨコミガキである。頸部にはミガキが施されず、タテハケ調整が残る。胴部内面調整はタテハケ後ナデである。口縁内面は風化が著しく調整が判読できない。頸部内面には、シボリ痕が明瞭に残る。

149~154・157・158は口縁部である。149は垂下部外面に文様を施さない。口縁内面には、ミガキ調整が施されるが粗く、下地のヨコハケ調整を明瞭に残す。150は風化が著しく、口縁部上面も欠損している。垂下部外面に一部山形文を確認することができる。151は口縁部と垂下部の屈曲部分に強いヨコナデが施され、やや外方に突出する。垂下部外面には半截竹管状の工具によって、2条1組の山形文を施す。口縁内面はヨコハケ調整のみである。152は垂下端部を欠く、口縁部と垂下部の屈曲部分が強いヨコナデによってつまみだされる。口縁外面には、板状工具の押圧によって山形文を施す。円形浮文が口縁内面に貼り付けられる。風化が著しい為、調整の判読ができないが、口縁内面はハケ調整をナデあるいはミガキによって消す。153は垂下部の大部分を欠く、残存部に山形文が残る。口縁外面は風化するが一部にタテハケを残す。口縁内面にはミガキ調整が施されるが粗く、下地のヨコハケ調整を明瞭に残す。154は垂下部外面に、板状工具の押圧による山形文を施す。外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整のみでミガキは施さない。157は口縁部と垂下部の屈曲部分に強いヨコナデが施され、やや外方に突出する。垂下部外面に、板状工具による山形文を施す。158は垂下部で剥離する。垂下部外面には、板状工具の押圧による2条1組の山形文が施される。

155・156・159~161は頸部である。155・156は2条の断面三角突帯をもつ。155が1条ずつ貼り付けるのに対して、156は1本の粘土紐の中央を強く、くぼませて2条の突帯としている。共に風化が著しく、調整は判読できない。159・160は共に突帯途中で割れており突帯条数はわからない。160は外面にタテハケ調整を残し、ミガキは施されない。161は突帯よりも下の頸部破片であるが、突帯と直交するように貼り付けられていた2本の棒状浮文の痕跡が残っている。外面の調整は、風化のため判読できないが一部にタテハケ調整が残る。内面にはシボリ痕がある。

出土遺物

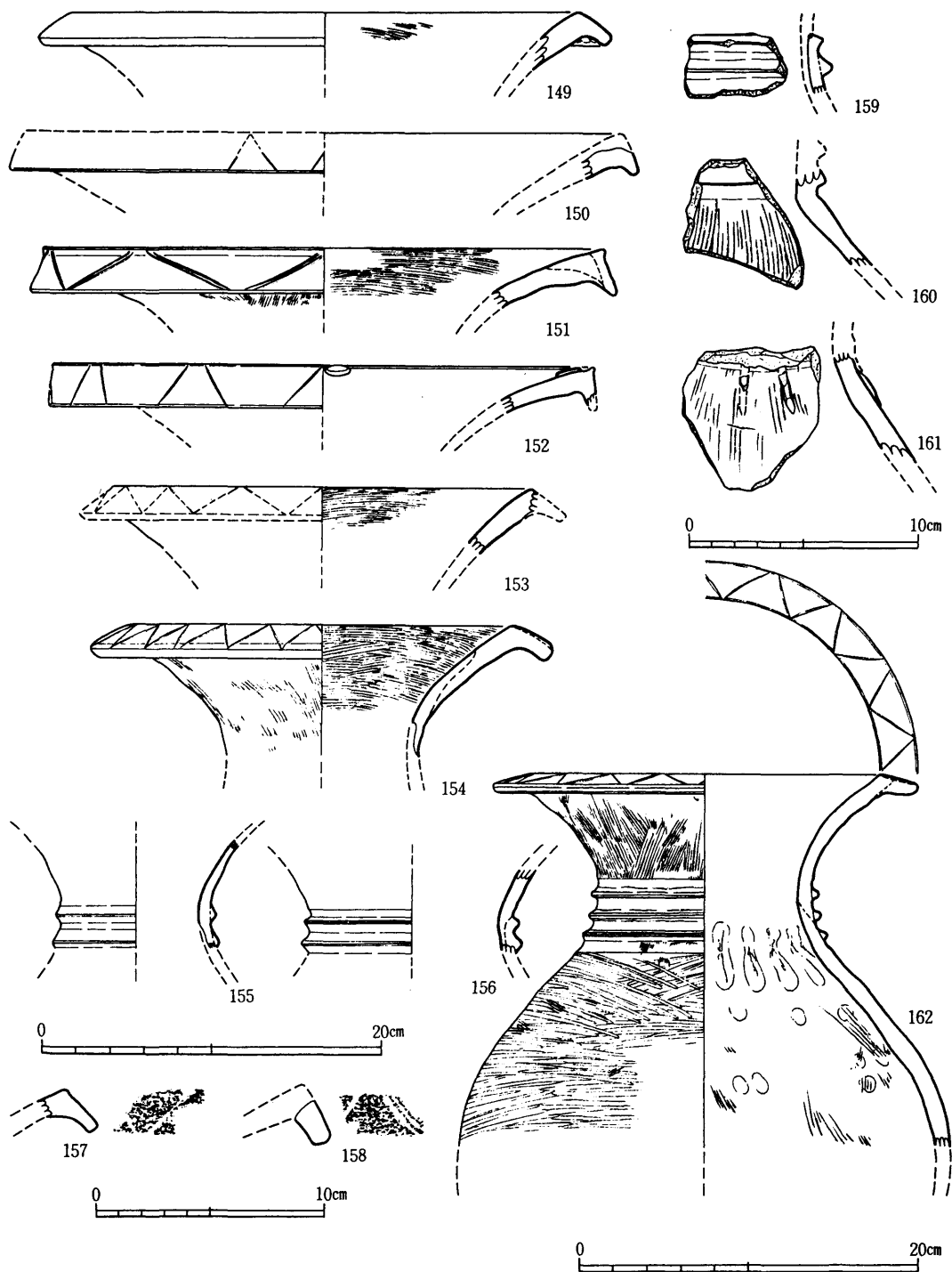


Fig. 45 A区弥生時代中期土器実測図 (3)

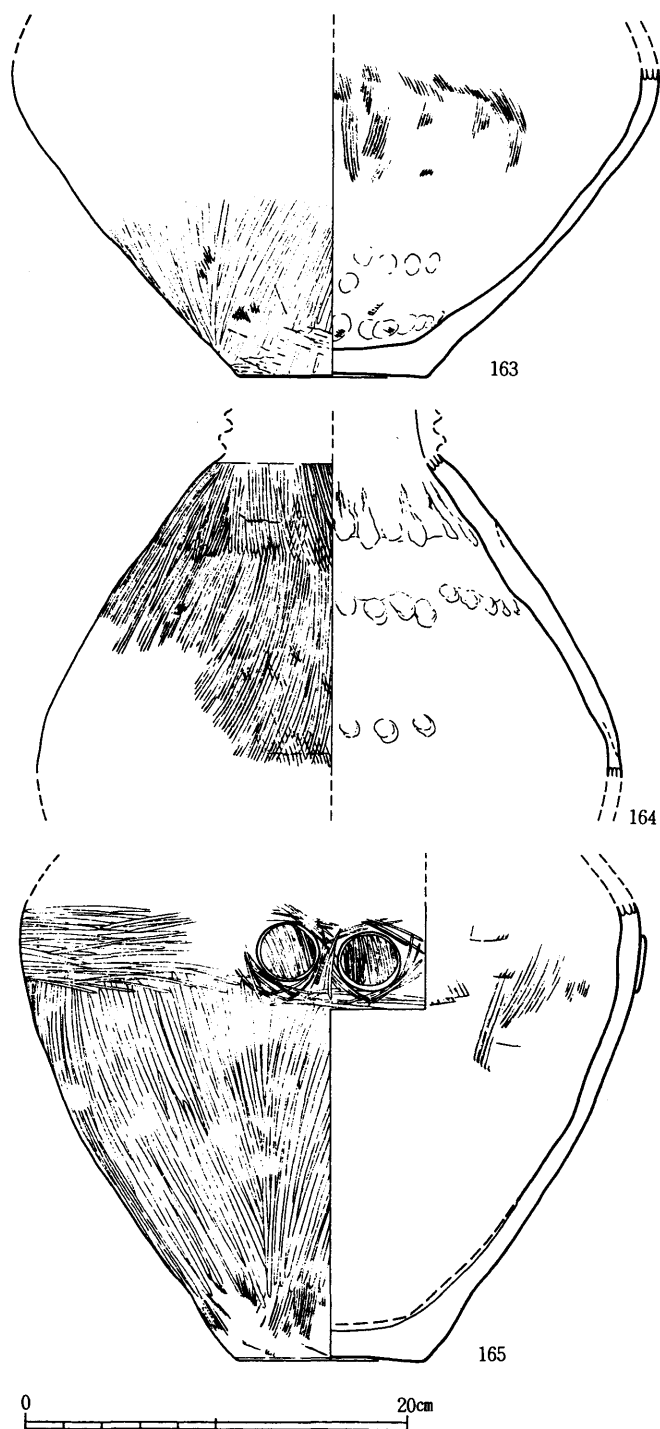


Fig. 46 A区弥生時代中期土器実測図 (4)

164~171は胴部である。
 164・165・171は胴部に突帯を持たないものである。164は外面にミガキを施さず、ハケ調整を残す。内面には多くの指頭圧痕と、シボリ痕を残す。破片上端、頸部下は強いヨコナデによって器面がくぼんでおり、頸部には突帯が貼り付けられていたと想定される。165は胴上半部の最も肩が張った部分に2個1組の円形浮文を貼り付ける。胴部外面下半はタテハケ後、タテミガキを施す。胴部の最も張った部分には、ヨコミガキが施される。円形浮文、その周囲も丁寧にミガキが施される。内面調整は、タテハケ後にナデを施す。底面を削る。171は胴部上半を欠く為、異なる器形の可能性もある。しかし、内面がナデ調整だけであることから壺形土器の底部と判断し、その立ち上がりぎみの胴下半部から垂下口縁壺と判断した。外面の最終調整はタテミガキである。

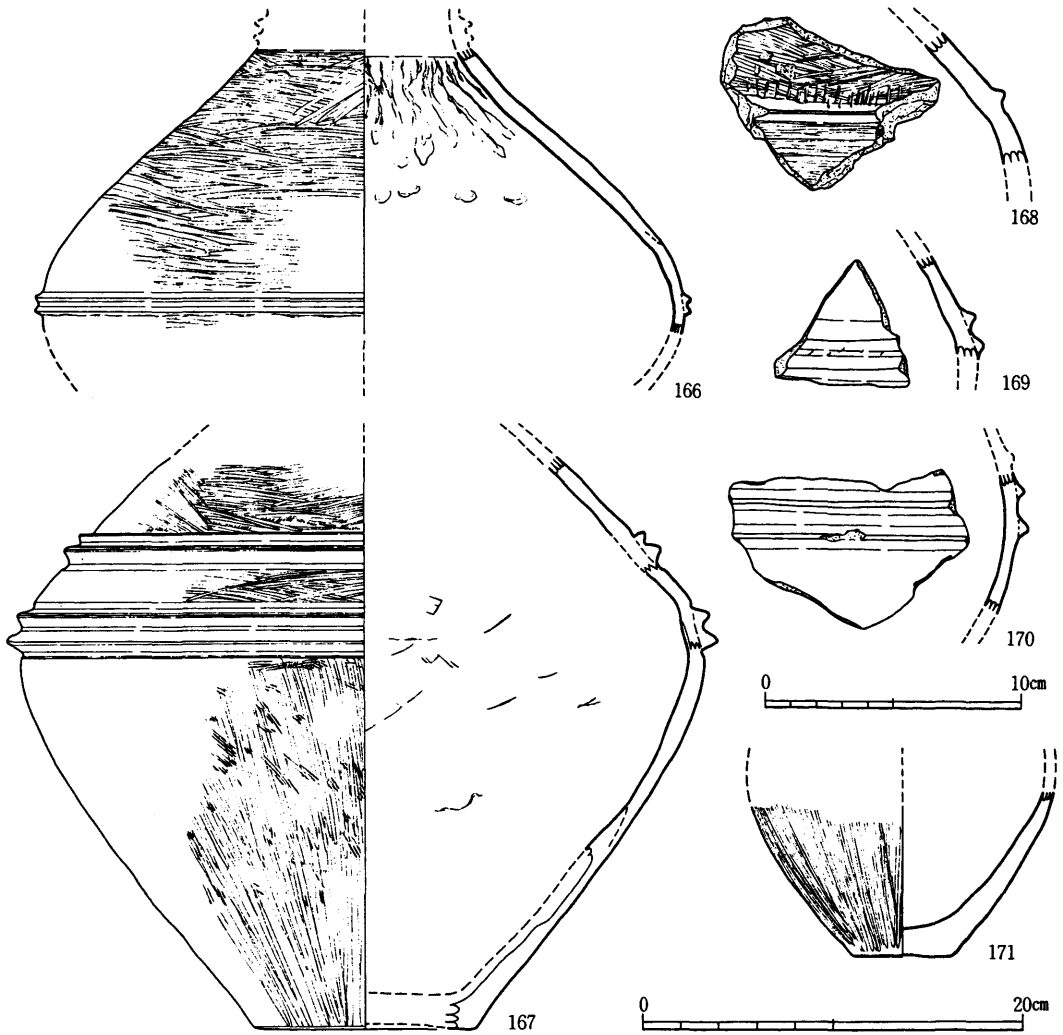


Fig. 47 A区弥生時代中期土器実測図 (5)

166～170は胴部に突帯をもつものである。166は胴部最大径に、1本の粘土紐から作出された2条の突帯を貼り付ける。外面にはヨコミガキ調整が施される。167は胴部中央よりやや上に最大径がある。1本の粘土紐から作出された2条の突帯を、胴上半部に2段に貼り付ける。外面調整はタテハケ後タテミガキを施す。168は1条の断面三角突帯を貼り付ける。

169・170は、突帯部分で破片になっており突帯数がわからない。なお、169・170は突帯断面が三角であることから、M字状突帯をもつ北部九州系壺とは分離して、垂下口縁壺に含めた。ただし、北部九州系壺に断面三角の突帯がないわけではない。169・170の胎土は、他の垂下口縁壺に比べ精良で、北部九州系壺の可能性がある。

北部九州系甕 (Fig.48-172~177、49-179, PL.16・17)

173~176は口縁部と胴部の境に突帯を有し、確実な北部九州系の特徴をもつものである。175は断面M字状の突帯が貼り付けられる。内外面の風化が著しい。173・174・176は断面三角の鋭い突帯を貼り付ける。突帯上には、キザミを施さない。173・174は同じタイプの大形品、中形品とも言うべきもので器形、調整ともに似ている。胴部には張りをもち、内面に稜をもって口縁部が外反する。口縁端部はヨコナデによって上方につまみ出され、口縁端面はやや中くぼみになる。ともに胴部外面にはタテハケ調整が施され、胴部内面にはナデ調整がおこなわれる。また、胴部突帯下は突帯貼り付け時の幅広いヨコナデによって、タテハケ調整が部分的に消される。これらは、北部九州須玖Ⅱ式併行とされる特徴である。

172・179は、北部九州系甕の地方変形と考えられるものである。179は肉厚の口縁部が、胴部にたいして直角につく。胴部には粗いタテハケが施される。鋤形口縁甕の変形と思われる。172は口縁部と胴部の境より、わずかに下がった位置に無キザミの断面三角突帯を貼り付けるものである。口縁端部は面をもつ。

瀬戸内系甕 (Fig.48-178、49-180~183, PL.16・18)

180は逆L字状の口縁をもつものである。胴部のやや張った部分に棒状工具による三角刺突が施される。口縁端部にはキザミを施す。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコミギキである。178・181・182は、口縁部下の断面三角突帯にキザミを施す。このうち、181は突帯の突出が高く、キザミも細かい。183は突帯が剥落するが、上述のものと同じ突帯を有すると考えられる。

甕 (Fig.49-184~195、50-196~206, PL.17・18・19)

明確な北部九州系・瀬戸内系の要素を示さないものをまとめた。184~186は口縁端部をヨコナデによってつまみあげるが、跳ね上げ状口縁とまでは言えないものである。これらの調整は外面に板ナデ状の擦痕があり、内面はナデである。

188~194は跳ね上げ口縁をもつものである。188・189・190・191は外面調整が、擦痕状のものである。これらは、器壁が極めて薄い。187も口縁が跳ね上げ状になるが、若干器形が異質である。

195~199・202・203は、口縁端部に面をもつものである。200・201は、口縁端部を丸くおさめる。204~206は、口縁端部が凹線状にくぼむものである。206は胴部が張り、新しい様相が見られる。なお、203はその破片が、「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピット」出土状況写真に写っている。

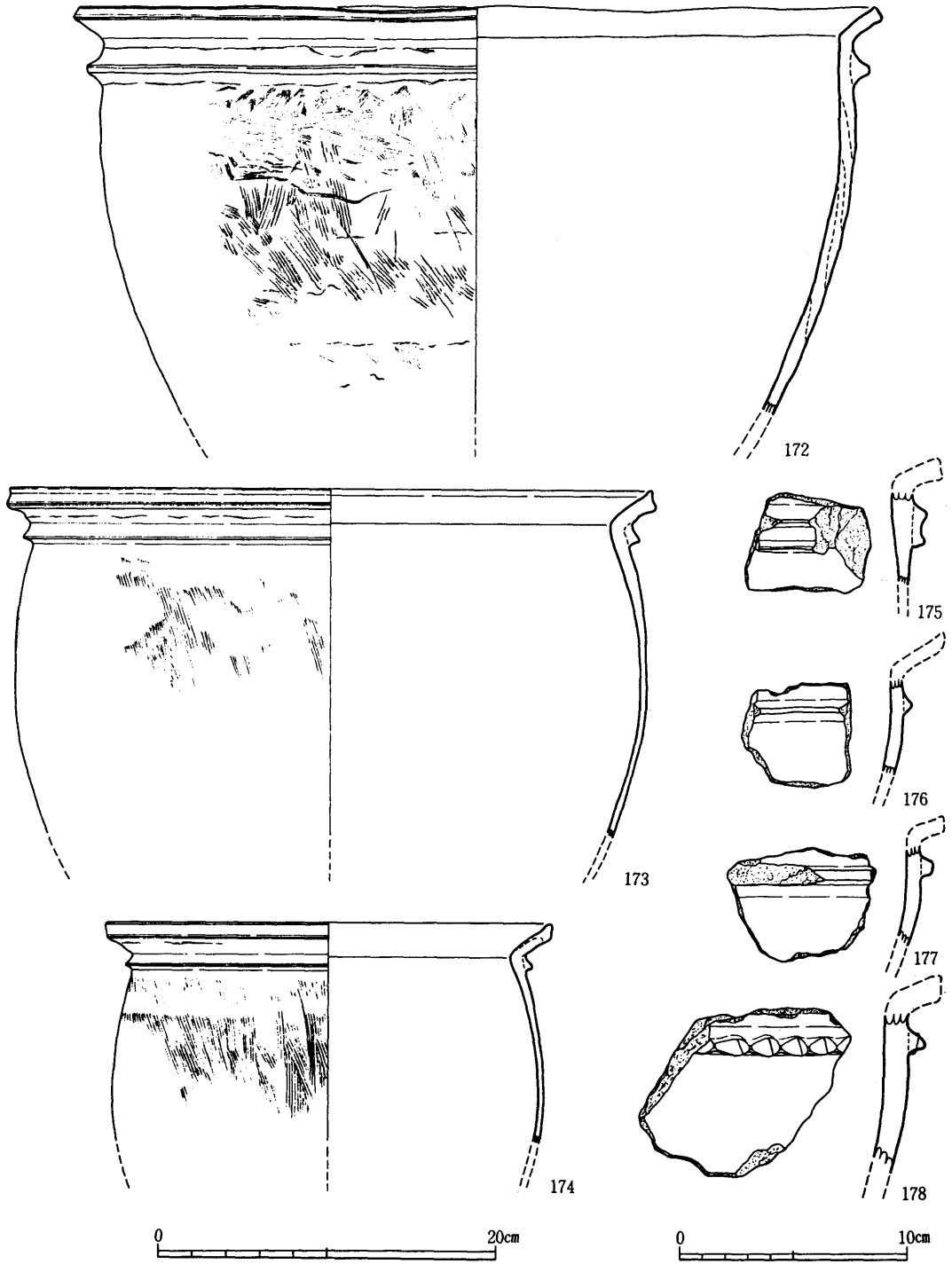


Fig. 48 A区弥生時代中期土器実測図 (6)

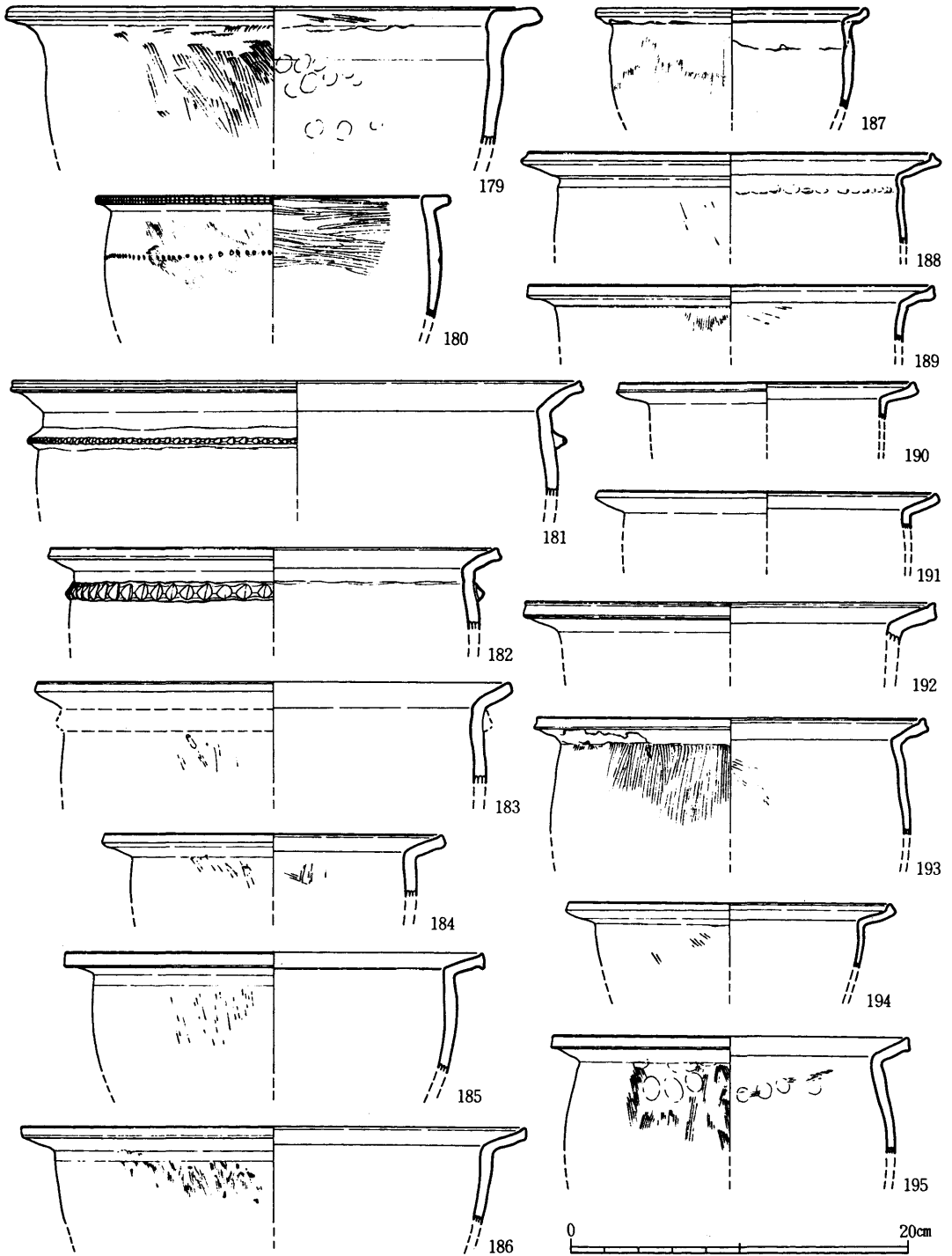


Fig. 49 A区弥生時代中期土器実測図 (7)

出土遺物

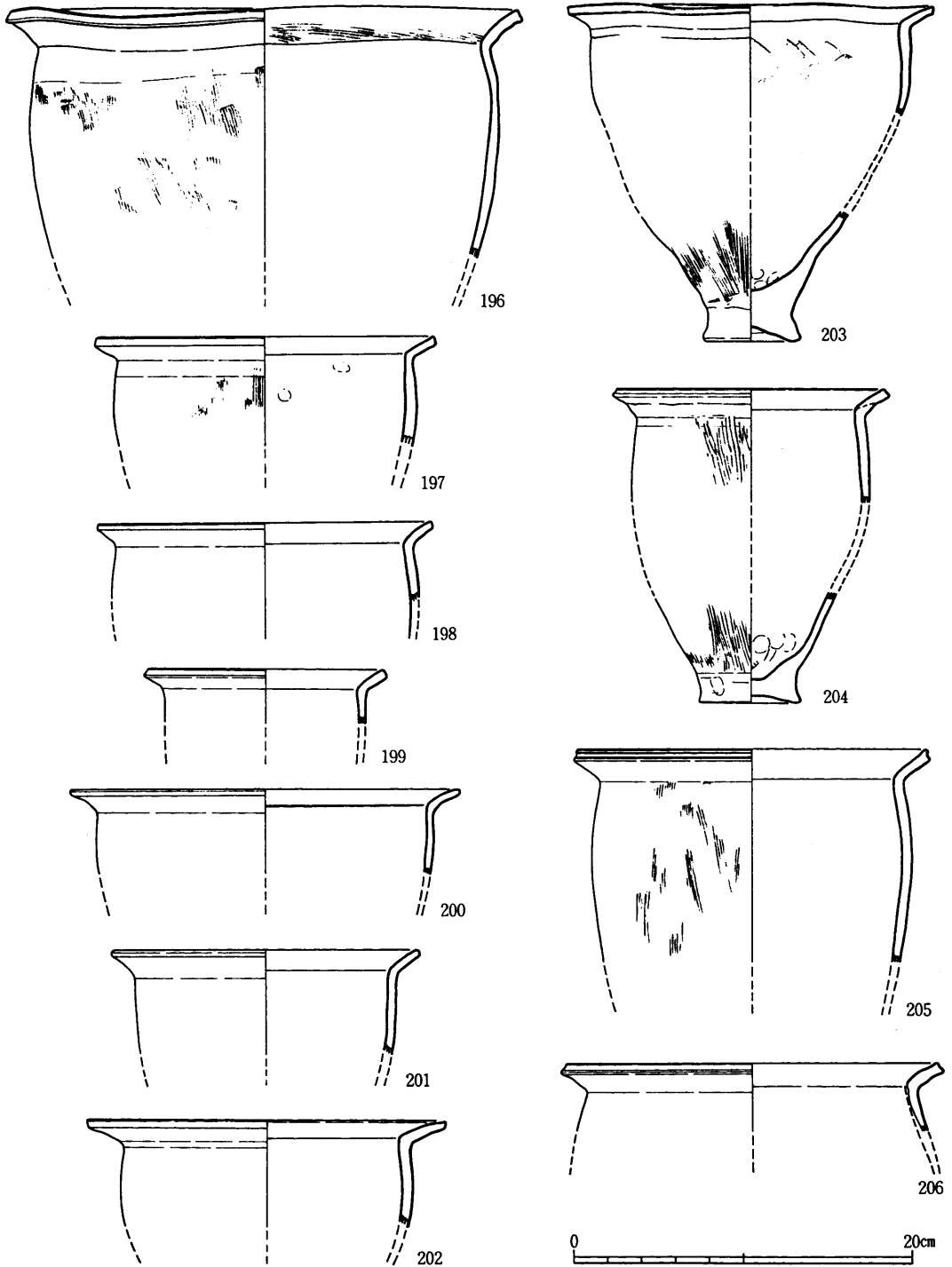


Fig. 50 A区弥生時代中期土器実測図 (8)

高坏 (Fig.51-207~215, PL.20)

207は瀬戸内系高坏の坏部である。口縁部は短く立ち上がり、上端部には面をもつ。外面の口縁部と坏部の境は口縁部がやや内側から立ち上がり、さらにこの境にヨコナデを施すため外面坏部端が突出する。外面口縁部中央やや口縁端部よりがヨコナデによって軽く凹線状にくぼむ。風化が著しいため、内外面の調整は判読できない。

211は口縁部を欠いた坏部である。やや坏部は深い。脚部とは接合部ではずれ、脚部との接合面が円錐状に突出する。接合痕から観察する限りにおいて、円板充填技法というよりは、ソケット状に作った坏部を別に作った脚部に組み合わせたものと思われる。内外面の風化が著しい。

208は脚部である。坏部を欠くが、脚部上端外面の坏部との接合痕は明瞭である。脚部高が11.5cmに対して、裾部径は22.8cmと裾部がかなり広がる。また、柱状部の径が7cmあり、脚部高に対して太い。裾部径や柱状部径に対して、脚部高が低くややアンバランスである。器壁が薄く脚部は筒状になるが、円板充填技法が用いられていたと考えられる。裾端部には面をもつ。外面調整は風化が著しいため残らない。内面も風化が著しいが、右から左方向のケズリ調整が残る。また、裾部には内外面ともに、幅約3cm程にわたってヨコナデが施され、これにかかった内面のケズリ調整が消される。

212~215は、脚柱状部片である。213・215は坏部円板充填技法の良好な資料である。212は柱状部上部の破片である。一部に坏基部を残す。円板充填部分は欠損する。外面は風化が著しく調整は残らない。内面にはシボリ痕がある。213は保存状態が良好で調整が残る。外面調整はタテミガキである。また、外面にある坏部との剥離面には、接合部を密着させるためカラセン状のタタキ調整が施されている。内面には放射状に縦のシボリ痕はいる。215は脚部と坏部の接合痕及び、円板充填が明瞭に残る。この接合痕によれば、その成形技法は筒状の柱状部をつくり、その上に開いた坏基部を積み上げ、円板を充填している。内外面の風化は著しく、調整は残らない。214は柱状部から脚裾部の破片である。裾端部を欠く。筒状の柱状部から、裾部がゆるやかに広がる。内外面の風化は著しい。外面には調整が残らない。内面にはシボリ痕が残る。

209・210は脚裾部片である。209は裾部があまり広がらず、端部は丸く収める。内外面ともに風化が著しいが、外面にはミガキ調整の痕跡が残る。210は裾部がハの字状に広がるもの。裾端部をヨコナデによって下方につまみだす。外面調整はハケ後ナデ、内面調整は左上がりのヨコハケを残す。

出土遺物

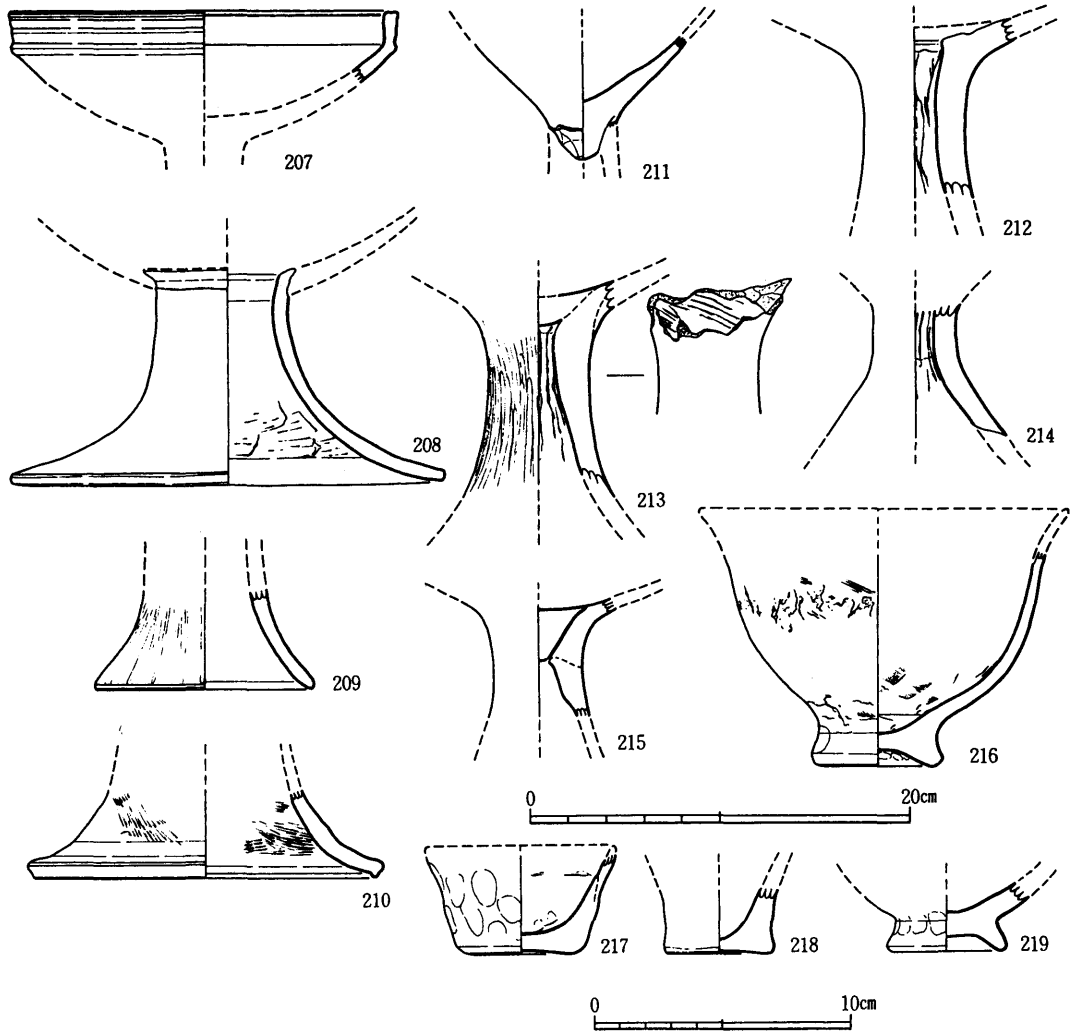


Fig. 51 A区弥生時代中期実測図 (9)

鉢 (Fig.51-216, PL.20)

ボール状の丸い胴部に高台上の底部をもつ。口縁部は欠く。外面調整はタテハケ後ナデ、内面調整はハケ後ナデである。内面・外面にラセン状のツメ痕が確認できる。なお、この資料は「S41.7 第I-A」の註記をもつが、出土状況写真があり、その写真には第I地区とは違った第III地区の註記がなされている。他地区のものが混入した可能性もある。

ミニチュア土器 (Fig.51-217~219, PL.20)

217は鉢形を呈する。外面にはユビづくねの指頭痕を残す。風化が著しい。218・219は底部のみで器形はわからない。また、風化が著しい。218は平底である。219は高台状の底部をもつ。

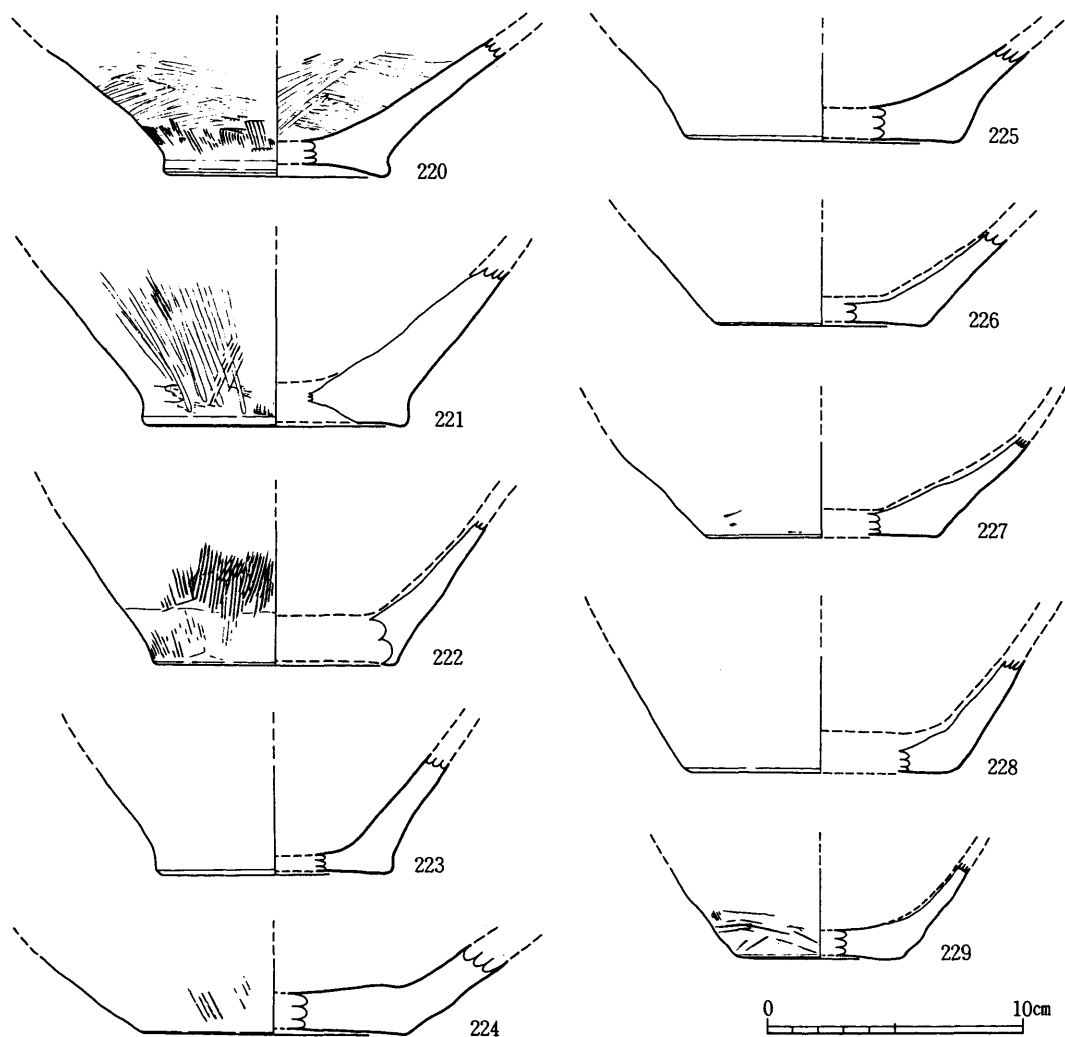


Fig. 52 A区弥生時代中期土器実測図 (10)

壺底部 (Fig.52-220~229、53-230~237, PL.21)

前期壺底部の説明でも断わったが、他時期との混同の可能性もあるかもしれない。特に前期壺と垂下口縁壺の胎土には明瞭な差がなく、微妙な形態の差から識別している。

224・226~229・232・233・235・236は、胴部から底部へと徐々にすぼまり、その境が明瞭ではないもの。226~228・235・236は、調整の判断ができないほど風化している。224は底面を削る。外面はハケ痕を残し、内面調整がナデである。227は風化しているが、底部側面に右方向への横ケズリの痕跡がみえる。内面は器面が剥離しており、調整はわからない。229は底部側面に左方向への横ハケ後ナデが施される。内面は器面が剥離する。231は外面タテハケ後タテミガキ調整、内面調整はハケ後ナデである。232は外面にヨコミ

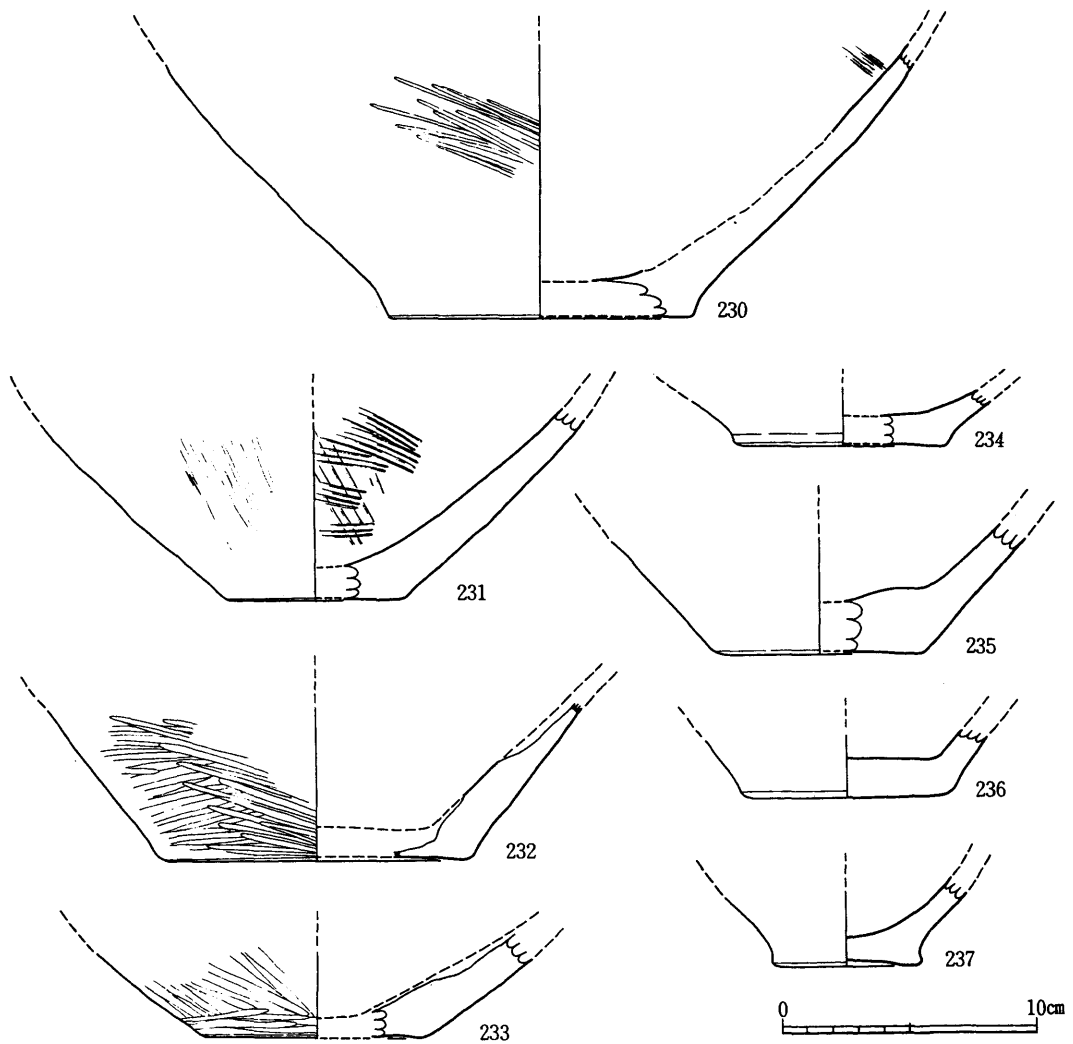


Fig. 53 A区弥生時代中期土器実測図 (11)

ガキが施される。内面は器面が剥離する。233は外面右上がりのミガキが施され、底部側面はヨコミガキ調整である。内面調整は風化のため残らない。

220～223・225・230・234・237は底部と胴部の傾きが異なり、胴部と底部の境が明瞭であるもの。223・225・234・237は風化が著しい。220の外面調整はタテハケ後ヨコミガキ。内面調整はヨコミガキである。221の外面調整はタテハケ後ヨコミガキ。内面は器面が剥離する。222の外面はミガキが施されず、タテハケ調整を残す。内面は器面が剥離する。230は風化しているが、外面に一部ヨコミガキ調整が残る。

また、221・227・232・236・237は、底面から底部側面にかけて黒斑をもつ。

甕底部 (Fig.54-238~254, PL.22)

前期甕底部の記述でも断わったように、中期甕底部は明らかに前期のものとは異なった特徴をもつ。上げ底状の底面と外方に突出した底部側端部をもつ、239~250・253・254をその典型例とする。なお、山口県東部、島田川流域には胴下半部に外面調整としてタテミガキを施す中期後半の甕⁶⁾があるが、本資料では見あたらなかった。本資料の胴下半部の外面調整は、ハケ・ケズリ・ナデである。

239~244は、底部側端部が外方に突出するが、底面はややくぼむ程度である。239は外面の風化が著しいが、一部タテハケ調整が残る。内側の器面は剥離によって残っていない。240は外面がタテハケ調整である。突出した底部側端部には強いヨコナデが施される。内面はナデ調整である。241は外面がタテハケ調整である。内面はナデ調整である。外面の底面中央には、円板状の接合痕が残る。242は外面がタテハケ調整である。底部側面及び、底面にはヨコナデが施される。内面はナデ調整である。内面の底面中央には、円板状の接合痕が残る。243は内外面がナデ調整である。外面には一部ハケ工具痕が残る。244は内外面の風化が著しく、調整が残らない。

245~250・253・254は上げ底状になり、底部側端部が外方に突出する。245は外面調整がハケ後ナデ。内面調整はナデである。底部側面にヨコナデを施す。底面には、大量の砂粒が付着する。246は風化が著しく調整が残っていない。247は内外面の風化が著しいが、底部側面及び底面にヨコナデ調整が残る。248は内外面ともナデ調整である。底部と胴部が接合痕で剥離する。249は外面調整がハケ後ナデである。内面はナデ調整である。底部と胴部が接合痕で剥離する。250は風化が著しく、内外面の調整が残らない。底部側面は接合痕で剥離する。底面にユビのくぼみが残る。253は外面に擦痕状の板ナデ痕がある。底部側面にヨコナデを施す。内面はナデ調整である。254は外面調整がケズリ後ナデ。底部側面にヨコナデを施す。内面はナデ調整である。

238・252は他の中期甕底部に比べて、時期的に遡る可能性がある。238は上げ底状であるが、底部側端部は突出しない。内外面の風化は著しく、調整は判読できない。252は極端な上げ底状にもならず、底部側端部も外方に突出しないものである。器壁は他のものに比べ若干厚く、器面の凹凸が激しい。外面調整はタテハケである。内面調整はナデ。強い2次焼成によって器面がある。

251は鉢底部の可能性もある。底部側端の突出部にはヨコナデが施される。底面にユビのくぼみが残る。

出土遺物

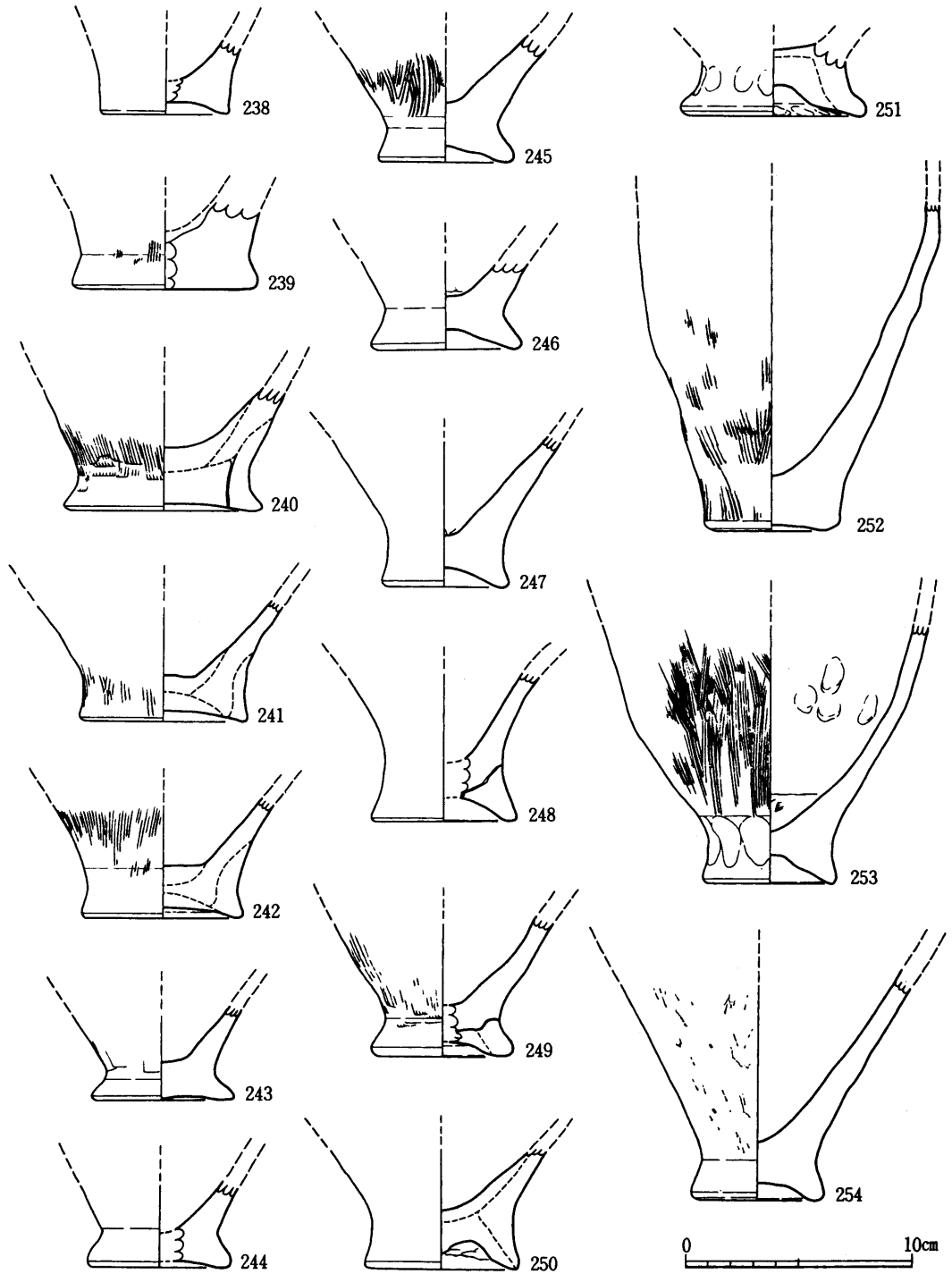


Fig. 54 A区弥生時代中期土器実測図 (12)

弥生時代後期 (Fig.55, PL.23)

第I地区A区では、弥生時代後期の特徴をもつ土器は少ない。

複合口縁壺 (Fig.55-255~259, PL.23)

255は下方に外反する口縁部に、外反方向とは反対に粘土を貼りたし複合口縁壺とする。口縁部は上端、下端ともに面をもつが甘い。口縁部外面には、鋭さを欠いた櫛描き波状文が施される。櫛原体は7条1単位である。頸部外面はハケ後タテミガキ調整、内面はナデ調整である。

256はその器形から、立ち上がりを欠損した複合口縁壺として復元した。しかし、風化が著しく口縁部立ち上がりの接合痕は確認できず、広口壺の可能性もある。257は外反した口縁部を受け口状に屈曲させ、更にその内面に粘土を貼りたし複合口縁とするものである。立ち上がり部は残っていないが、接合痕の痕跡が残っている。内外面の風化が著しく、調整は残っていない。

258・259は頸胴部の境に突帯をもつ。258は立ち上がり部を欠くが、接合痕が明瞭に残る。頸胴間の扁平な突帯上に、斜格子のキザミをもつ。風化及び破片のためヘラの施文順序はわからない。また、施文時に工具の先端が突帯下の胴部にあたり、刺突痕を残す。内外面の風化が著しいが、外面には一部ハケ調整が残る。259は立ち上がり基部がわずかに残る。胴部と頸部の屈曲は鋭く、内面に稜線がつく。頸胴間に断面三角の突帯を貼り付ける。内外面風化の為、調整は残らない。

甕 (Fig.55-260・261, PL.23)

いずれも胴部の張る器形である。260は口縁端部にヨコナデを施し、やや跳ね上げぎみになる。内外面の風化が著しく、調整は残らない。261は頸部に強いヨコナデが施され、胴部との間に稜を有する。口縁端部は面をもつが甘い。内外面はナデ調整である。

高坏 (Fig.55-262~265, PL.23)

262は坏部が浅く、口縁部がかなり外側に外反する。風化が激しいが、坏部外面にはハケ痕の上にかすかにタテミガキが確認できる。内面は坏部にタテミガキ調整の痕跡がある。

263~265は脚部である。いずれも、脚裾部がひろがる器形である。263は脚上端部が中空にならない。外面調整は、タテハケ後タテミガキである。内面にはシボリ痕がある。264は部分的に坏基部が残存する。坏部は脚上端の側部に貼り付けられる。内外面は風化が著しく、調整は残らない。265は3方向に縦2列の円孔をあける。中空で筒状の脚部である。外面は風化しており、調整が残っていない。内面調整はケズリである。

出土遺物

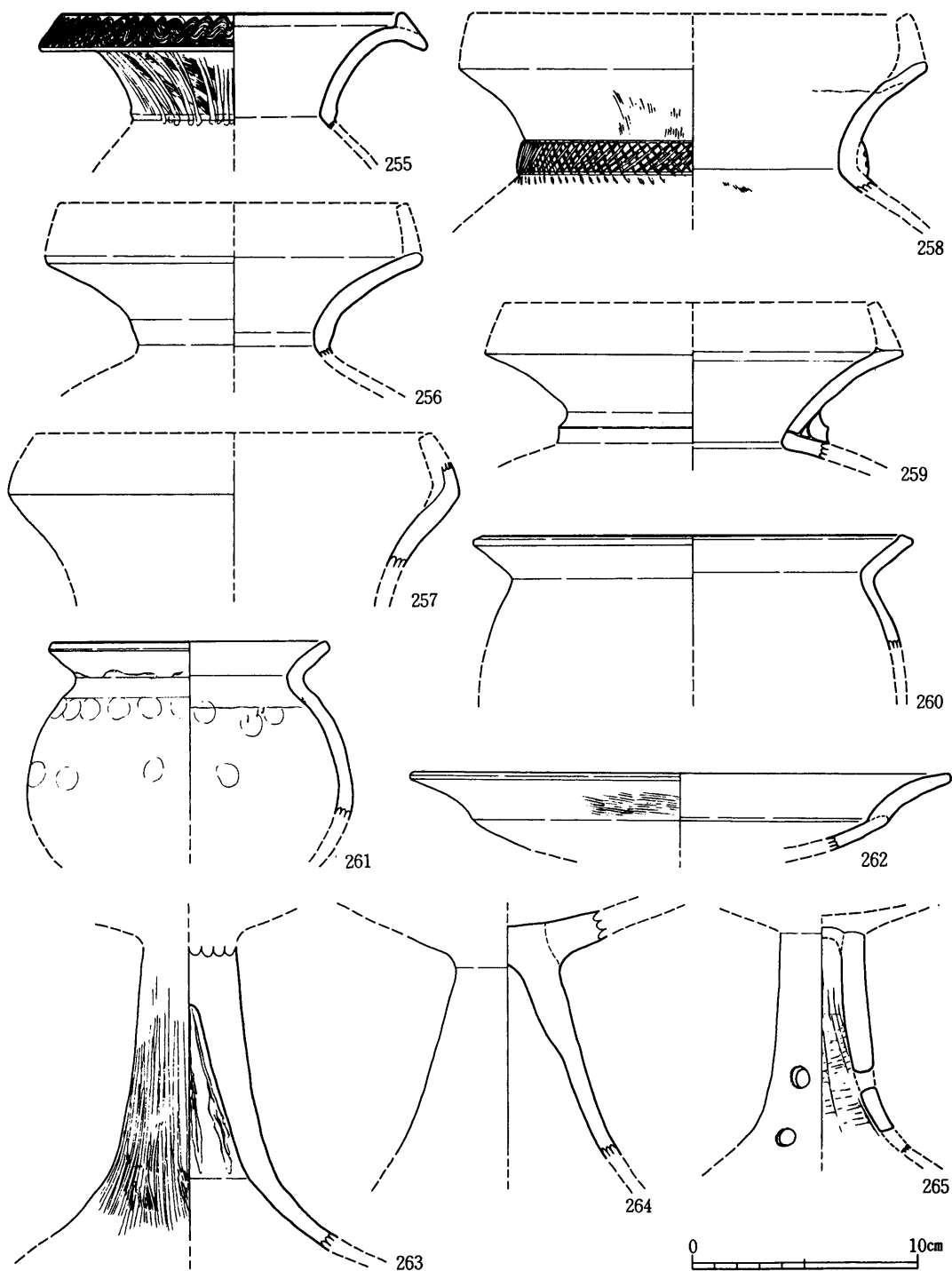


Fig. 55 A区弥生時代後期土器実測図

古墳時代前期～中期 (Fig.56～62, PL.24～31)

吉田遺跡第Ⅰ地区A区出土土器で、弥生時代中期後半土器について出土量の多いのがこの古墳時代前期～中期の土器である。識別が困難なため、古墳時代前期～中期としたが、大半は古墳時代前期の前半に属するものである。

二重口縁壺 (Fig.56-266・267, PL.25)

266は口縁部の破片である。口縁部の屈曲は鋭く、口縁端部には面をもつ。風化のため調整が残らない。267は胴部上半から頸部までの破片である。口縁部を欠くが、器形の特徴から二重口縁壺の胴部と判断した。球体状に張った胴部にすはまって直立した頸部がつく。胴部外面調整は、ヨコミガキである。胴部内面には、接合痕とシボリ痕を明瞭に残す。

直口壺 (Fig.56-268～273, 57-274, PL.24・25)

268は頸胴間に突帯をもつものである。扁平な突帯を貼り付け、その突帯上をハケ工具で右上がりの刻み目を付ける。風化が著しいが、胴部外面調整はタテハケである。一部に左上がりのタタキ痕が残る。内面は風化のため調整が残らない。

269は胴部上半から頸部までの破片である。口縁部を欠くが、頸胴間にまでヨコナデが及ぶことから、口縁部の短い直口壺に含めた。胴部外面には細かいハケが施される。内面はナデ調整で、シボリ痕を残す。中期弥生土器の可能性もある。

270は球体状に張った胴部に、やや外方にひらく口縁部をもつものである。胴部外面には、タテハケを残すが、胴上半部及び頸部は、丁寧にナデ調整が施される。口縁部には、端部より幅2.5cmのヨコナデが施される。胴部内面調整は、タテハケである。ハケ調整が及ばない胴部内面上部には、明瞭に接合痕を残す。

271・272は胴部内面にケズリ調整をもつものである。271は長胴の胴部に、短い口縁部がつく。口縁端面は、丸くおさめる。胴部外面には、左上がりのハケ調整後、頸部よりやや下がった位置にタテハケを施す。272は長胴の胴部に、やや外方に開いた口縁部がつく。口縁部はヨコナデ。胴部には、底部方向からの左上がりのハケを施す。頸胴部の境は、頸部方向からのタテハケ調整である。内面胴部上半には、明瞭な接合痕が残る。

273は口縁部を欠くのみで、体部が完存する。底部は丸底であるが、やや底面がくぼむ。外面調整はタテハケ後ナデ。内面はナデ調整である。古墳時代前期でも、やや時期の降る可能性がある。

274は胴部上半の破片である。口縁部を欠く。外面は風化が著しい。胴部外面にタテハケ調整を一部残す。胴部内面には、左上がりのハケが施される。

出土遺物

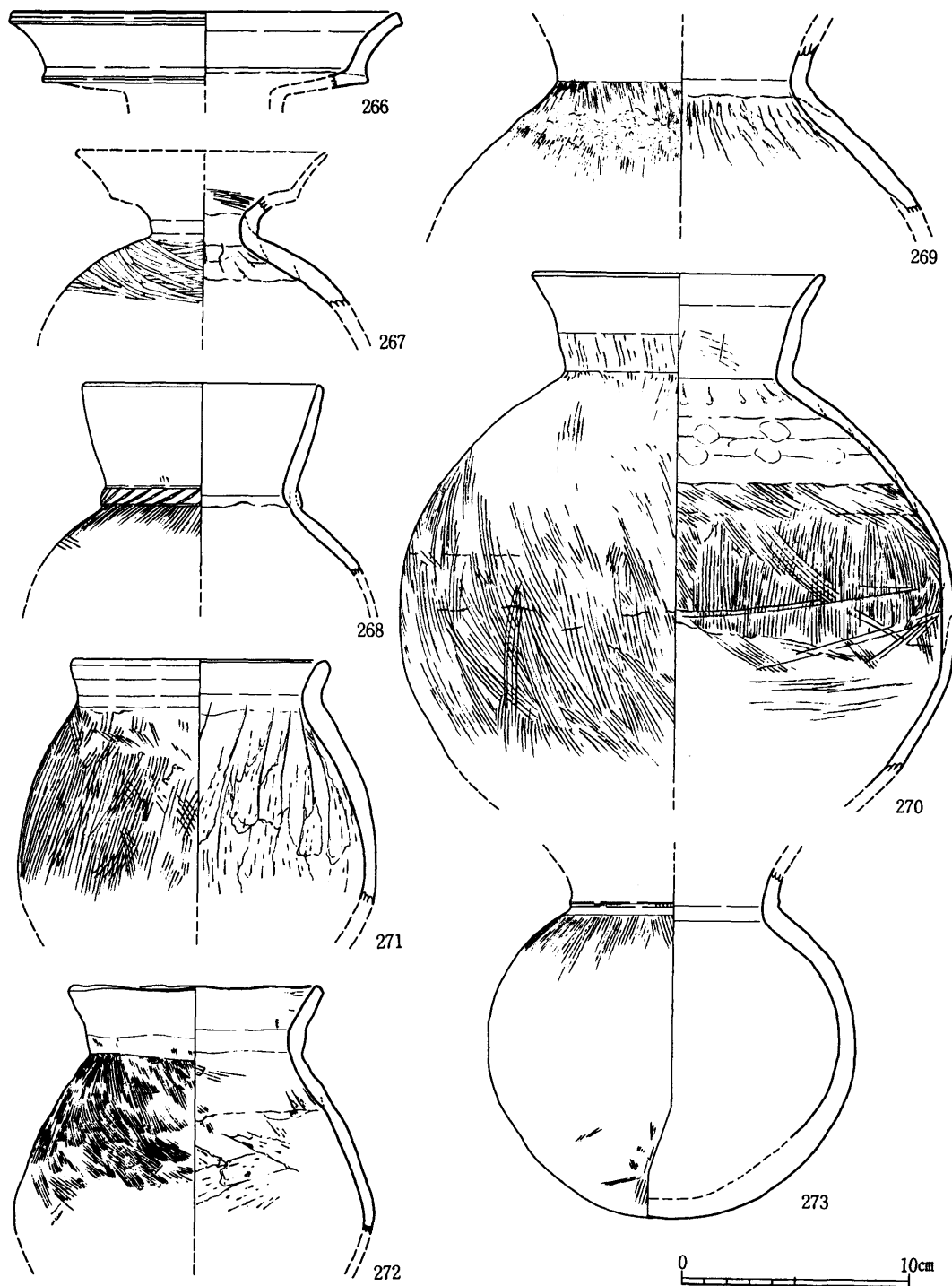


Fig. 56 A区古墳時代前期~中期土器実測図 (1)

山陰系壺 (Fig.57-275, PL.25)

胴部以下を欠くが、口縁が二重口縁であり山陰系壺の特徴を示している。口縁部の外面屈曲部がヨコナデによって突起状に張り出す。外面口縁端部下は、強いヨコナデによって、凹線状にくぼむ。口縁端部は、外反気味に丸くおさめる。

山陰系甕 (Fig.57-276~283, PL.25)

276は口径が27cmの大形の甕である。口縁外面の屈曲部は、ヨコナデが施され鋭く突出する。口縁部端面は外反気味に丸くおさめる。胴部は張る。風化が著しいが、胴部外面にヨコ方向のハケ調整が一部残る。胴部内面は、左から右方向へのケズリが施される。ケズリ調整は内面の頸部屈曲部より、やや下がった位置まで達する。内面ケズリは非常に滑らかで、鋭利な調整工具によるものと考えられる。

277は口縁部の破片である。口縁外面の屈曲部は鋭い。口縁端部は丸く収める。風化が著しく、調整の判読ができない。

278・279・280は、口縁端部を欠く。278はわずかに胴上半部が残存する。口縁外面の屈曲部は鋭い。風化が著しく、内外面とも調整が残らない。279は胴部上半が残存する。口縁外面の屈曲部はやや甘い。頸部に施されたヨコナデは強く、頸胴間にかすかな稜線ができる。胴部外面にはヨコハケ調整が残る。胴部内面には、左から右方向へのケズリが施される。280はわずかに胴上半部が残存する。風化が著しく、胴部外面には調整が残らない。胴部内面にはケズリ痕が残るが、風化のためケズリ方向がわからない。なお、頸部外面には、煤の付着が残る。

281は口縁部の外面屈曲部がヨコナデによって鋭く突出する。口縁端部は面をもつが甘い。口縁部上端がヨコナデによってつまみだされる。風化が著しく、外面調整は残らない。胴部内面調整は、右から左へのケズリである。ケズリは、頸部屈曲部よりやや下がった位置まで達する。282は口縁部のみの破片である。口縁の外面屈曲部が、ヨコナデによって突起状に張り出す。口縁端部は面をもつ。口縁部上端が、ヨコナデによってつまみだされる。比較的保存状況が良好であり、内外面にヨコナデの条線が明瞭に残る。外面には煤が付着する。283は口縁部から胴部上半まで残存する。胴部はあまり張らない。口縁部の外面屈曲部はやや甘い。口縁端部は丸くおさめる。頸部のヨコナデは強く、頸部が若干くぼむ。内外面はかなり風化するが、外面には細かいハケ痕を残す。また、ハケの下地としてタタキ調整の圧痕が確認できる。胴部内面調整は、左から右へのケズリである。ケズリは頸部屈曲部より、やや下がった位置まで達する。

出土遺物

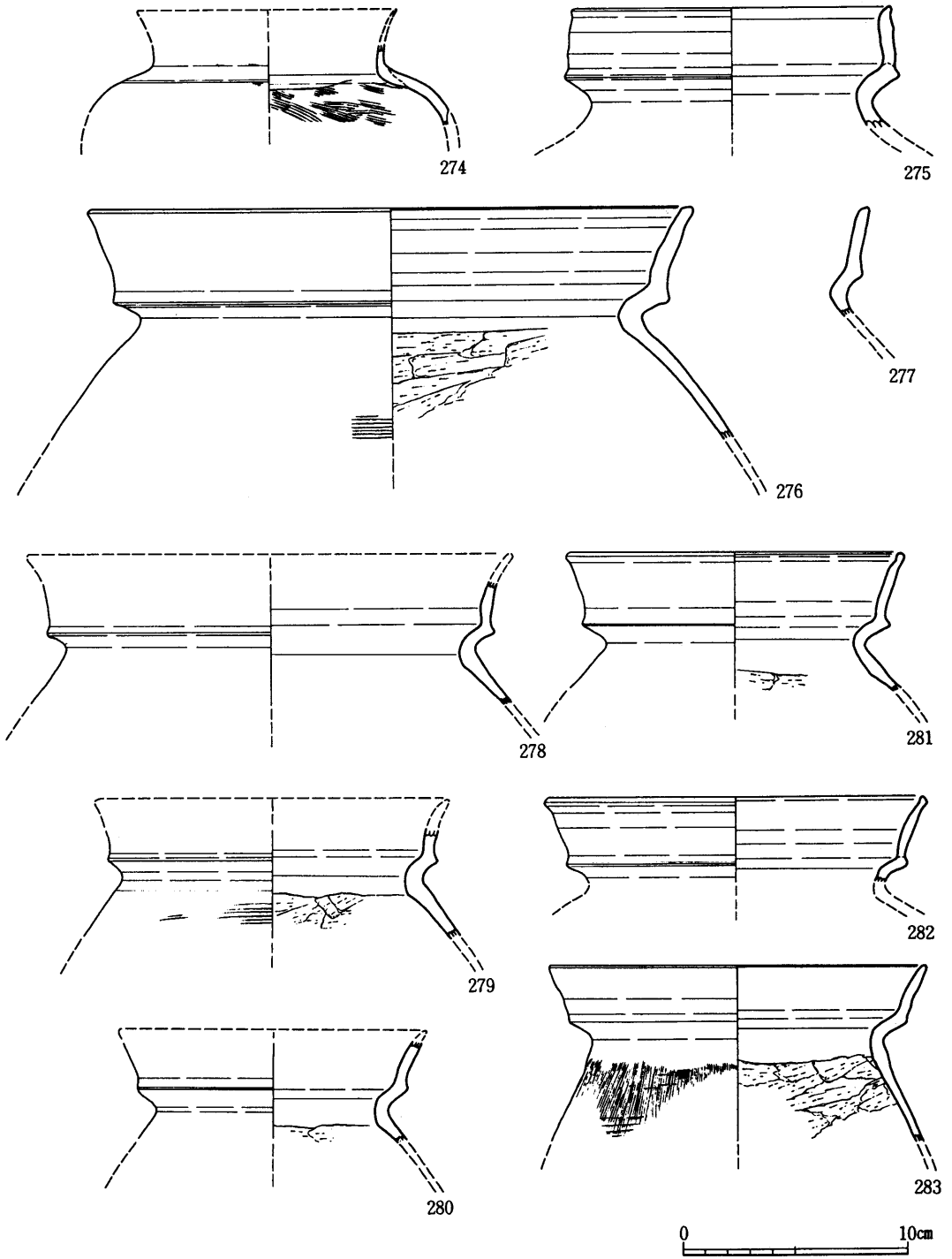


Fig. 57 A区古墳時代前期~中期土器実測図 (2)

タタキ甕 (Fig.58-284~298, 59-299~302, PL.26・27)

タタキ調整を有する甕をまとめた。タタキ調整の記述表現として、原体幅を確実におさえることは不可能なので、タタキ 1 条のくぼみ幅と 3 条の幅を 1 単位として記述する。

284は口縁部がくの字に外反する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部には左上がりのハケが施されるが、口縁端から幅 2 cmはヨコナデによって消される。胴部外面には、水平にタタキ調整が施される (タタキ 1 条・1.5mm 5 mm / 3 本)。胴部内面は左から右へのケズリ調整である。285はやや外反さみで、肉厚の口縁部をもつ。口縁部はヨコナデが施される。口縁端部は、丸くおさめる。胴部外面調整は、やや左に傾いた縦のタタキ調整である (タタキ 1 条・1.5mm 7 mm / 3 本)。胴部内面には左から右方向へのケズリ調整である。口縁部内面には、一部ハケ調整が残る。286は口縁部を欠いた、頸部から胴部にかけての破片である。胴部外面には右上がりのタタキ調整が施される (タタキ 1 条・1.5mm 7 mm / 3 本)。内面は左上がりのハケ調整である。

287は頸部から胴部の小破片である。頸部内面の屈曲は鋭い。胴部外面に右上がりのタタキ調整が施される (タタキ 1 条・1 mm 5.5mm / 3 本)。小片のため、内面調整はよくわからない。288は胴上半部の破片である。外面には右上がりのタタキ調整が施される (タタキ 1 条・2 mm 7 mm / 3 本)。また、胴部の最も張った部位には、タタキ後にタテハケが施される。内面の最終調整はナデである。外面胴下半部には煤が付着する。289は胴上半部の破片である。外面には右上がりのタタキ調整が施される (タタキ 1 条・2 mm 1 cm / 3 本)。風化が著しいため内面の調整はわからない。290は胴上半部の破片である。胴部外面には、右上がりのタタキ調整が施される (タタキ 1 条・2 mm 8.5mm / 3 本)。胴部内面には、右上がりのケズリが施される。291は胴部上半部の破片である。やや風化した胴部外面には右上がりのタタキ調整が施される (タタキ 1 条・2 mm 1.05cm / 3 本)。内面には左上がりのハケ調整が施される。外面には煤が付着する。

292は胴部の破片である。風化が著しい。右上がりのタタキ調整の痕跡が見える (タタキ 1 条・2 mm 7.5mm / 3 本)。内面調整は、器面が剥離するため残らない。293は胴部の破片である。風化が著しい。胴部外面に右上がりのタタキ調整が施される (タタキ 1 条・3 mm 1.1cm / 3 本)。内面調整は左上がりのケズリ調整である。294は胴部の破片である。胴部外面には右上がりのタタキ調整が施される (タタキ 1 条・3 mm 1.1cm / 3 本)。胴部内面には左上がりのハケ調整が施される。外面には煤が付着する。なお、この破片の上下は内面のハケ調整によって決定した。上下を誤っている可能性もある。295は胴部中央の

出土遺物

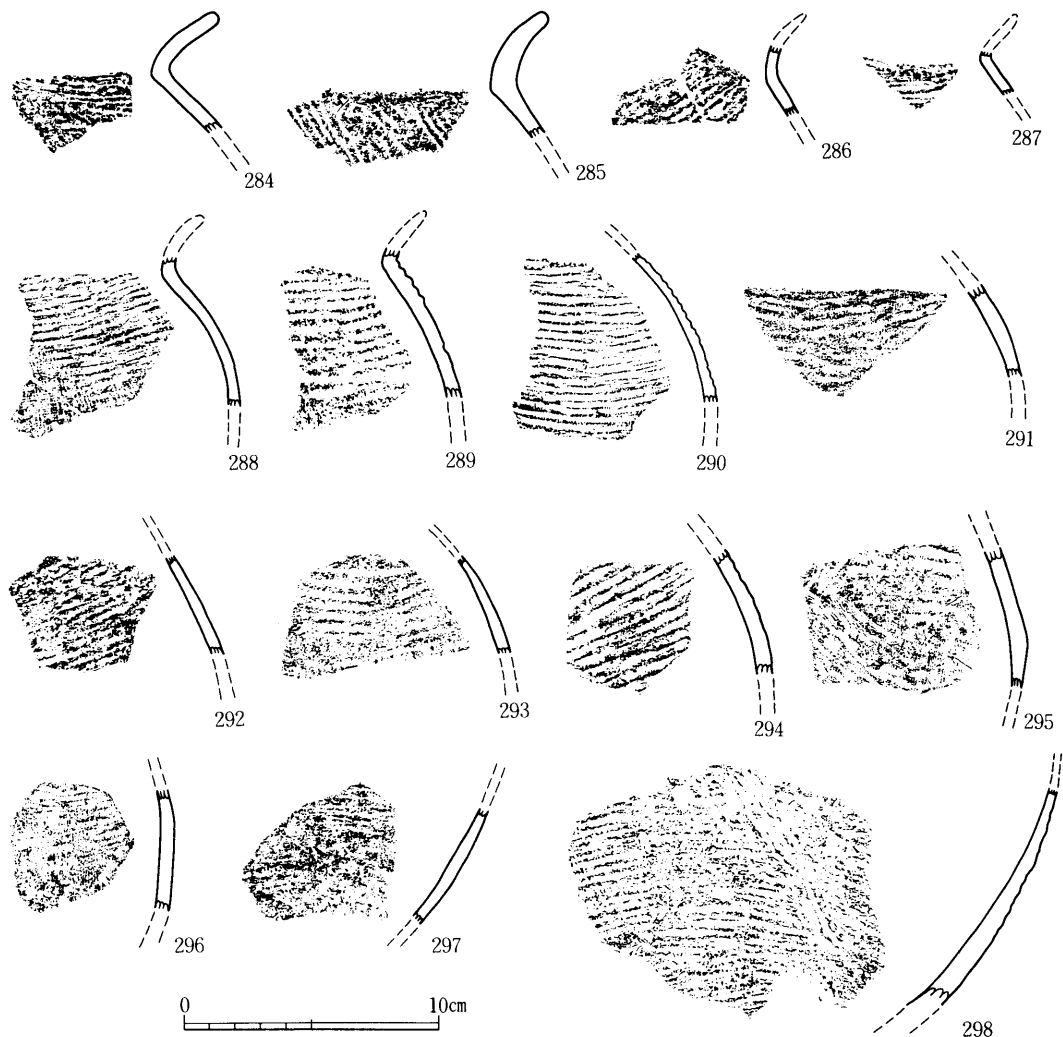


Fig. 58 A区古墳時代前期～中期土器実測図 (3)

破片である。外面には水平方向のタタキ調整（タタキ1条・4mm 1.5cm／3本）とタタキ上に左上がりの乱雑なハケが施される。内面は縦方向のケズリ調整である。296は胴部中央の破片である。内外面が風化する。胴部外面には右上がりのタタキが施されるが、破片下部にはタタキが確認できない。ナデ消されているものと思われる。内面はタテハケ調整である。

297は胴下半部の破片である。外面の風化が著しい。外面には水平方向のタタキ調整が施される（タタキ1条・1mm 7.5mm／3本）。破片内面は左上がりのハケが施されている。外面に煤が一部残る。298は胴下半部の破片である。胴部外面には水平方向にタタキ調整が施される（タタキ1条・2mm 9mm／3本）。内面は風化していて調整はわからない。

299は口縁部及び胴上半部が、胴下半部と直接接合しなかったが、その色調・胎土・調整から同一個体として図上復元した。胴はあまり張らず、短く外反する口縁部が付く。胴部中央よりやや下がった位置に胴下半と上半の接合痕をもつ。胴中央部には水平方向のタタキが、胴上半部には右上がりのタタキ調整が施される（タタキ1条・2.5mm 1.1cm/3本）。胴下半部はナデ調整とハケ調整で、タタキが消される。胴部内面は左上がりのハケである。外面下半部は、2次焼成によって赤く変色する。胴中央部には煤が付着する。

300は胴上半部から口縁部の破片である。口縁部は胴部から強く外反する。口縁端部は丸くおさめる。頸部外面には貼りたした粘土紐の痕跡が確認できる。胴部外面には、右上がりのタタキ調整が施される（タタキ1条・1.5mm 1cm/3本）。口縁部外面には、左上がりのハケ調整が施される。胴部内面は、左上がりのハケ調整である。口縁内面は、ヨコナデ調整である。

301は胴部があまり張らず、口縁部が外反する。口縁部には頸部との境まで強いヨコナデが施され、それによって頸部と胴部の境に段が生じる。胴部外面調整は、左上がりの太いたタタキである（タタキ1条・5.5mm 1.8cm/3本）。胴部内面の最終調整はナデである。

302は胴部はあまり張らず、ヨコナデによって外反した口縁部がつく。胴部外面には右上がりのタタキ調整が施される（タタキ1条・1mm 5.5mm/3本）が、胴上半部は左上がりのハケ調整によって消される。また、この左上がりのハケ調整を切って、水平方向に連なったハケが施される。胴部内面は、タテケズリ後左上がりのハケ調整が施される。

甕 (Fig.59-303~308, PL.27)

山陰系の特徴を持たず、またタタキ調整のないものをまとめた。しかし、303~305は口縁部のみの破片であって、胴部にタタキが施されていた可能性がないとはいえない。303は口縁部端面を丸くおさめる。304は口縁端部に面をもつがやや甘い。頸部と口縁部の接合技法は、300と同じく頸部粘土紐接合技法を用いる。305は口縁端部に面をもつがやや甘い。

306は肩の張った胴部に、外反する口縁部が付く。胴部上半は、左へ傾いたタテハケ調整である。胴部内面はハケ調整後、右から左方向へのケズリ調整である。

307は張った胴部に、直口の口縁部がつくものである。胴部外面には多数の指頭圧痕がつく。胴部内面には、かすかに左上がりのハケ痕が残る。時期が中期以降の可能性がある。

308は胴部が張らず、外反した口縁部がつく。口縁端部は面をもつ。頸部内面には、明瞭な接合痕を残す。胴部外面調整は左上がりのハケ後ナデである。胴部内面調整はタテケズリである。307と同様に時期が降る可能性がある。

出土遺物

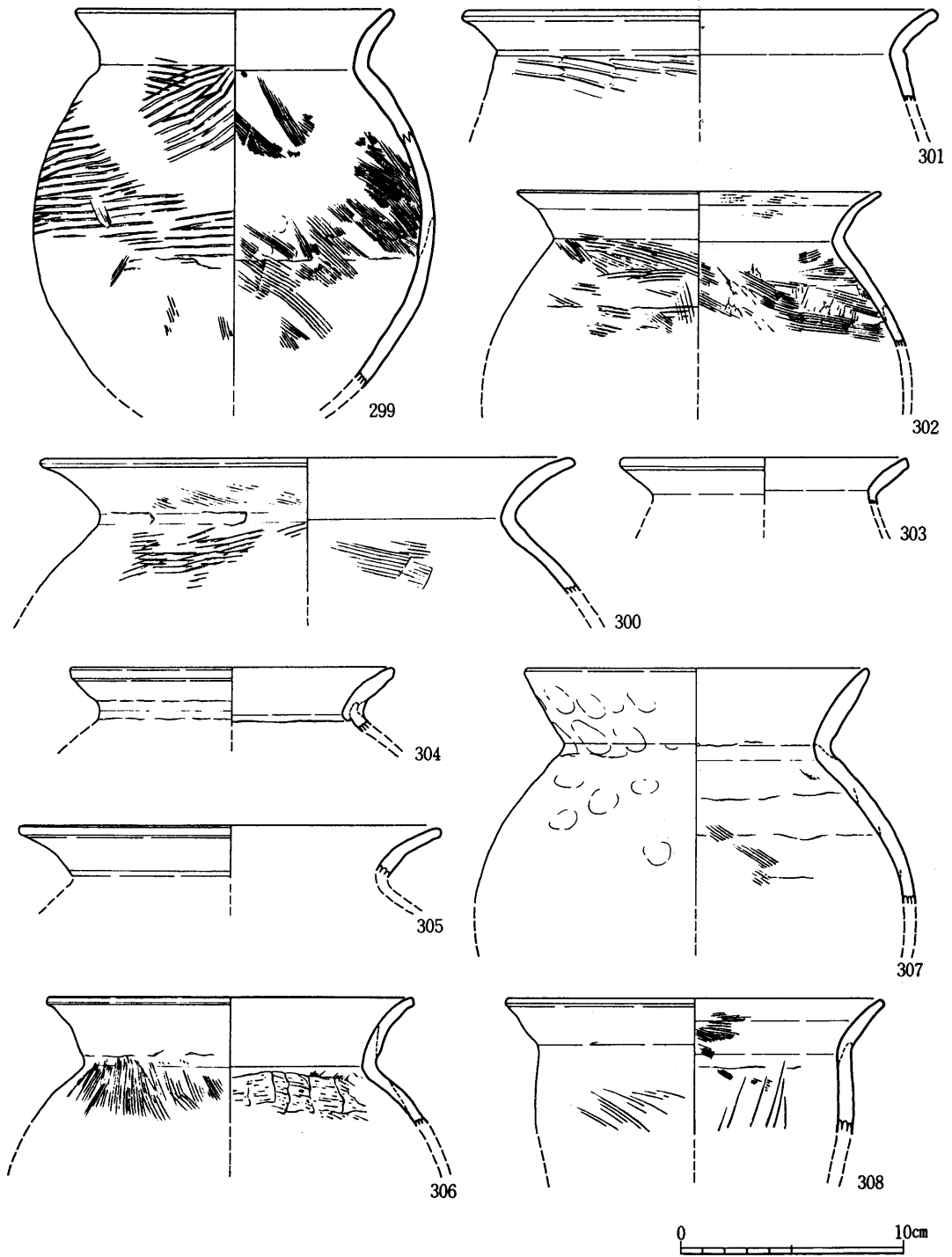


Fig. 59 A区古墳時代前期～中期土器実測図 (4)

高坏 (Fig.60-309~326, PL.28・29)

309は特殊高坏である。口縁部は大きく開く。口縁端部の上下をつまみだし、幅広い面をつくる。口縁部内外面には、幅の細いタテミガキが丁寧に施される。外面には、一部ミガキ調整の下にハケ痕が残る。

310~317は坏部である。310・311は坏部に接合した口縁部の余分な粘土を、下方に突出させて処理するものである。310は口縁部が、ラッパ状に大きく開く。口縁端部は丸くおさめる。内外面共に風化が著しいが、口縁部内面に一部タテミガキ痕が残る。311も口縁部がラッパ状に大きく開く。口縁端部は丸くおさめる。ヨコナデによって、口縁端部のわずかにさがった部分が凹線状にくぼむ。口縁外面はナデ調整のみである。口縁内面はタテミガキが施される。312は口縁部だけの破片であるが、坏部との接合痕で剥離している。坏部と口縁の内面接合部分には、粘土紐を貼りたし補強する。口縁外面はタテミガキ調整である。口縁内面はヨコミガキ調整である。313は坏部と口縁部の屈曲部が、横方向に張り出す。口縁端部を欠く。口縁部はあまり開かない。脚部との接合痕は明瞭である。内外面の風化は著しく、調整は判読できない。

314は口縁部と坏部の屈曲部が甘く、丸い。口縁端部は丸くおさめる。内外面の風化は著しいが、外面に一部タテミガキ調整が残る。315は口縁部と坏部の屈曲部が不明瞭で、沈線状になっている。坏部外面調整は、放射状にタテケズリ後ヨコミガキである。口縁部調整はヨコミガキが施される。口縁部内面調整はヨコハケ後タテミガキ、口縁部内面はヨコハケ後タテミガキ調整が施される。なお、成形技法上注目すべき点として、坏部分の脚部接合痕の中心に、棒状工具による刺突痕が見られる。314と315は古墳時代中期まで降るものと思われる。316は坏部に2段の屈曲をもつ高坏である。風化が著しいため、調整は見えない。317は坏部片であるが、風化が著しい。

318~326は、脚部である。318~321・323は、中空のものである。318・321は、脚部の上端で中空部分がつまる。318は裾部が脚部より屈曲し開く。三方に透かしをもつと考えられる。321は脚部よりゆるやかに裾部が開く。風化が著しく、調整が判読できない。319・320・323は、脚部上端に到っても中空のまま筒状になるもの。319は脚部内面に右から左方向のケズリ調整が施される。320は脚部内面に、左から右方向のケズリ調整が施される。324は中空脚の裾部である。裾端部は丸くおさめる。裾部内面は、右から左方向へのケズリ調整である。322・325・326は中実の脚部である。322は脚裾部が大きく開く。326は坏部との接合痕を明瞭に残す。中実の脚上端周囲に坏部を貼り付けている。脚部外面には、ハケ痕を残す。

出土遺物

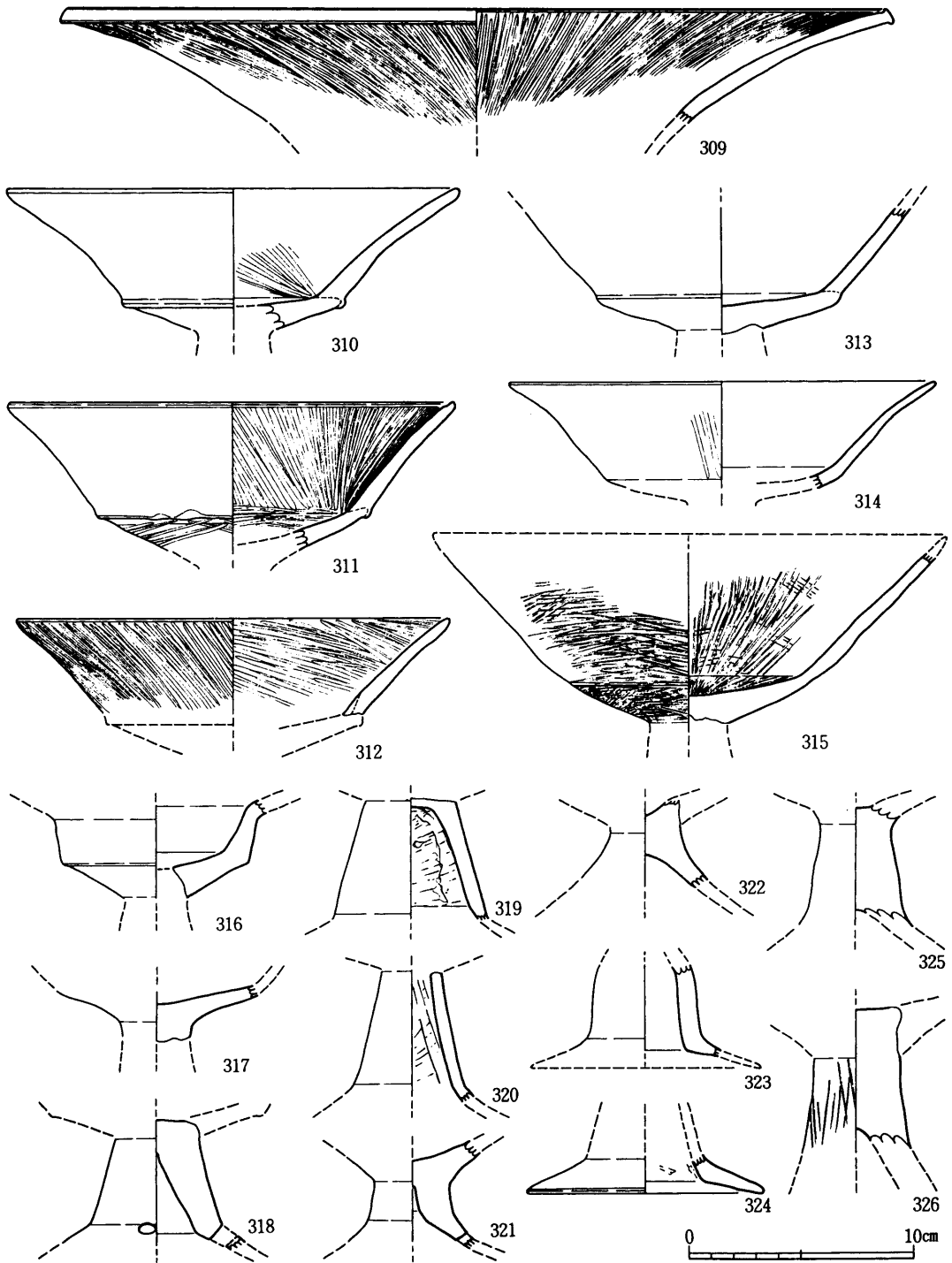


Fig. 60 A区古墳時代前期~中期土器実測図 (5)

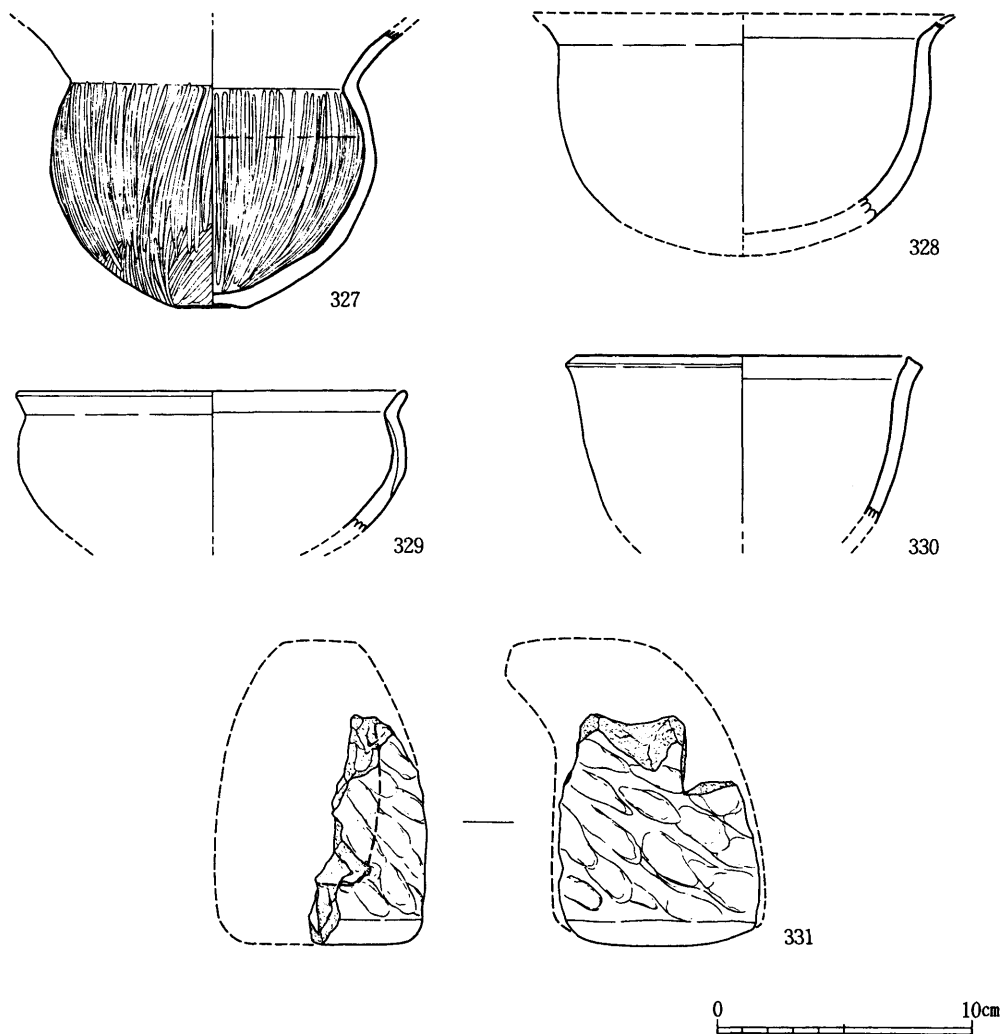


Fig. 61 A区古墳時代前期～中期土器実測図 (6)

鉢 (Fig.61-327~330, PL.24・30)

327は球体状の胴部に大きく開く口縁部をもつ。口縁端部を欠く。底部は小さく、ややくぼむ。胴部は内外面共にタテミガキ調整である。328は風化が著しい。329は頸部がすぼまり、短い口縁部をもつ。330は張りのない胴部に、ヨコナデでわずかに屈曲させた口縁部をもつ。口縁端部は面をもつ。329・330は弥生時代中期高坏坏部の可能性もある。

土製支脚 (Fig.61-331, PL.30)

331は烏帽子形 of 土製支脚である。外面には多くの指頭圧痕を残す。内部は中空である。

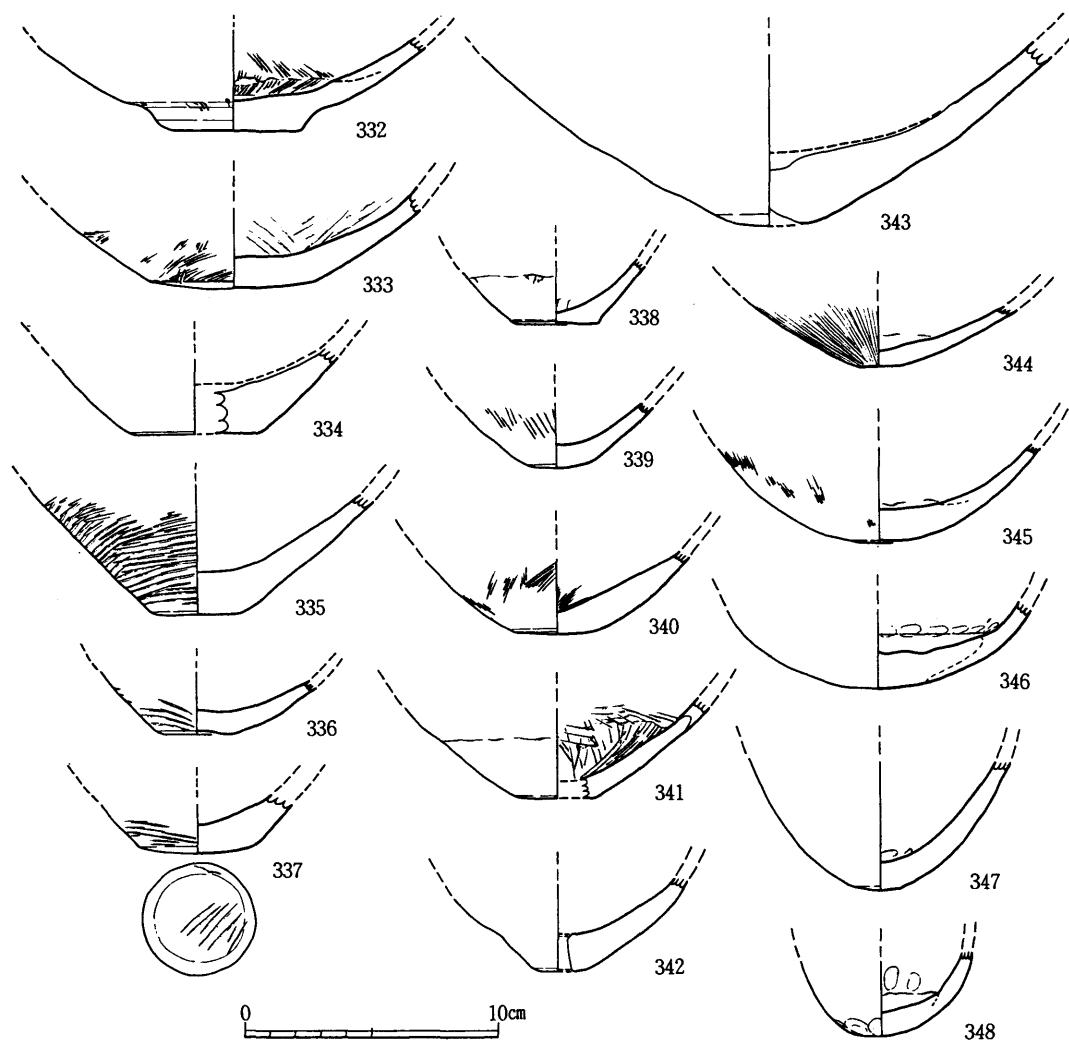


Fig. 62 A区古墳時代前期～中期土器実測図 (7)

底部 (Fig.62-332~348, PL.30・31)

丸底化、或は丸底化の傾向がある壺・甕・鉢の底部である。弥生時代後期の底部も丸底化を示すものがあるが、識別できないため、上記の特徴をもつ底部を全て古墳時代前期～中期の底部に含めて記述する。332は球体の胴部から突出し、しっかりとした底部をもつが、胎土・色調・形態から古墳時代前期のものとした。333～340は底部の端がやや丸くなりかけるもの。335～337は外面にタタキ調整をもつ。甕底部と思われる。343・344は、底部が極めて小さくなるもの。345～348は、丸底になっているもの。342は底部に孔をもち鉢の底部と思われる。341も破片のため確認はできないが、孔を有する可能性は高い。

古墳時代後期 (Fig.63-349~355, PL.32)

6世紀末から7世紀初頭の特徴をもつ須恵器をまとめた。349・353・354は「第Ⅲ地点攪乱」の同一註記をもつ。これらの土器は、同一時期にまとまると思われる。このことから、第Ⅰ地区A区の第Ⅲ地点に何らかの須恵器集中区があったことが予想される。なお、土師器でこの時期の特徴を示すものは見あたらなかった。

横瓶 (Fig.63-349, PL.32)

349は横瓶の胴部である。口頸部を欠く。側部内面には胴部成形時の円孔と、それをふさいだ粘土円板の接合痕が明瞭に残っている。外面は平行タタキを消して、カキ目が施される。内面には同心円のタタキが施される。特に粘土円板周辺には、接合のための同心円タタキが密に施される。

坏蓋 (Fig.63-350, PL.32)

350は坏蓋天井部の破片である。口縁部を欠く為、全形を知ることはできないが、天井部は扁平である。天井部には、回転ヘラケズリが施される。ヘラケズリは坏蓋正位の位置で、時計方向の回転である。

壺蓋 (Fig.63-351, PL.32)

351は内面のかえりが、蓋の口縁部よりもかなり下方にのびており、その端面もするどい。また口径も8.1cmとやや小形である。擬宝珠様のつまみをもつ坏蓋と考えるには異様であり、台付壺の蓋と考えた。

甕 (Fig.63-352・353, PL.32)

352は甕の口縁部片である。口縁端部下端をヨコナデによって下方に突出させる。その際、口縁端面下部にはヨコナデによる1条の凹線がはいる。口縁端部上面もヨコナデによってややつまみあげられる。内外面に自然釉の付着が激しい。353は胴部下半の破片である。外面には平行タタキと、その上にカキ目が施される。内面は同心円タタキが施される。ユビナデによって、同心円タタキが一部消される。

高坏 (Fig.63-354・355, PL.32)

354は長脚高坏の脚部である。透かしは持たない。脚部中央に1条の凹線をもつ。脚部と裾部の屈曲は著しく、屈曲部が下方に突出する。裾端部下端はヨコナデによって下方に突出する。その際、端面には1条の凹線がはいる。その特徴から無蓋と思われる。355は口縁部・脚部を欠き、どのような形態であるかはわからない。おそらく無蓋と思われる。脚部は大きく開く。354と胎土・色調が似る。

出土遺物

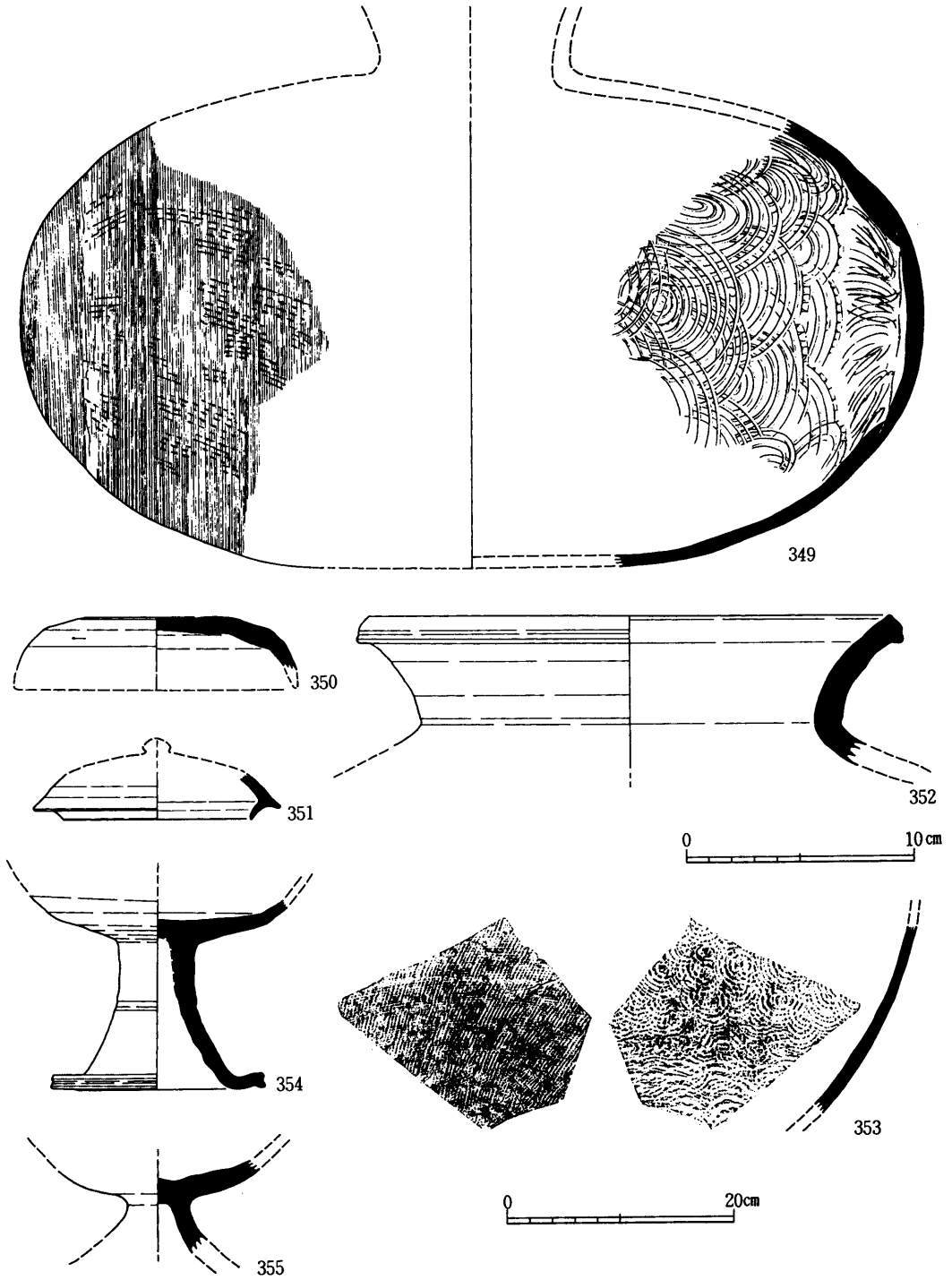


Fig. 63 A区古墳時代後期土器実測図

古代前半 (Fig.64-356~373, PL.33)

ここで古代前半と分類したのは、8世紀~9世紀の特徴を有する須恵器とそれに伴うと考えられる土師器である。中世を中心とする土師器埴や瓦質土器の一群に対しての便宜的な区分であって、歴史的な区分に必ずしも対応しない。

須恵器坏蓋 (Fig.64-356-357, PL.33)

356は擬宝珠様のつまみが付くと思われるが、その部分を欠くため明かではない。天井部は平坦である。端部は下方への突出が丸く甘い。357は全体的に膨らみをもつようである。裾部が屈曲し、天井部と境をつくる。端部は下方への突出が丸く甘い。外面に自然釉が付着する。

須恵器坏 (Fig.64-358~368, PL.33)

358は高台を持たない坏である。胴部が斜め直線に立ち上がる。口縁部を欠く。底部は回転ヘラ切りの痕跡を残す。

359・360は高台を持つもので、やや底径の大きいものである。359は胴部が斜め直線に立ち上がり、口縁部端部は丸い。高台は底部中心よりに貼り付けられる。高台内端が下方に突出し接地面となる。復元底径は9.3cmである。360は胴部を欠く。底面にはヘラ切りが一部残る。高台は内端があまり下方に突出せず、広い接地面を有する。高台が底部中心よりに貼り付けられる。復元底径は10.5cmである。

361~368は高台をもつもので、底径の小さいものである。高台には2種類の形態がある。361~364は高台内端が下方に突出し、接地面となるものである。高台は底部中心よりに貼り付けられる。361は高台内端が高く突出する。復元底径は6cmである。362は底面にヘラ切りの痕跡を残す。復元底径は7.2cmである。363の復元底径は7.2cmである。364は焼成が不良で、風化する。復元底径は8.7cmとやや大きい。

365~368は高台が内端・外端とも接地、あるいは外端だけが接地するものである。これらは、359~364の高台が底部中心よりに貼り付けられるものとは異なり、胴部と底部の屈曲部に接して高台が貼り付けられる。365は高台外端が突出気味になる。高台の貼り付けも若干内側に入るようである。底径は8.4cmである。366は高台が細く、突出する。高台がややつぶれて、粘土が外端にはみ出す。外面には高台の接合痕が明瞭に残る。底径は7.2cmである。367は焼成が不良で、風化する。外面には高台の接合痕が明瞭に残る。底径は8.4cmである。368は底部にヘラ切りの痕跡が残る。外面には高台の接合痕が明瞭に残る。底径は6.9cmである。365~368は、359~364の坏に対して時期が降ると考えられる。

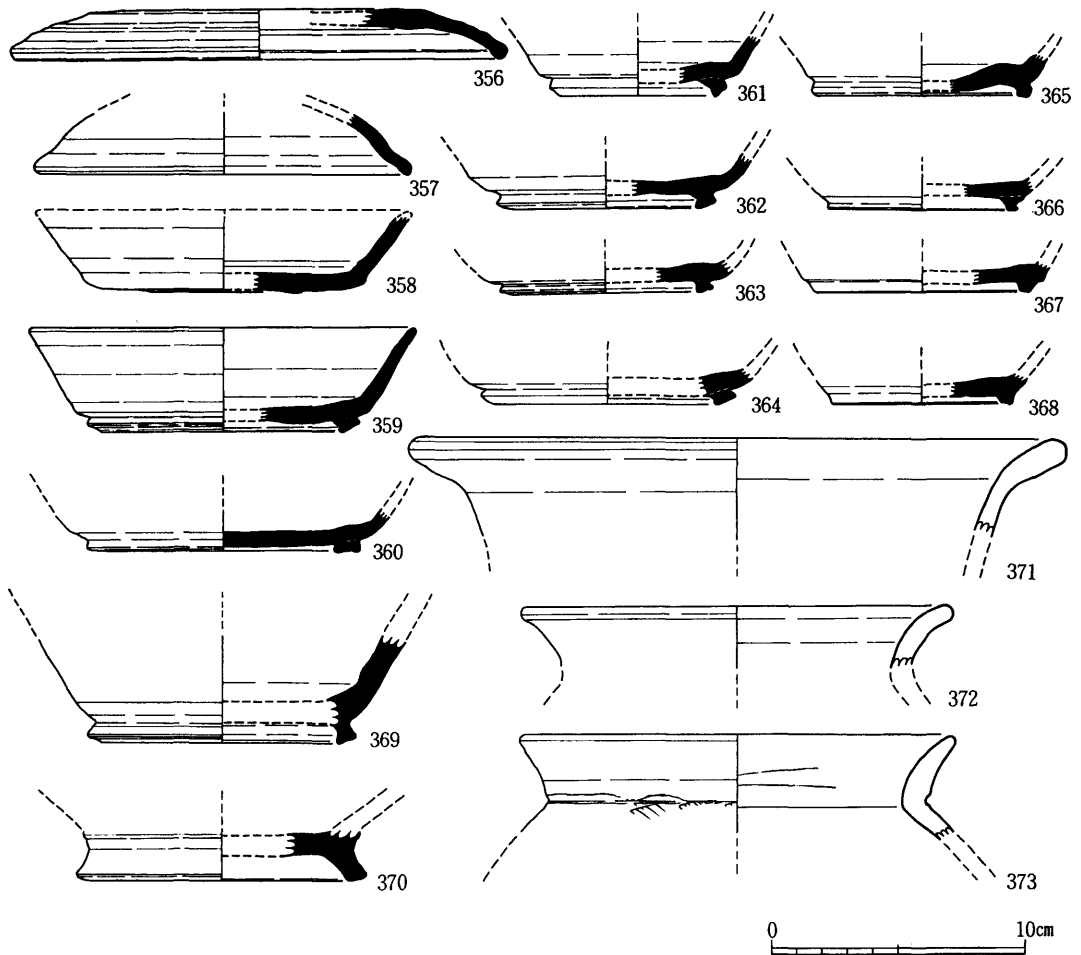


Fig. 64 A区古代前半土器実測図

須恵器壺 (Fig.64-369・370, PL.33)

369は長頸壺の底部と考えられる。高台内端が下方に突出し、接地面をなす。高台内端は鋭く横方向に突出する。370は胴部を欠失し、底部と高台のみの為、壺以外の器形の可能性もある。高台はやや外側に張り出すが、内端はさほど突出しない。

土師器甕 (Fig.64-371~373, PL.33)

371は口縁部が外反し、口縁端面が丸く肥厚する。風化が著しい。胴部が欠失する為、器形は不明であるが、長胴になると思われる。372は口縁部が外反する。口縁端面は丸くおさめる。胴部は欠失する為不明である。373は肩が張り、短い口縁部が付く。口縁端面は丸くおさめる。胴部にはハケが施される。373は古墳時代後期の可能性もある。

古代後半～中世 (Fig.65-374～407、66-408～417, PL.34～36)

ここで扱う古代後半～中世の名称は、古代前半でも記述したように歴史区分ではなく、須恵器を中心とした一群と、土師器碗・瓦質土器を中心とした一群を分別する為の便宜的なものである。吉田遺跡第Ⅰ地区A区から出土した土師器碗や瓦質土器はさほど多くない。摩滅したものを除いて、ほとんど図化している。

土師器碗 (Fig.65-374～398, PL.34～35)

374は数少ない口縁部の破片である。胴部外面にはロクロ成形による凹凸を残す。口縁端部は丸くおさめる。376～380は高く突出した高台をもち、高台端部が面をもつもの。376～379の高台の横断面が細いのにに対して、380は肉厚である。376は高台の剥離面に、糸切りの痕跡が残る。

375・381～383は高台が高く突出するが、先端が尖るもの。375は土師器碗のなかで、唯一全形を知ることができるものである。口縁端部は丸い。外面には、ロクロ成形による凹凸を残す。内面は丁寧にミガキ調整が行われ、炭素が吸着する。383も同じく内面に、炭素が吸着する。381は底部に、糸切りの痕跡が残る。

384～390は、やや低い高台が付くもの。高台端面は丸い。384は高台が肉厚である。内面には炭素が吸着する。385も高台が肉厚である。外面に煤が付着する。389・390は高台の接合が粗く、接合痕が明瞭に見える。

391～394は低い断面カマボコ状の高台が付くもの。いずれも胎土は精製で、色調は淡黄灰色を呈する。また、風化も著しい。

395～398は高台が底面ではなく、胴部側に貼り付けられる。397・398は高台が機能を果たさず、底面が地についてしまうもの。396～398は内面に炭素を吸着させる。この胴部側面に高台を貼り付ける碗は、内面の底部中心がくぼむという特徴をもつ。

土師器坏 (Fig.65-399, PL.35)

399は破片のため明らかにしえないが、高台がなく平底であったと思われる。器高が高く、皿と呼ぶよりは坏と呼ぶべきものである。内外面の風化が著しい。

土師器皿 (Fig.65-400～407, PL.35)

400～407は土師器の小皿である。402は器壁が薄く、胴部が直線的に開く。403～407は糸切り痕をもつものである。403は風化が著しく、拓本を示すことができなかった。406は口縁端部を欠くが、ほぼ器形を推測することができる。外面の凹凸は、粘土紐の接合によるものである。407は糸切りによって、底面が突出する。

出土遺物

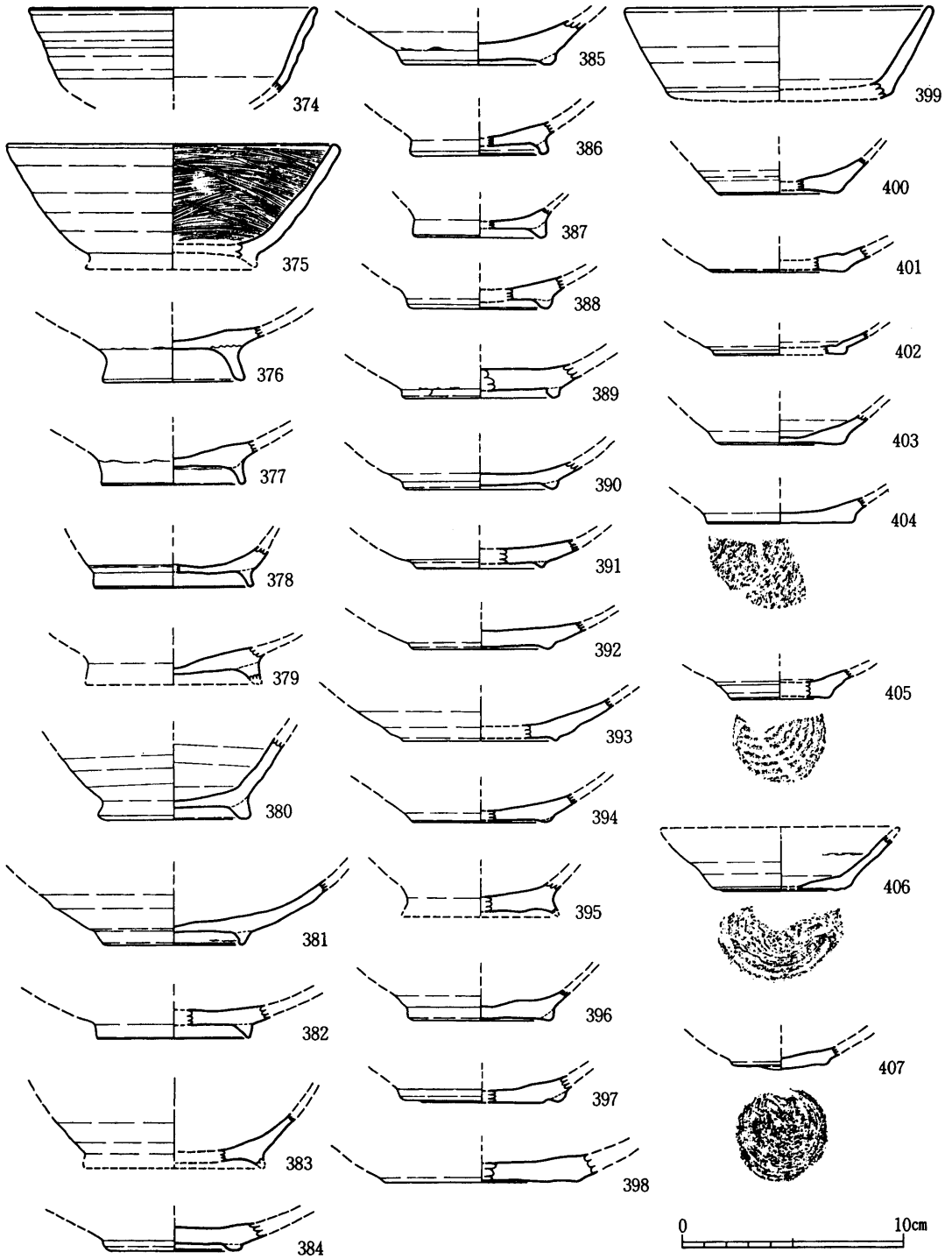


Fig. 65 A区古代後半～中世土器実測図 (1)

瓦質足鍋 (Fig.66-408~414, PL.36)

408・409は足鍋の口縁部から、胴部上半までの破片である。408は直立気味の胴部から、口縁部がヨコナデによって水平方向に屈曲する。頸部内面には稜がつく。口縁端部は面を持つ。外面には煤の付着が著しく、調整が判読できない。器面の凹凸が激しい。内面には右から左方向へのハケが施される。

409はやや彎曲した胴部に、上方へ伸びた口縁部がつく。口縁外面が2段状に屈曲する。口縁内面端部が、やや跳ね上がる。外面頸部は強いヨコナデによってくぼむ。内面には稜がつく。外面には煤の付着が著しく、調整が判読できない。内面には横方向のハケが施されるが、ナデ消される。

410~414は足鍋の脚部片である。410は脚基部の破片である。風化が著しいが、ケズリ調整と思われる凹凸が基部に残る。411は脚基部の破片であるが、胴部との接合部分で剥離している。脚部には手のにぎりしめ成形による凹凸が残る。412は脚部の破片である。摩耗が激しく、調整は残らない。413・414は脚端部である。413は摩耗が激しく調整は残らない。かすかに先端が指によって屈曲する。414は手のにぎりしめ成形による凹凸が残る。先端を指でつまんで屈曲させ獸脚状にする。

408は岩崎足鍋編年⁷⁾のⅡ型式の特徴をもつ。409は岩崎編年のⅢ型式の特徴をもつ。414の獸脚状の脚端部はⅠ~Ⅲ型式の特徴である。しかし、Ⅰ型式は土師質のため、瓦質の414はⅡ式以降のものである。第Ⅰ地区A区出土の足鍋は、Ⅱ~Ⅲ型式の時期幅でおさまり、足鍋の中では比較的古いものである。

瓦質鉢 (Fig.66-415, PL.36)

胴部上半を欠くため全形はわからない。広口で胴上半部に肩をもった甕になる可能性もある。ただし、底径は10.2cmと小さい。底部から斜直線的に胴部が立ち上がる。胴上部にヨコナデによるくぼみがあるが、これより上部を欠損する。底部側面はケズリによって面取りを行う。

須恵質鉢 (Fig.66-416, PL.36)

底部の破片である。平底から斜直線的に胴部が立ち上がるが、上部を欠くため全形は不明である。底面には棒状の圧痕がある。底面から上約2.5cmの胴側部外面に、ハケ調整の始点が横一列に並ぶ。ハケ施文側の器面が、一段下がる。底部側面には2カ所に指頭痕が認められ、生乾き状態での作業台からの移動が考えられる。内側の器面は使用痕により、平滑になっている。底面を用いて何かをすりつぶすような行為がおこなわれたのであろう。

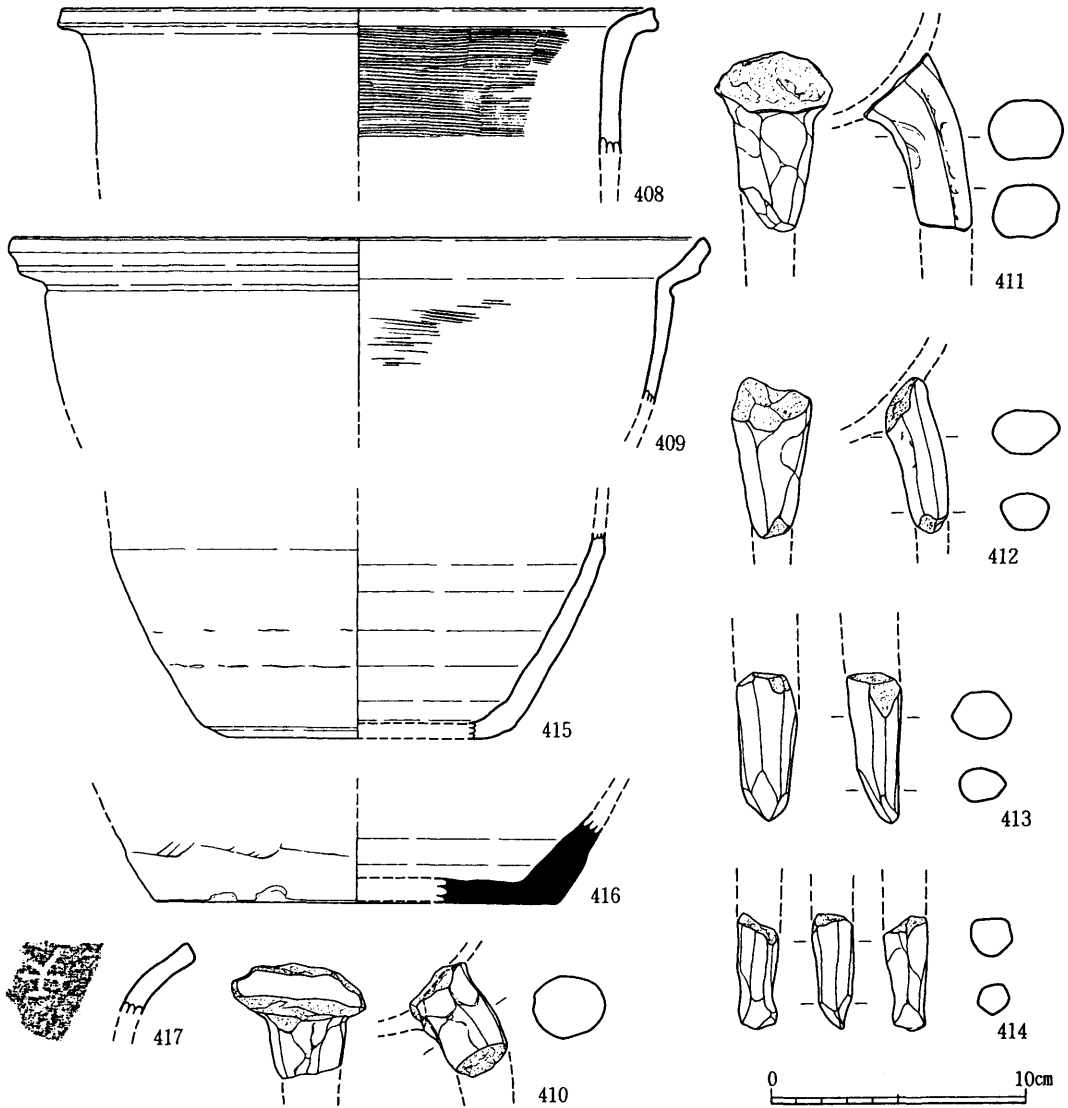


Fig. 66 A区古代後半～中世土器実測図 (2)

文字入り土器片 (Fig.66-417, PL.36)

口縁部の破片である。器形としては、甕のようなものが想定される。口縁端部は面をもつ。風化のため摩耗が激しい。瓦質土器と考えられる。

この土器片は内面に、「天」の字状の線刻が施されている。この線刻は、焼成前にヘラ状の工具によって印刻されたとかんがえられる。これが「天」の字であるとすれば、口縁端部方向を下にして字が書かれていることになる。

石器 (Fig.67~71, PL.37~40)

第 I 地区 A 区出土の石器類は、その出土状況が不明なため、時期を限定することができない。おそらく、その大半が弥生時代に属するのであろうと思われる。

出土石器類の主要な石材は、凝灰岩、サヌカイト、黒曜石、姫島産黒曜石の 4 種類であるが、いずれも製品がほとんどなく、剥片が大半を占める。よって、上述のものは、石材ごとにまとめて記述を行う。これらとは異なり、製品の打製石斧、磨製石斧、凹石、敲石、石庖丁、扁平片刃石斧、不明磨製石器、砥石は石材に関係なく、器種ごとに記述を行った。

凝灰岩 (Fig.67-418~426, 68-427, PL.37)

418は錐状石器である。不定形の剥片の両側縁の下半部に、腹面側より急傾斜の二次加工を加えて、錐状に先端を尖らせる。背面には大きく自然面を残す。419は刃器である。剥片の先端に、腹面側から鈍い角度の調整を行い、厚みのある刃部を作り出している。

420~426はいずれも剥片である。420は左側縁に二次加工のある剥片である。422は使用痕のある剥片である。背面には上下両方向からの剥片剥離の面がみられる。この後、頭部調整を施し、打点を確保した上で、当剥片の剥離を行っている。左側縁部に、微細な剥離面がみられ、使用痕と思われる。427は石核である。様々な方向より剥片剥離作業を行い、現状では三角柱状を呈す。正面中央部の稜には敲打によるつぶれがあり、石核としての機能終了後に転用されたことがわかる。裏面は 1 つの面より成るが、意図的な打撃ではなく、アクシデント的な剥落により生じたと思われる。

サヌカイト (Fig.68-428~436, PL.37)

428~436はいずれも、剥片あるいは碎片である。428は先端縁辺に、使用痕がある。430は 2 次加工のある剥片である。剥片の上部を切断、または欠損した後に左上端部に調整を加えている。剥片下部は欠損している。431は他のサヌカイトに比べ、石質がやや異なる。金山産のサヌカイトの可能性がある。

黒曜石 (Fig.69-437~442, PL.38)

姫島産の灰色を呈する黒曜石と区別して、漆黒色のものをまとめた。産地は同定を行っていないのでわからない。

437は石核である。様々な方向から、剥片剥離を行っている。正面と裏面には小さな連続した剥離面がみられ、頭部調整を行いながら剥片剥離作業を行ったことがわかる。438~442は剥片である。438の腹面は背面から腹面の 3 回の調整剥離により、素材剥片の打点付近を大きく抉り取っている。抉りはバルバスカーに達している。

出土遺物

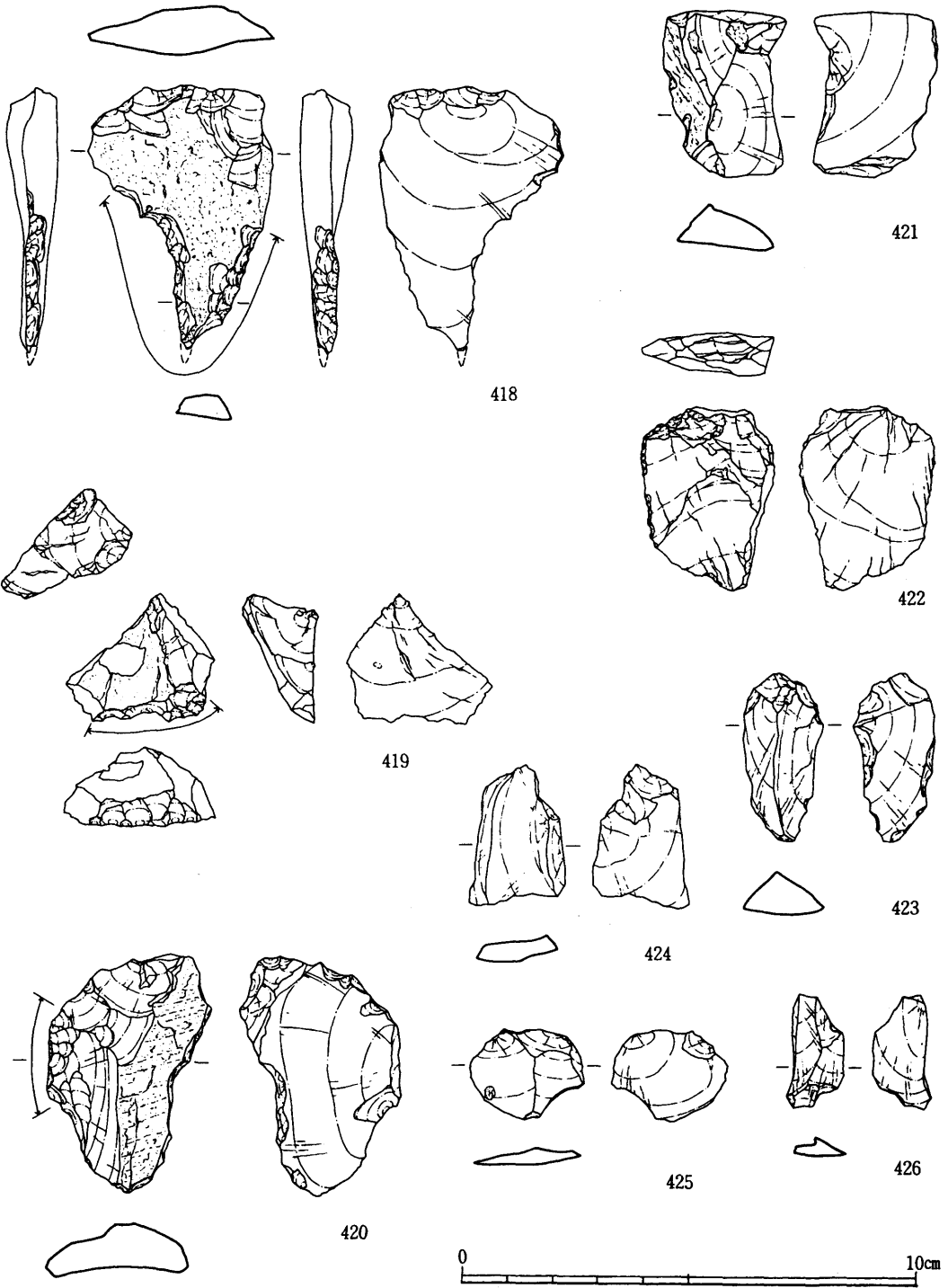


Fig. 67 A区石器実測図 (1)

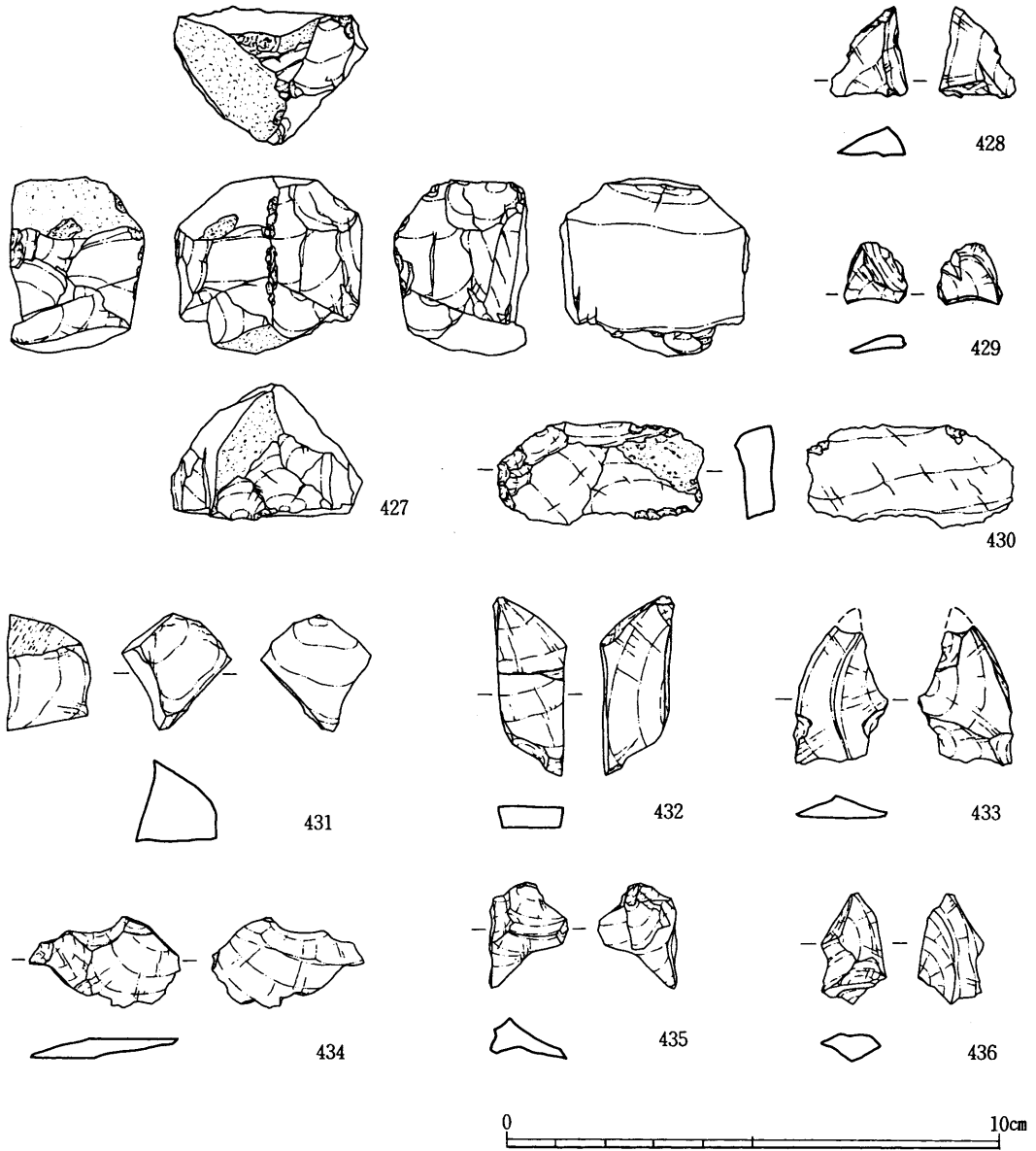


Fig. 68 A区石器実測図 (2)

姫島産黒曜石 (Fig.69-443~447, PL.38)

灰色を呈する、不純物の多い黒曜石である。443~447はいずれも剥片であるが、自然面を残すものが多く、石器製作において、小形の転石が使用されたと推定される。

443は断面三角形を呈する。左側縁部はクサビ状になるが、縁辺にそって小さな階段状の剥離面がみられ、使用による刃部のつぶれの可能性がある。自然面を2面残す。

出土遺物

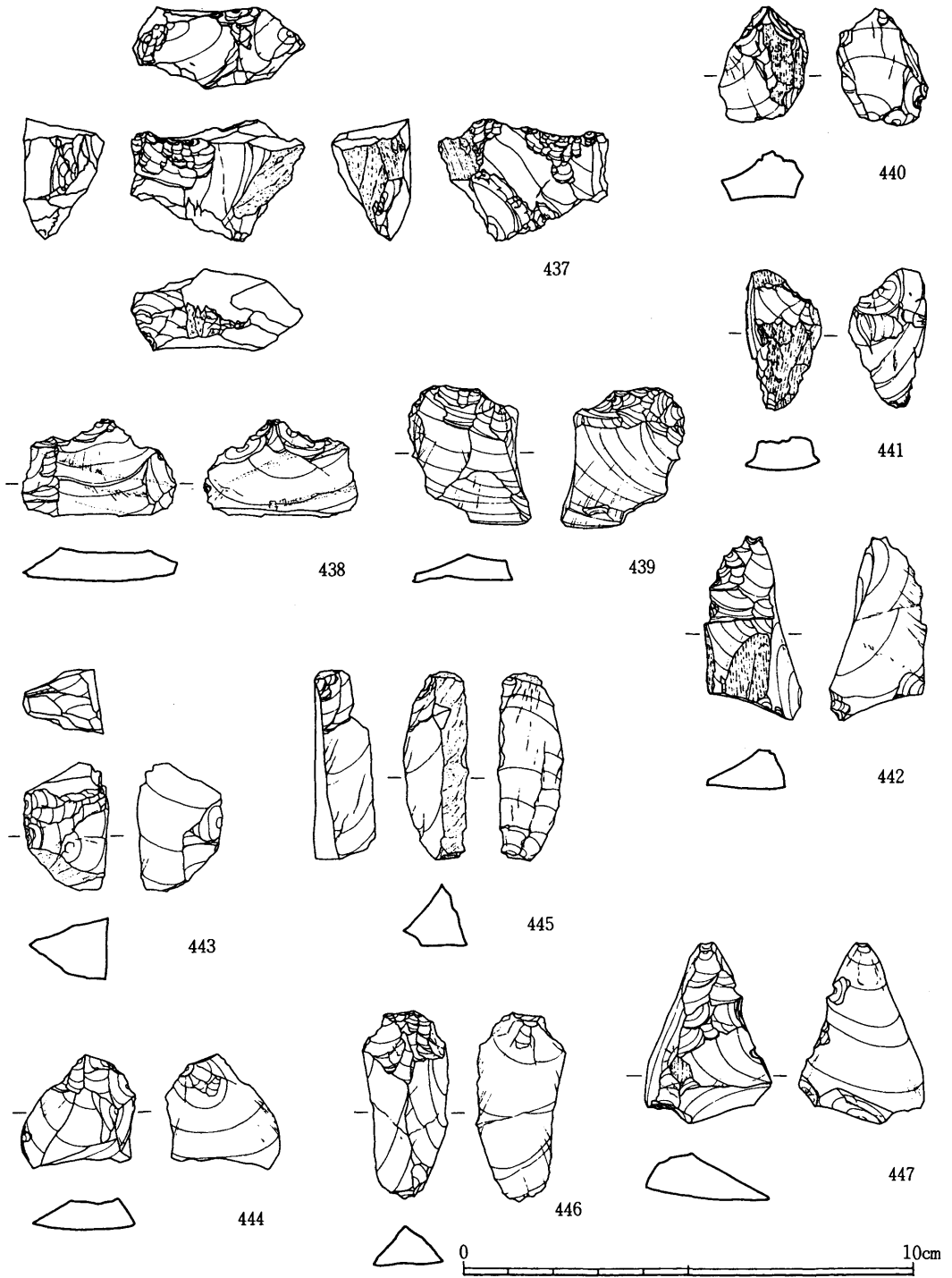


Fig. 69 A区石器実測図 (3)

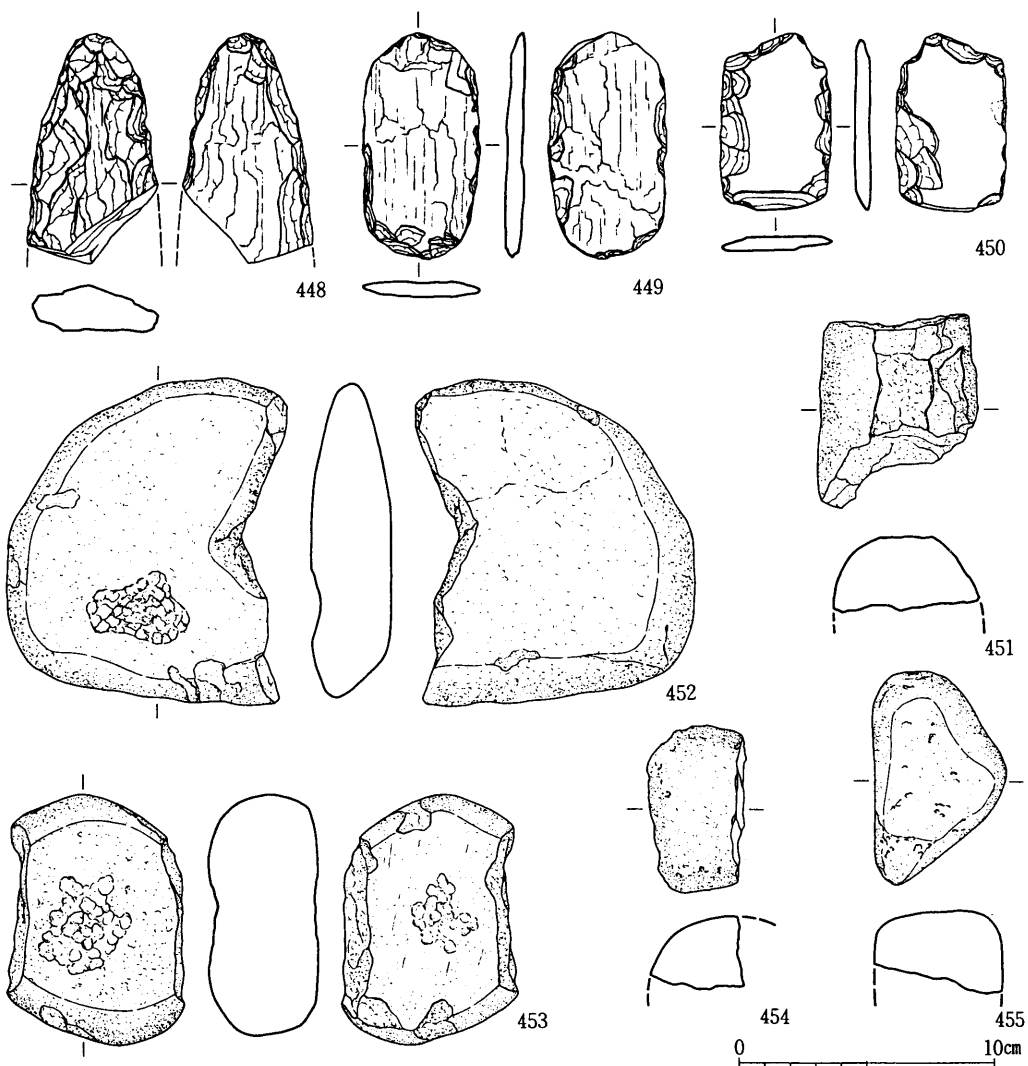


Fig. 70 A区石器実測図 (4)

打製石斧 (Fig.70-448~450, PL.39)

448・449の石材は結晶片岩、450の石材は頁岩である。

磨製石斧 (Fig.70-451, PL.39)

太形蛤刃石斧の破片と推定される。石材は凝灰岩である。

凹石 (Fig.70-452・453, PL.39)

453は両側縁を打ち欠き、正背両面に敲打によるくぼみをもつ。

敲石 (Fig.70-454・455, PL.39)

455は風化のために使用痕が確認できなかったが、石材・形状から判断した。

出土遺物

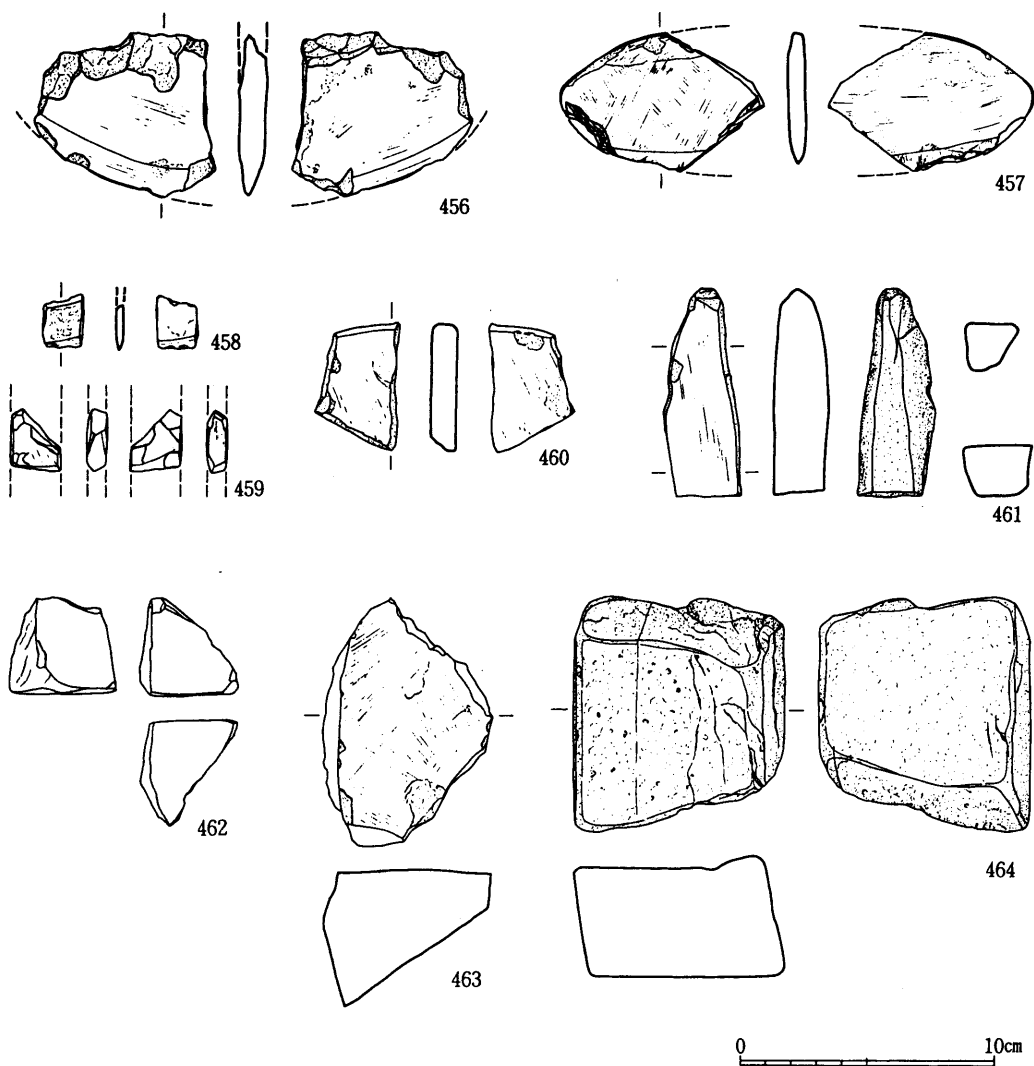


Fig. 71 A区石器実測図 (5)

石庖丁 (Fig.71-456~458, PL.40)

456の石材はカクセン石安山岩、457・458の石材は頁岩である。いずれも両刃である。

扁平片刃石斧 (Fig.71-459, PL.40)

459の石材は頁岩である。上部・下部ともに欠損する。

不明磨製石器 (Fig.71-460, PL.40)

460の石材は、カクセン石安山岩である。

砥石 (Fig.71-461~464, PL.40)

いずれも破片である。464は中世以降のものであろう。

4 小結

本章は、昭和41年に発掘された吉田遺跡第Ⅰ地区A区の報告をおこなった。しかし、既に25年以上の歳月が過ぎ、発掘調査時の図面も散逸しており、遺物が中心の報告とならざるを得なかった。

遺構

本調査は、吉田遺跡調査団発足以前の緊急調査である。工事で露出した遺物包含層を掘り広げるもので、相当困難な状況下での調査であったと推察される。

第4トレンチの「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピット」以外、遺構の有無は不明である。ただ、古墳時代前期前半の土器が比較的まとまりをもち、器形もある程度まで復元できることから、遺構に伴っていた可能性がある。

出土遺物

弥生時代前期

第Ⅰ地区A区は、弥生時代前期よりも以前の遺物は出土していない。弥生時代前期の土器はいずれも小破片で風化するものが多く、二次堆積によってこの地区にもたらされたものと考えられる。その中であって、21の小形精製壺は特筆できるものである。その器形は、板付Ⅱa式小形壺の特徴を有する。板付Ⅱa式の小形精製壺は、北部九州においても遠賀川以東にはほとんど分布しない。

ただし、その風化が他の第Ⅰ地区A区出土土器に比べて著しく、「吉田第Ⅰ-A 1の2」の註記も他の土器には見られない。風化が著しいのは精製土器によるためかもしれないが、第Ⅰ地区A区以外の遺物である可能性も捨てきれないのである。この21の土器のみが、第Ⅰ地区A区出土前期弥生土器において異質であり、特殊なものである。その出土状況が明かでないことが惜まれる。

この他、前期弥生土器に関して、直線文の問題が挙げられる。35のように一見ヘラ描きのようにみえるが、鋸歯状圧痕のつかない貝殻の押圧によって直線文が施されるものがある⁸⁾。また、70のように羽状文は鋸歯状圧痕のつく貝殻によるが、直線文は鋸歯状圧痕のつかない貝殻によるものがある。この特殊文様と直線文で貝殻を使い分ける例は、他遺跡にもかなりある⁹⁾。また、25のように木目がつかない板状工具の押圧直線文がある。

弥生時代中期

第Ⅰ地区A区出土土器の主体を占める。量及び中期後半という時期的なまとまりは「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピットを検出した」ことに起因する。復元できるも

小 結

のも多数あり、出土状況を確定できれば良好な一括資料となる。これらの土器のなかには北部九州系の特徴をもった土器が含まれており、その器種内容も豊富である。「不整形のピット」出土土器は、山口県弥生時代中期後半の編年作業において、重要な位置を占めることになろう。また、北部九州との併行関係を考えていく上でも重要な資料である。

弥生時代後期

出土量は極めて少ない、風化も著しく二次的な堆積によってもたらされたものであろう。

古墳時代前期～中期

弥生時代中期後半の土器について出土量が多い。時期的にも古墳時代前期前半にまとまり復元できることから、遺構に伴った可能性が高い。

二重口縁壺 (266・267)、直口壺 (268・270～272)、山陰系土器 (275～283)、タタキ甕 (284～302)、甕 (303～306)、高坏 (309～313・316)、鉢 (327)、土製支脚 (331) などが古墳時代前期前半土器のセットとなるのであろう。湯田楠木町遺跡第 I 地区土器捨て場出土の土器が同時期と考えられる¹⁰⁾。畿内布留 0 式併行である¹¹⁾。

古墳時代後期

量は少ないが、破片が大きく時期的にまとまり出土地点も「第Ⅲ地点」に集中する。何らかの須恵器集中区があった可能性がある。

古代前半

8世紀から9世紀の幅をもってとらえたが、8世紀代の土器が多い。これは調査区が近接した中央図書館増築予定地M-16でも同様な現象が見られた。概報にあるA区の「崖下の低湿地では、土師器と須恵器の破片と木製品を含む黒色のシルト層が広がり（以下略）」が、中央図書館増築予定地M-16で検出された第4層黒褐色粘質土遺物包含層か旧河川跡と対応する可能性は高い。

古代後半～中世

A区から出土した土師器碗は挿図配置で示したように、376～380の一群、375・381～383の一群、384～390の一群、391～394の一群の順に変遷していったものと考えられる。河村吉行氏の編年¹²⁾によれば、A区出土の土師器碗には10世紀初頭～13世紀後半の時間幅が与えられる。なお、395～398はあまり類例を見ないものである。胴部側に貼り付けられた高台を退化と見るか、高台ではないものと見るかによって、その位置づけは異なる。内面に炭素を吸着させるものが多く、黒色土器として古く位置づけることも可能である。今後の検討が必要である。

吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査

[注]

- 1) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)
- 2) 1992年12月19日に田崎博之氏に実見していただき、ご教示を得た。
- 3) 武末純一「須玖式土器」(『弥生文化の研究』4、1987年)
- 4) 菊川町教育委員会『下七見遺跡Ⅰ』(1989年)
- 5) 山口県教育委員会「奥正権寺遺跡Ⅱ」(『南国大崎ニュータウン 奥正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、1985年)
- 6) 河池遺跡出土の甕は、胴部外面下半調整がミガキである。周東町教育委員会『河池遺跡』(1982年)
- 7) 岩崎仁志「防長地域の足鍋について」(『山口考古』第17号、1988年)
- 8) 伊東照雄「貝殻紋」(『弥生文化の研究』3、1986年)において、ハマグリなどの鋸歯状圧痕を残さない貝殻工具の使用を想定した施文実験が行われている。
- 9) 金関恕・佐原真『弥生土器』Ⅱ(『弥生文化の研究』3、1986年)のPL.11上段の解説として、「篋描紋と組合せて使うこともある(上段は鋸歯紋のみ貝殻紋)」と記述されているが、直線文も無鋸歯の貝殻文である。このように、無鋸歯の貝殻による押圧沈線は、認識されてないことが多々ある。
- 10) 山口市教育委員会『湯田楠木町遺跡第Ⅰ地区発掘調査概報』(1975年)
- 11) 奈良県立橿原考古学研究所『矢部遺跡』(1986年)
- 12) 山口大学埋蔵文化財資料館「中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅱ、1985年)
- 13) 河村吉行「防長における古代～中世の土器」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅱ、1985年)

注

Tab. 3 出土遺物観察表

法量()は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	備考
A区 表採						
1	弥生土器 甕	①(21.4)	淡赤褐色	1mm前後の砂粒をわずかに含む	吉田表面採集	
2	弥生土器 壺底部	②(10.8)	黒灰色	1mm前後の砂粒を多量に含む	吉田表面採集	底面にモミ圧痕
3	弥生土器 高坏		黄灰色	1~2mmの砂粒を含む		内外面風化
4	土師器 高坏		淡赤褐色	精製粘土		内外面風化
5	土師器 高坏		赤褐色	精製粘土	判読不可能	風化著しい
6	須恵器 坏蓋	①(8.6)	灰青色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	吉田表面採集	天井部に自然釉付着
7	須恵器 坏蓋	①(15.2)	青灰色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.6.24 平川(校内)	
8	須恵器 坏蓋	①(14.8)	灰青色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		
9	須恵器 坏	①(13.4)②8.5③4.5	灰青色	精製粘土	吉田表面採集	外面に自然釉付着
10	須恵器 坏	②(7.2)	暗青灰色	微砂粒を含む	S41.6.24 平川(校内)	底面ヘラ切り痕
11	須恵器 坏	②(7.2)	暗青灰色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.6.24 平川(校内)	
12	須恵器 碗	②(7.8)	灰青色	微砂粒を含む	S41.6.24 平川(校内)	
13	土師器 碗	②(5.6)	淡灰黄色	精製粘土		内外面の風化著しい
14	瓦質土器 鍋	①(30.0)	灰白色	精製粘土		外面に一部煤付着
15	瓦質土器 足鍋		白灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.6.24 平川(校内)	
16	瓦質土器 足鍋		淡白灰色	2~3mmの砂粒を多量に含む	1966.6.26 平川④	風化著しい
17	瓦質土器 足鍋		明黄色	1mm前後の砂粒を多量に含む	S41.6.24 平川(校内)	鉄分の付着により変色
18	瓦質土器 足鍋		淡灰赤色	1mmの砂粒をわずかに含む		風化著しい
19	瓦質土器 足鍋		青灰色	微砂粒を含む	S41.6.24 平川(校内)	
前期弥生土器						
20	大形壺 口縁	①(38.8)	黒色	2~3mmの石英粒を含む		
21	小形壺		赤褐色	精製粘土、1~2mmの砂粒をわずかに含む	吉田I-A 1の2	風化著しい
22	中形壺 口縁	①(13.6)	淡褐色	1~2mmの石英粒を含む		
23	甕	①29.4	淡褐色	2~3mmの石英粒を含む砂粒多し	S41.7.8 第Ⅲ攪乱層	内面の風化著しい
24	甕	①(27.8)	灰白色	2mm前後の砂粒を含む	1966.7.15 平川排水溝南壁包含層	風化著しい
25	壺		淡褐色	1~2mmの石英粒を含む	吉田第4トレンチ	板状工具による押圧沈線
26	壺		乳白色	1~2mmの石英粒、赤色斑粒を含む	1966.7.8 吉田第Ⅱ地点攪乱層、表採	
27	壺	②6.4	暗褐色	1~2mmの砂粒を含むが、胎土は緻密	1966.7.13 平川吉田第2・3トレンチ間	
28	壺 底部	②(9.2)	淡褐色	2mm程の石英粒を多量に含む	判読不可能	板状工具による胴部側のおさえ
29	壺 底部	②5.6	①暗褐色 ②明褐色	1~2mmの石英粒を多量に含む	吉田I-A 第4トレンチ	板状工具による胴部側のおさえ
30	壺 底部	②(9.0)	乳白色	2~3mmの石英粒を含む	吉田I-A S41.7 第三トレンチ	鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧沈線
31	壺 底部	②(5.0)	明褐色	1mmの砂粒を含む	吉田I-A 第1トレンチ	鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧沈線
32	壺		黄灰色	1~2mmの砂粒を含む		板状工具による押圧沈線
33	壺		灰白色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田第1A	沈線工具不明
34	壺		淡黄灰色	1~2mmの砂粒を含む		板状工具による押圧沈線
35	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.15 吉田第1Aカクラン	鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧沈線
36	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.18 4トレンチ	ヘラ描き沈線
37	壺		赤褐色	1mmの砂粒を含む		ヘラ描き沈線

吉田遺跡第I地区A区の調査

法量()は復原値

番号	器 種	法 量 (cm) (①口径②底径③器高)	色 調 (①外面②内面)	胎 土	註 記	備 考
38	壺		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.16 4トレンチ	鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧沈線
39	壺		淡黄灰色	2~3mmの砂粒を含む		貼り付け突帯
40	壺		淡褐色	1~2mm砂粒をわずかに含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧連弧文
41	壺		①淡褐色 ②黒灰色	1mm前後の砂粒を少し含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧連弧文
42	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧連弧文
43	壺		淡褐色	微砂粒を多量に含む		ヘラ描き連弧文
44	壺		淡灰褐色	微砂粒と赤色斑を含む	S41.7.13 吉田I-A第1トレンチ砂層中	鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧連弧文
45	壺		①暗褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田I-A 第4トレンチ 41.7.16	沈線間に竹管状の刺突文
46	壺		淡黄灰色	1~2mmの砂粒を少し含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧山形文
47	壺		淡黄灰色	2~3mmの砂粒をわずかに含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧木葉文
48	壺		淡褐色	2~3mmの砂粒をわずかに含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
49	壺		暗灰褐色	2~3mmの砂粒をわずかに含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
50	壺		淡黄灰色	2~3mmの砂粒を多量に含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
51	壺		淡赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
52	壺		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.15 吉田第I Aカクラン	鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
53	壺		淡黄灰色	2mm前後の砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
54	壺		淡黄灰色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
55	壺		淡赤褐色	2~3mmの砂粒をわずかに含む	S41.7.14 第4トレンチ攪乱層	鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
56	壺		明褐色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
57	壺		褐灰色	2mm前後の砂粒を含む	S41.7.15 カクラン	鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
58	壺		①暗灰色 ②黒灰色	微砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
59	壺		淡赤褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
60	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
61	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	吉田I-A 4トレンチ S41.7.10	鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
62	壺		暗赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
63	壺		①暗赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
64	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
65	壺		淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
66	壺		①淡褐色 ②黒色	2~3mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
67	壺		褐灰色	微砂粒を多量に含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
68	壺		淡黄灰色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
69	壺		明褐色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
70	壺		①赤褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒をわずかに含む		無鋸歯状圧痕の直線文と鋸歯状圧痕の羽状文
71	壺		淡黄灰色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
72	壺		淡灰褐色	1mm前後の砂粒を含む	S41.7.10 第1トレ	鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
73	壺		淡褐色	微砂粒を含む	S41.7.16 第1トレ	鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
74	壺		赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
75	壺		淡赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
76	壺		暗赤褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
77	壺		①淡黄灰色 ②灰黄色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文

出土遺物観察表

法量()は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	備考
78	壺		暗赤褐色	2~3mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
79	壺		淡灰白色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.14 第1トレンチ 第2層	鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧羽状文
80	壺		灰褐色	赤色斑粒を多量に含む		外面赤色顔料塗布
81	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧線状文
82	鉢		赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		ヘラ描き沈線
83	甕		暗褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む		ヘラ描き沈線 口縁端部にキザミ
84	甕		①暗褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.14 吉田I-A	3条のヘラ描き沈線
85	甕		暗褐色	2~3mmの砂粒を含む	吉田I-A A面	2条のヘラ描き沈線
86	甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		2条以上のヘラ描き沈線 口縁端部にキザミ
87	甕		①暗褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	吉田I-A 第4トレンチ	3条のヘラ描き沈線
88	甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	吉田I-A 4トレンチ S41.7.18	2条以上のヘラ描き沈線 口縁端部にキザミ
89	甕		淡褐色	1~3mmの砂粒を含む	吉田I-A 第4トレンチ 包含層	5条以上のヘラ描き沈線 口縁端部にキザミ
90	甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		5条以上のヘラ描き沈線
91	甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.12 吉田1トレンチ 包含層下90cm	6条以上のヘラ描き沈線 口縁端部にキザミ
92	甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	吉田I-A 66.7.18 排水溝南区	5条以上のヘラ描き沈線 口縁端部にキザミ
93	甕		①黒色 ②暗褐色	1~2mmの砂粒を含む		板状工具による押圧沈線
94	甕		①赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		3条以上の沈線
95	甕		①暗褐色 ②淡赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田第I-A A面	2条のヘラ描き沈線
96	甕		①暗褐色 ②赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		2条のヘラ描き沈線
97	甕		赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.13 第1トレンチ 砂の中	3条以上の板状工具による押圧沈線
98	甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		3条の沈線
99	甕		①黒褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		削り出し突帯
100	甕		①暗褐色 ②赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		7条以上のヘラ描き沈線
101	甕		①褐色 ②明赤褐色	1~2mmの砂粒、赤色斑粒を含む		6条以上のヘラ描き沈線
102	甕		①赤褐色 ②黒褐色	2~3mmの砂粒を含む		沈線下に列点文
103	甕		淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む		沈線間に列点文
104	甕		①黒灰色 ②明褐色	微砂粒を多量に含む	吉田I-A区A 4トレンチ 包含層	沈線間にハケ工具による列点文
105	甕		淡褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む		沈線間に列点文
106	甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		3条の沈線、沈線間に列点文
107	甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		沈線下に竹管状の刺突文
108	甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	第1トレンチA 1966.7.12	沈線下に竹管状の刺突文
109	甕		黒灰色	1~2mmの砂粒を含む		沈線下に竹管状の刺突文
110	壺 底部	②9.0	淡赤褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	1966 平川吉田第1地区 A区 第4トレンチ	板状工具による胴部側のおさえ
111	壺 底部	②(11.0)	①赤褐色 ②淡赤褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	吉田第I 攪乱層 S41.7.15	風化著しい 外面に一部ハケ痕
112	壺 底部	②(10.4)	淡褐色	2~3mmの砂粒を少し含む	S41.7.14 第4トレンチ 攪乱層	風化の為調整見えず
113	壺 底部	②(10.4)	淡赤褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.15 吉田 第I Aからん層	風化の為調整見えず
114	壺 底部	②(12.0)	①淡赤褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	S41.7 4トレンチ	風化著しいが、一部にハケを残す
115	壺 底部	②(10.4)	淡褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	S41.7.16 第4トレンチ	風化著しい
116	壺 底部	②9.2	①淡褐色 ②黒灰色	2~3mmの砂粒を多量に含む	S41.7.18 第I-A A面	土中の鉄分が付着する
117	壺 底部	②(8.8)	①淡赤褐色 ②黒色	1~2mmの砂粒を少し含む	第4トレンチ包含層	風化著しい

吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査

法量()は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	備考
118	壺 底部	②(6.0)	淡黄灰色	2~3mmの砂粒を多量に含む	第Ⅰ地区A区 第4トレンチ 包含層	鉄分の付着著しい
119	壺 底部	②(7.4)	淡褐色	2~3mmの砂粒を少し含む	吉田 I-A 第Ⅳトレ S41.7.17	外面ハケ後ナデ 内面ミカキ
120	壺 底部	②5.6	①淡褐色 ②黒色	1mm以下の砂粒を多量に含む	S41.7.15 平川Ⅳ	外面風化 内面ナデ
121	壺 底部	②7.0	淡褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	S41.7.15 排水溝南ヘキ	内外面風化
122	甕 底部	②8.0	褐灰色	3~4mmの砂粒を含む	1966 平川 第4トレンチ 包含層	外面ハケ、内面ナデ、 底部にモミ圧痕
123	甕 底部	②(8.4)	①赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む 黒雲母を含む	S41.7 吉田 第4トレンチ	外面ハケ 内面ナデ
124	甕 底部	②8.6	①赤褐色 ②褐灰色	2~3mmの砂粒を含む	1966.7.17 平川 カクラン層	外面ハケ 内面ナデ
125	甕 底部	②(10.2)	①黄灰色 ②灰黒色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.18 第4トレンチ	外面ハケ 内面ハク落
126	甕 底部	②(8.8)	①淡赤褐色 ②淡褐色	3~4mmの砂粒を含む	1966.7.16 4トレンチ	外面ハケ 内面ナデ
127	甕 底部	②(8.0)	①赤褐色 ②褐灰色	2~3mmの砂粒を含む		外面ハケ 内面風化
128	甕 底部	②(7.4)	①褐灰色 ②黒灰色	1~3mmの砂粒を含む	S41.7.15 第4トレンチ-2 包含層	外面ハケ後ナデ 内面風化
129	甕 底部	②(7.0)	①赤褐色 ②褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	第4トレンチ	外面ハケ後ナデ 内面風化
130	甕 底部	②(8.0)	①赤褐色 ②黒色	2~3mmの砂粒を多量に含む	第4トレンチ 41.7.17	外面ハケ後ナデ 2次焼成
131	甕 底部	②(9.0)	①赤褐色 ②灰黒色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.10 1トレ 包含層(下)	外面ハケ後ナデ 内面ナデ
132	甕 底部	②(7.8)	灰褐色	2~3mmの砂粒を少し含む	吉田 第Ⅰ-A	外面ナデ(かすかにハケ痕)
133	甕 底部	②(9.4)	褐灰色	1~2mmの砂粒を少し含む	吉田 第Ⅰ-A かくらん層	内外面ナデ
134	甕 底部	②(6.8)	①赤褐色 ②淡褐色	1~3mmの砂粒を少し含む	吉田 I-A S41.7.10 包含層(上)	2次焼成により器面のハク落が著しい
135	甕 底部	②(8.4)	淡褐色	2~3mmの砂粒を少し含む	S41.7.15 第4トレンチ	内外面の風化著しい
弥生時代中期						
136	北部九州系無頸壺	①14.6②(10.2)③42.0	①淡褐色 ②黒色	カドの丸いチャート粒を含む	S41.7.13 平川 吉田	底部穿孔 出土状況写真あり
137	北部九州系壺	①(13.2)	淡褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	1966.7.13 平川遺跡	鋤形口縁
138	北部九州系壺		淡赤褐色	1mmの砂粒を含む		内外面の風化著しい
139	北部九州系壺		淡赤褐色	1mmの砂粒を含む	S41.7.17 吉田 第ⅠA 包含層	内外面の風化著しい
140	北部九州系壺		淡褐色	1mm前後の砂粒をわずかに含む	S41.7.15 吉田 第ⅠA 攪乱層	内外面風化
141	北部九州系壺		淡褐灰色	精製粘土		
142	北部九州系広口壺	①(23.6)	明褐色	精製粘土に1mm前後の砂粒を含む	S41.7 吉田 第ⅠA 第4トレンチ	内外面の風化著しい
143	北部九州系広口壺	①(19.8)	淡褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.15 吉田第ⅠA 第3トレンチ 包砂層	
144	北部九州系広口壺	①(24.6)②6.4③30.2	淡明褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	S41.7.15 吉田 第ⅠA 4トレンチ②	出土状況写真あり
145	小形短頸壺	①(8.8)②4.0③12.2	①淡灰褐色 ②灰黒色	1~2mmの砂粒を含む		
146	小形短頸壺	①10.0②5.4③16.7	①乳白色 ②黒灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む		器面のハク落激しい
147	小形短頸壺	①(12.2)	暗褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む		
148	小形短頸壺	①8.8	黒色	1mm前後の砂粒を多量に含む		出土状況写真あり
149	垂下口縁壺	①(30.0)	褐灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.10 吉田第ⅠA 1トレンチ 包含層(上)	垂下部は無文である
150	垂下口縁壺		淡赤褐色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 第Ⅰ地区A区 第4トレンチ 包含層	風化著しい
151	垂下口縁壺	①(33.0)	暗灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.15 平川排水溝	垂下部に半截竹管による山形文
152	垂下口縁壺	①(31.8)	淡褐色	1~2mmの砂粒と赤色斑粒を含む	S41.7.15 平川Ⅳ	口縁内面に円形浮文をもつ
153	垂下口縁壺	①(24.6)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		
154	垂下口縁壺	①(22.2)	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	41.7.13 弥生包含層 深さ15cm	
155	垂下口縁壺		①黒色 ②灰白色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		
156	垂下口縁壺		淡褐灰色	1~2mmの石英粒を含む	S41.7.15 吉田 第ⅠA カクラン	風化著しい

出土遺物観察表

法量()は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	備考
157	垂下口縁壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		
158	垂下口縁壺		灰白色	2~3mmの砂粒を含む		
159	垂下口縁壺		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.7.17 吉田 第ⅠA 第4トレンチ 東ヘキ	弥生砂質包含層
160	垂下口縁壺		淡明褐色	1mm前後の砂粒をわずかに含む		
161	垂下口縁壺		明褐色	1mm前後の砂粒を含む	S41.7.18 吉田 第ⅠA	棒状浮文
162	垂下口縁壺	①20.4	①明褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	平川 吉田 第Ⅳトレンチ 1966.7.13	
163	北部九州系壺 底部	②10.0	①淡黄灰色 ②黒灰色	1~2mmの砂粒を含む	平川 吉田 第Ⅰ地区 1トレンチ	
164	垂下口縁壺		①暗褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	1966.7.15 吉田 ⅠA 第4トレンチ	
165	垂下口縁壺	②10.0	①明褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を多量に含む	1966.7.15 平川 第Ⅳ トレンチ	胴部最大径に2個1組の円形浮文
166	垂下口縁壺		黒灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.10 吉田 第ⅠA 1トレ 包含層(下)	
167	垂下口縁壺	②(11.7)	①明褐色 ②灰白色	1mm前後の砂粒を多量に含む	S41.7 吉田 第ⅠA 4トレンチ②	
168	垂下口縁壺		明褐色	2~3mmの砂粒を含む	判読不可能	
169	壺		①淡褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.15 吉田 第Ⅰ 第4トレ	
170	壺		淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.8 吉田 第Ⅲ カクラン	
171	垂下口縁壺	②5.2	①淡褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.8 平川Ⅲ	
172	北部九州系甕	①47.0	①暗褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒と赤色斑粒を多量に含む	1966.7.13 吉田 第Ⅲ 地点の1	外面に2種類のハケが使用される
173	北部九州系甕	①(37.6)	乳白色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.13 平川 排水 溝南側包含層	外面ハケ 内面ナデ
174	北部九州系甕	①(26.2)	黒色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第ⅠA 排水溝南側	外面ハケ 内面ナデ
175	北部九州系甕		淡黄灰色	1mmの砂粒と赤色斑粒を含む	1966.7.12 吉田 1トレン チ 包含層下90cm	風化著しい
176	北部九州系甕		①黒色 ②灰黒色	微砂粒を含む		内外面ナデ
177	甕		①黄灰色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 第Ⅰ地区A区 S41.7 第三トレ	風化著しい
178	瀬戸内系甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田 第ⅠAトレ 66.7.10	突帯上押圧
179	北部九州系甕	①(30.8)	褐色	微砂粒を多量に含む	41.7.14 平川 1トレン チ	外面ハケ 内面ナデ
180	瀬戸内系甕	①(20.6)	①暗褐色 ②褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.12 吉田 1トレン チ 包含層下90cm	外面ハケ 内面ミガキ
181	瀬戸内系甕	①(33.8)	明淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.12 吉田 1トレン チ 包含層下50cm	内外面ナデ
182	瀬戸内系甕	①(26.6)	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	1966 平川 吉田	風化著しい
183	瀬戸内系甕	①(28.2)	黄灰色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 ⅠA	外面ケズリ痕 内面ナデ
184	甕	①(20.2)	褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.8 吉田 第Ⅲ カクラン	外面ケズリ 内面ケズリ後ナデ
185	甕	①(25.0)	暗灰色	微砂粒を含む	吉田 第ⅠA地区 S41.7 第三トレ	外面ケズリ 内面ナデ
186	甕	①(30.0)	明褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.13 吉田 第Ⅰ 第Ⅱトレンチ間	外面ケズリ 内面ナデ
187	甕	①(16.0)	①暗灰色 ②淡褐色	微砂粒を含む	S41.7.15 吉田 第ⅠA 攪乱層	外面ハケ 内面ナデ
188	甕	①(24.0)	明褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7 吉田 第ⅠA 第4トレンチ	外面擦痕 内面ナデ
189	甕	①(24.0)	褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.17 吉田 第ⅠA 包含層	外面擦痕 内面ケズリ後ナデ
190	甕	①(17.4)	淡赤色	微砂粒をわずかに含む	S41.7 吉田 第ⅠA 排水溝	風化著しい
191	甕	①(20.0)	黒灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む	判読不可能	風化著しい
192	甕	①(24.4)	黄白色	1~2mmの砂粒を含む	判読不可能	風化著しい
193	甕	①(22.8)	明褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.18 平川 第Ⅲ 地点 攪乱層	外面ハケ 内面ケズリ後ナデ
194	甕	①(19.2)	淡灰褐色	微砂粒をわずかに含む	S41.7.14 吉田 第Ⅰ-A	風化著しい
195	甕	①(21.0)	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田 Ⅰ-A	外面ハケ 内面ナデ
196	甕	①(30.0)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.15 吉田 ⅠA 第4トレンチ	外面ハケ 内面ナデ

吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査

法量()は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	備考
197	甕	①(20.0)	淡灰褐色	1mm前後の砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第ⅠA 排水溝南側	外面ハケ内面ナデ
198	甕	①(19.6)	黒褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41. 吉田 第Ⅰ-A 1トレ	外面のハク離が激しい
199	甕	①(13.8)	暗褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	吉田 第Ⅰ地区A区 第4トレンチ	風化著しい
200	甕	①(23.0)	淡赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田 第Ⅰ-A S41 第Ⅲトレ	風化著しい
201	甕	①(18.0)	①淡赤褐色 ②黒灰色	2~3mmの砂粒を含む	吉田 第Ⅰ地区A区 第4トレンチ	風化著しい
202	甕	①(21.2)	①暗褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田 I-A	風化著しい
203	甕	①(21.6)	暗褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7 吉田 第Ⅰ地区A区 第4トレンチ	出土状況写真あり
204	甕	①(15.8)	①褐色 ②灰黒色	微砂粒を多量に含む	吉田 第1トレンチ	外面ハケ内面ナデ
205	甕	①(20.6)	淡黄灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田 第Ⅰ遺跡A区	内外面風化外面ハケ痕
206	甕	①(21.8)	淡黄色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 I-A	風化著しい
207	高坏 坏部	①推定	淡褐色	微砂粒を多量に含む		
208	高坏 脚部	②22.6	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	1966.7 平川 吉田遺跡	内外面風化
209	高坏 裾部	②(11.2)	①淡赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		
210	高坏 裾部	②(17.8)	暗褐色	1mm前後の砂粒を含む	吉田 第Ⅰ-A地区 S41.7 第三トレ	
211	高坏 坏部		①淡褐色 ②黒灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む	1966.7.15 平川 吉田 第Ⅰ地区A区 第Ⅳトレンチ	風化著しい
212	高坏 脚部		淡黄灰色	1~2mmの砂粒を含む	1966 吉田 攪乱層	風化著しい
213	高坏 脚部		淡明褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	1966.7.12 吉田 1トレンチ	内面のシボリ痕明瞭
214	高坏 脚部		淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田 第Ⅰ地区A区 第4トレンチ	風化著しい
215	高坏 脚部		淡褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	吉田 第Ⅰ地区A区 4トレンチ	風化著しい
216	鉢	②5.6	①褐灰色 ②黒灰色	2~3mmの砂粒を含む	41.7 第ⅠA	
217	ミニチュア土器鉢	②(4.6)	乳白色	1mm前後の砂粒をわずかに含む		風化著しい
218	ミニチュア土器 底部	②(4.2)	①黒灰色 ②暗褐色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 第Ⅰ地区A区 第1トレンチ 第2層	風化著しい
219	ミニチュア土器 底部	②4.2	茶褐色	1~3mmの砂粒を含む	吉田 第Ⅰ地区A区 第4トレンチ	風化著しい
220	壺 底部	②(8.4)	淡灰褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		外面ハケ後ヨコミガキ 内面ミガキ
221	壺 底部	②(10.2)	淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		外面タテミガキ
222	壺 底部	②(9.4)	淡褐色	1~2mmの砂粒を少し含む		外面にハケ残す
223	壺 底部	②(9.0)	淡黄灰色	1~2mmの砂粒多し	S41 吉田 I-A 1トレ	内外面風化
224	壺 底部	②(10.2)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.14 吉田 I A	外面ハケ痕内面ナデ
225	壺 底部	②(10.6)	①淡赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7 4トレンチ	風化著しい
226	壺 底部	②(8.4)	①淡赤褐色 ②淡灰褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	吉田 第Ⅰ-A地区 S41.7 第三トレ	風化著しい
227	壺 底部	②(9.0)	黒灰色	2前後mmの砂粒を含む	吉田 第Ⅰ-A地区 第三トレ	底部側面右方向へのケズリ
228	壺 底部	②(10.8)	淡黄白色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.16 排水溝北面 かくらん層	風化著しい
229	壺 底部	②(6.4)	褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 第ⅠA地区	底側面ケズリ後ナデ
230	壺 底部	②(12.0)	①灰色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.15 第4トレンチ	内外面風化一部ミガキ痕
231	壺 底部	②(7.0)	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.15 吉田 第Ⅰ地区A区 4トレンチ-2	外面ハケ後ミガキ内面ハケ後ナデ
232	壺 底部	②(12.0)	明褐色	4mm前後の砂粒を含む	S41.7.16 吉田 第ⅠA 1トレンチ 包含層(上)	外面ヨコミガキ
233	壺 底部	②(8.4)	褐灰色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.17 2トレンチ 東ヘキ 弥生砂質包含層	外面ヨコミガキ
234	壺 底部	②(8.4)	①赤褐色 ②暗褐色	1~2mmの砂粒を含む		内外面風化
235	壺 底部	②(8.4)	淡黄灰色	2~3mmの砂粒を含む		内外面風化
236	壺 底部	②(7.6)	①淡褐色 ②黒色	2~3mmの砂粒を多量に含む	吉田 第Ⅰ-A 第4トレ S41.7.16	内外面風化

出土遺物観察表

法量()は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	備考
237	壺 底部	②(5.8)	①淡赤褐色 ②乳白色	1mm前後の砂粒を多量に含む	吉田 第Ⅰ-A地区 S41.7. 第三トレンチ	内外面風化
238	甕 底部	②(5.5)	淡赤褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	吉田 第Ⅰ-A 目付?	内外面風化
239	甕 底部	②(8.2)	淡赤褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	吉田 第Ⅰ-A地区 S41.7. 第?トレンチ	風化著しい 外面にハケ痕
240	甕 底部	②(8.6)	①赤褐色 ②褐灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む	平川 吉田 第ⅠA S41.7.13 排水溝南側包含層	外面ハケ後ヨコナデ 内面ナデ
241	甕 底部	②(7.2)	①赤褐色 ②黒灰色	1mm前後の砂粒を含む	S41.7.15 吉田 ⅠA 第4トレンチ	外面ハケ後ナデ 内面ナデ
242	甕 底部	②(6.8)	①淡赤褐色 ②淡褐色	1mm前後の砂粒、赤色斑粒を含む	1966.7.12 吉田 1トレンチ 包含層下60cm	外面ハケ後ヨコナデ 内面ナデ
243	甕 底部	②(6.0)	淡赤褐色	赤色斑粒を含む	S41.7.15 平川 吉田 第Ⅰ地区A区 第4トレンチ	内外面ナデ
244	甕 底部	②(6.0)	淡赤褐色	1mmの砂粒をわずかに含む		内外面風化
245	甕 底部	②(5.8)	淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	1966.7.15 平川 排水溝南側包含層	外面ハケ 底面砂圧痕
246	甕 底部	②(6.2)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.14 吉田 第ⅠA 攪乱と包含層の境界	内外面風化
247	甕 底部	②(5.2)	淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	1966.7.15 平川 第Ⅳトレンチ	内外面風化
248	甕 底部	②(6.2)	赤褐色	1mm前後の砂粒を含む	吉田 Ⅰ-A 1トレンチ S41.7.12	内外面ナデ
249	甕 底部	②(6.0)	①淡赤褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.12 包含層下73 吉田 Ⅰ-A 1トレンチ	外面ハケ後ナデ 内面ナデ
250	甕 底部	②6.6	灰褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.7. 吉田 第Ⅰ-A 第4トレンチ	外面ハケ後ナデ 内面ユビ圧痕
251	甕 底部	②(8.0)	乳白色	2~3mmの砂粒を含む	吉田 第Ⅰ地区A区 第4トレンチ包含層	底面ユビ圧痕
252	甕 底部	②5.6	暗褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	第4トレンチ	外面ハケ 内面ナデ
253	甕 底部	②5.6	暗灰色	1~2mmの砂粒を含む	4トレンチ S41.7.16	外面板ナデ状の擦痕
254	甕 底部	②5.0	①淡赤褐色 ②黒色	1mm前後の砂粒を多量に含む	1966.7.17 第Ⅳトレンチ	外面ケズリ後ナデ 内面ナデ
弥生時代後期						
255	複合口縁壺	①(15.0)	淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.7.8 平川 第Ⅲ 攪乱層	
256	複合口縁壺		淡黄白色	1~2mmの砂粒を含む		風化著しい
257	複合口縁壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.8 吉田 第Ⅲ 攪乱層	風化著しい
258	複合口縁壺		淡褐色	微砂粒を含む	吉田 第Ⅰ-A 1トレンチ	風化著しい
259	複合口縁壺		淡褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.8 平川 第Ⅲ カクラン層	風化著しい
260	甕	①(18.4)	淡褐色	1mm前後の砂粒を含む	吉田 ⅠA	風化著しい
261	甕	①(12.0)	淡黄灰色	1mm前後の砂粒を含む	S41.7 吉田 第ⅠA 排水溝	
262	高坏	①(23.8)	淡赤褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	吉田 ⅠA	
263	高坏 脚部		淡灰色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.8 平川 第Ⅲ カク乱層	外面ハケ後ミガキ
264	高坏 脚部		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.8 吉田 第Ⅰ-A Ⅲ地点	風化著しい
265	高坏 脚部		淡褐色	微砂粒を含む	1966.7.13 平川 吉田 遺跡	内面ケズリ
古墳時代前期~中期						
266	二重口縁壺	①(16.8)	暗灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7 吉田 第ⅠA 包含層下	風化著しい
267	二重口縁壺		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	1966.7.15 排水溝南側包含層	
268	直口壺	①(10.2)	赤褐色	2~3mmの砂粒を少し含む	S41.7.10 吉田 ⅠA 1トレンチ包含層(下)	風化著しい
269	直口壺		灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.13 吉田 第ⅠA 排水溝南側	外面あれる
270	直口壺	①(12.6)	乳白色	1~2mmの砂粒を少し含む	1966.7.13 排水溝南側	内面ハケ
271	直口壺	①(11.6)	①淡褐色 ②褐灰色	1~3mmの砂粒を含む	S41.7.10 1トレンチ 包含層(上)	内面ケズリ
272	直口壺	①11.0	①黒褐色 ②淡褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.10 吉田 第Ⅱトレンチ	外面ハケ 内面ケズリ
273	直口壺	②1.8	淡褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	1966.7.15 排水溝北面	ほぼ丸底
274	直口壺		赤褐色	精製粘土に微砂粒を含む	吉田 第Ⅰ地区A区 第Ⅲトレンチ	

吉田遺跡第I地区A区の調査

法量()は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	備考
275	山陰系壺	①14.0	①淡褐色 ②黒灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田 I-A	
276	山陰系甕	①(26.8)	淡赤褐色	微砂粒、赤色斑粒を多量に含む	1966.7.13 平川 排水溝南側	風化著しい
277	山陰系甕		淡赤褐色	微砂粒を多量に含む	S41.7.8 吉田 第Ⅲ攪乱層	風化著しい
278	山陰系甕		淡黄灰色	微砂粒を多量に含む		風化著しい
279	山陰系甕		①淡褐色 ②褐灰色	微砂粒を多量に含む	S41.7.13 吉田 第ⅠA排水溝南側包含層	
280	山陰系甕		淡赤褐色	微砂粒を多量に含む	S41.7.17 IIトレンチ南側	外面に一部煤付着
281	山陰系甕	①(14.6)	淡黄灰色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.12 吉田 Iトレンチ包含層下80cm	
282	山陰系甕	①(16.6)	淡褐灰色	微砂粒を含む		外面に一部煤付着
283	山陰系甕	①(16.6)	淡褐灰色	微砂粒を含む	41.7.8 吉田 第Ⅲ攪乱層	外面タタキ後ハケ
284	タタキ甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.16 吉田 排水溝北面中かくらん層	
285	タタキ甕		淡褐色	微砂粒を含む		
286	タタキ甕		淡褐色	赤色斑粒を含む		
287	タタキ甕		淡褐色	1mm前後の砂粒を含む		
288	タタキ甕		淡黄灰色	赤色斑粒を含む		
289	タタキ甕		淡黄灰色	2~3mmの砂粒を多量に含む	S41.7.8 吉田 第Ⅲ攪乱層	風化著しい
290	タタキ甕		暗褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第ⅠA排水溝南側	
291	タタキ甕		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第ⅠA	
292	タタキ甕		①乳白色 ②黒色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第ⅠA南側排水溝包含層	風化著しい
293	タタキ甕		淡褐灰色	1~3mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第Ⅰ-A	
294	タタキ甕		暗灰褐色	2~3mmの石英粒を含む	吉田 I-A III-1	外面に一部煤付着
295	タタキ甕		①暗褐色 ②灰白色	1~3mmの砂粒、赤色斑粒を含む		
296	タタキ甕		①淡赤褐色 ②暗灰褐色	1~3mmの砂粒と黒雲母を含む		風化著しい
297	タタキ甕		①淡赤褐色 ②淡黒灰色	1~2mmの砂粒と赤色斑粒を含む	S41.7.13 吉田 第ⅠA排水溝南壁	外面に一部煤付着
298	タタキ甕		①淡赤褐色 ②黒灰色	カドの丸い2~3mmのチャート粒を含む	吉田 第ⅠA区A区 S41.7.14第一トレンチ第二層	
299	甕	①(14.0)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.12 吉田 Iトレンチ包含層下50	外面に煤付着
300	甕	①(23.4)	淡赤褐色	1~3mmの砂粒と赤色斑粒を含む	S41.7.13 吉田 I-A排水溝南壁	外面タタキ内面ハケ
301	甕	①(20.8)	暗褐色	1~2mmの砂粒と黒雲母を含む	1966.7.15 平川 排水溝南壁包含層	外面に煤付着
302	甕	①(16.0)	淡黄灰色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 第ⅠA地区	外面タタキ後ハケ内面ケズリ後ハケ
303	甕	①(12.6)	乳白色	1~2mmの砂粒を含む		
304	甕	①(14.4)	淡黄灰色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 I-A 南側排水溝包含層	風化著しい
305	甕	①(18.6)	褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.10 吉田トレンチⅠA包含層(上)	外面に煤付着
306	甕	①(16.2)	褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第ⅠA	
307	甕	①(15.0)	乳白色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第ⅠA排水溝南側	
308	甕	①(16.6)	褐灰色	微砂粒を多量に含む	S41.7.14 平川 東側IIトレンチ 弥生2	
309	高坏	坏部 ①(36.4)	明褐色	1mmの砂粒を少し含む	66.7.10 吉田 第ⅠAトレンチ1	
310	高坏	坏部 ①(20.0)	淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 I-A 第1トレンチ包含層下50cm S41.7.12	
311	高坏	坏部 ①(19.6)	黄灰色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	1966.7.13 平川 吉田遺跡	
312	高坏	坏部 ①(19.2)	淡赤褐色	微砂粒とわずかに2mmの砂粒を含む	S41.7.8 第Ⅲ攪乱層	
313	高坏	坏部	淡黄灰色	微砂粒を含む	S41.7.16 排水溝南壁	風化著しい
314	高坏	坏部 ①(18.8)	淡赤褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.7.8 吉田 第Ⅲ攪乱層	風化著しい

出土遺物観察表

法量()は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	備考
315	高坏 坏部		明褐色	微砂粒を含む	1966.7.13 吉田遺跡排水溝南側包含層	
316	高坏 坏部		淡赤褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.7.10 吉田 第I A 1 トレンチ包含層(上)	風化著しい
317	高坏 坏部		淡赤褐色	微砂粒を含む	1966.7.13 平川 吉田遺跡排水溝南側包含層	風化著しい
318	高坏 脚部		淡黄灰色	精製粘土に1mmの砂粒をわずかに含む	排水溝南壁包含層	
319	高坏 脚部		淡黄灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.15 吉田 第I A 排水溝南側包含層	風化著しい
320	高坏 脚部		明褐色	1~2mmの砂粒と赤色斑粒を含む	1966.7.13 平川 吉田遺跡排水溝南側包含層	
321	高坏 脚部		淡赤褐色	精製粘土	1966.7.15 平川 排水溝南壁包含層	風化著しい
322	高坏 脚部		赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		風化著しい
323	高坏 脚部		①淡赤褐色 ②黒灰色	1~2mmの砂粒を含む		風化著しい
324	高坏 脚部	②(10.4)	褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 I-A 第三トレンチ包含層 41.7.10	
325	高坏 脚部		淡黄灰色	1~2mmの砂粒を少し含む	S41.7.1 吉田 第I A 排水溝南側	風化著しい
326	高坏 脚部		黒褐色	1~2mmの砂粒を含む	第I-A かく乱	
327	鉢	②(2.6)	暗灰色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 第I-A I トレンチより2m70cm深さ60	
328	鉢		淡赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田 第I-A 地区 S41.7 第三トレンチ	風化著しい
329	鉢	①(15.0)	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田 I-A S41.7 第三トレンチ	風化著しい
330	鉢	①(13.0)	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.10 吉田 第I A 攪乱層	風化著しい
331	土製支脚	②(7.4)	淡褐色	微砂粒を含む	第4トレンチ②	
332	壺 底部	②5.0	①淡褐灰色 ②暗灰色	1~3mmの砂粒を多量に含む	S41.7.8 吉田 第三トレンチ攪乱層	
333	壺 底部	②6.4	①褐灰色 ②黒灰色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.15 平川 排水溝南壁	
334	壺 底部	②(5.2)	淡白褐色	1~2mmの石英粒を含む	判読不可能	内外面の風化著しい
335	甕 底部	②3.4	淡褐灰色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	1966.7.15 平川 吉田 第I 地区A区 第四トレンチ	
336	甕 底部	②3.4	淡明褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田 第I A 第1トレンチ包含層 41.7.12	風化著しい
337	甕 底部	②4.3	①白褐色 ②褐灰色	1~2mmの砂粒と黒雲母を含む		底面にタキ痕
338	鉢 底部	②3.4	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		内外面ナデ
339	甕 底部	②2.4	暗灰褐色	5mmの石英粒を含む	吉田 66.7.15 排水溝南面	
340	壺 底部	②(3.2)	淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 66.7.13 排水溝南面	
341	鉢 底部	②(3.0)	灰白色	1mm前後の砂粒を含む	吉田 I A 第1トレンチ 41.7.12	
342	鉢 底部	②1.6	①乳白色 ②淡明褐色	微砂粒を含む	S41.7.16 吉田排水溝北面中かくらん層	底部焼成前の穿孔
343	壺 底部	②4.4	乳白色	1~2mmの砂粒を含む		
344	壺 底部	②1.0	①褐灰色 ②黒灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田一 66.7.18 排水溝南面	
345	壺 底部	②(1.6)	①淡褐色 ②淡褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第I A 排水溝南側	外面に一部煤付着
346	壺 底部	②丸底	淡白褐色	1mm前後の砂粒を含む	S41.7.12 吉田 第I A 地区1トレンチ	内外面鉄分の付着が激しい
347	壺 底部	②2.0	淡灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.13 吉田 第I A 排水溝南壁包含層	
348	鉢 底部	②1.0	淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む		風化著しい
古墳時代後期						
349	横瓶		青灰色	1~2mmの砂粒を含む	平川 III 地点攪乱層	
350	坏蓋		青灰色	微砂粒を含む	S41.7.12 吉田 第I 地区A区 第1トレンチ	
351	壺蓋	①(8.2)	淡青灰色	精製粘土	吉田 第I 地区A区 第2トレンチ東カベ	
352	甕	①(22.8)	灰青色	1mmの砂粒を含む	S41.7.9 吉田 第I 地区A区	自然袖付着
353	甕		灰青色	2~3mmの砂粒をわずかに含む	1966.7.8 平川 第三カクラン	

吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査

法量()は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	備考
354	高坏	②(9.4)	淡灰青色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.7.8 平川Ⅲ地点	
355	高坏		淡灰青色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	吉田第ⅠA 日付?	
古代前半						
356	坏蓋	①(19.6)	灰青色	1mmの砂粒をわずかに含む	S41.7.12 吉田第Ⅰ地区A区 第1トレ	
357	坏蓋	①(14.4)	青灰色	微砂粒を含む	吉田Ⅰ地区A区	外面に自然釉付着
358	坏	②(9.4)	灰青色	1mm前後の砂粒を多量に含む	吉田第Ⅰ-A Ⅲ-1	
359	坏	①(15.0)②(9.3)③4.2	青灰色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.8 平川第Ⅲ地点攪乱層	
360	坏	②(10.5)	灰青色	1mm前後の砂粒を含む	1966.7.12 吉田1トレンチ	
361	坏	②(6.0)	灰青色	微砂粒を含む	吉田第Ⅰ-A地区 S41.7.10 第2トレ	
362	坏	②(7.2)	暗青灰色	微砂粒を多量に含む	吉田第Ⅰ-A地区 S41.7.10 第2トレ 包含層	
363	坏	②(7.2)	暗青灰色	微砂粒を含む	吉田ⅠA地区	
364	坏	②(8.7)	灰白色	微砂粒を含む	S41.7.12 第Ⅰ-A 第1トレ	風化著しい
365	坏	②(8.4)	淡青灰色	1mm前後の砂粒をわずかに含む	吉田第ⅠA地区	
366	坏	②(7.2)	青灰色	1mm前後の砂粒を含む		
367	坏	②(8.4)	淡灰褐色	微砂粒を含む	吉田第Ⅰ地区A区 第4トレ 包含層	
368	坏	②(6.9)	暗青灰色	微砂粒を含む		
369	壺 底部	②(9.2)	①青灰色 ②灰青色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.7 吉田第ⅠA 包含層Ⅰ	
370	壺 底部	②(10.4)	暗青灰色	微砂粒を含む	S41.7 吉田第ⅠA 4トレンチ	
371	甕	①(25.0)	淡黄灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む		
372	甕	①(16.6)	淡黄灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.8 吉田第3攪乱層	風化著しい
373	甕	①(16.6)	明褐色	多量の1~2mmの砂粒と黒雲母を含む	吉田Ⅰ-A 第2トレ 41.7.10 包含層	
古代後半~中世						
374	碗	①(12.8)	灰白色	微砂粒を含む	S41.7.12 吉田第Ⅰ地区A区 第1トレンチ	
375	碗	①(14.8)	①淡褐色 ②黒色	微砂粒を多量に含む	1966.7.13 排水溝南側	内面に炭素吸着
376	碗	②6.2	淡灰褐色	微砂粒を多量に含む		
377	碗	②6.2	黄灰色	1~3mmの砂粒をわずかに含む	1966.7.15 平川 吉田遺跡 第Ⅲトレンチ②	
378	碗	②(7.0)	灰白色	微砂粒を多量に含む	S41.7 吉田ⅠA 包含層Ⅰ	
379	碗		淡赤褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	吉田第Ⅰ地区A	
380	碗	②6.4	淡褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	S41.7.18 吉田ⅠA 4トレンチ	
381	碗	②6.0	暗褐色	微砂粒を含む	S41.7.10 第二トレンチ 包含層下13cm	
382	碗	②(6.8)	淡黄灰色	精製粘土		
383	碗		①淡褐色 ②黒色	微砂粒を含む	吉田第ⅠA 第2トレンチ 包含層 41.7.10	内面に炭素吸着
384	碗	②5.6	①淡赤褐色 ②黒色	微砂粒をわずかに含む		内面に炭素吸着
385	碗	②6.4	乳白色	1~2mmの砂粒を含む	吉田第ⅠA	
386	碗	②(6.0)	淡灰褐色	微砂粒を多量に含む		
387	碗	②(5.8)	淡赤灰色	精製粘土	1966.7.12 吉田1トレンチ	
388	碗	②(6.0)	淡黄灰色	わずかに1mmの砂粒を含む	S41.7.10 吉田第ⅠA 包含層Ⅰ	
389	碗	②(6.8)	乳白色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	吉田Ⅰ-A	風化著しい
390	碗	②(6.8)	淡黄灰色	精製粘土	S41.7.8 平川Ⅲ地点攪乱層	
391	碗	②(5.6)	淡黄灰色	精製粘土		

出土遺物観察表

法量 () は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	備考	
392	埴	②(6.0)	淡黄灰色	精製粘土			
393	埴	②(6.8)	淡黄灰色	精製粘土	吉田 第 I A 地区 A 面 S41.7.18		
394	埴	②(6.0)	淡黄灰色	精製粘土	吉田 第 I A 地区		
395	埴		乳白色	微砂粒を多量に含む	吉田 第 I A 地区		
396	埴	②(6.4)	①淡黄灰色 ②黒色	微砂粒をわずかに含む	吉田 第 I A 地区 S41.7. 10 第 II トレ 包含層	内面に炭素吸着	
397	埴	②(6.8)	①淡黄灰色 ②黒色	1~2mmの砂粒を含む		内面に炭素吸着	
398	埴	②(8.6)	①淡灰褐色 ②黒色	1~2mmの砂粒を多量に含む		内面に炭素吸着	
399	坏	①(13.8)	乳白色	1mm弱の砂粒を多量に含む	S41.7 吉田 第 I A 包含層1	風化著しい	
400	皿	②(5.2)	明褐色	精製粘土			
401	皿	②(5.8)	①淡赤褐色 ②明褐色	微砂粒を多量に含む	S41.7.8 吉田 第 I A 皿地点	内外面風化	
402	皿	②(5.8)	淡黄灰色	精製粘土	S41.7.9 吉田 第 I A 地区 第3トレンチ②		
403	皿	②(6.0)	淡黄灰色	微砂粒を多量に含む	吉田 第 I 地区A区 第2- 3トレンチ間 1966.7.13	糸切り底	
404	皿	②(6.4)	暗灰色	精製粘土	吉田 第 I A 地区	糸切り底	
405	皿	②4.2	赤褐色	微砂粒を多量に含む	吉田 第 I 地区A区 第1ト レンチ 第2層 S41.7.14	糸切り底	
406	皿	②(5.2)	灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.12 吉田 1ト レンチ包含層下30cm	糸切り底	
407	皿	②4.2	赤褐色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 第 I 地区A	糸切り底	
408	瓦質足鍋	①(23.2)	淡灰青色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 I - A	外面に煤付着	
409	瓦質足鍋	①(27.2)	淡褐色	微砂粒を含む	吉田 I - A かく乱	外面に煤付着	
410	瓦質足鍋		明褐色	1~2mmの砂粒を含む			
411	瓦質足鍋		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む			
412	瓦質足鍋		黄灰色	微砂粒をわずかに含む		鉄分の付着により変色	
413	瓦質足鍋		淡赤褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	吉田 I - A		
414	瓦質足鍋		暗褐色	1mm弱の砂粒を多量に含む			
415	瓦質鉢	②(10.2)	①暗青灰色 ②淡灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田 第 I 地区A区 第2ト レンチ東カベ S41.7.14		
416	須恵器	②(15.6)	青灰色	微砂粒を含む		内面に光沢をもつ	
417	文字入り土器片		淡灰褐色	1mm弱の砂粒を含む		「天」の字状の線刻	
番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
418	錐状石器	5.8	4.1	1.0	20.38	凝灰岩	
419	刃器	2.8	3.1	1.8	11.17	凝灰岩	
420	剥片	5.1	3.4	1.0	18.23	凝灰岩	2次加工あり
421	剥片	3.6	2.7	0.9	11.76	凝灰岩	
422	剥片	4.1	3.0	1.0	12.53	凝灰岩	使用痕あり
423	剥片	3.7	1.9	0.9	5.30	凝灰岩	
424	剥片	2.9	2.1	0.5	3.67	凝灰岩	
425	剥片	2.0	2.5	0.4	1.87	凝灰岩	
426	剥片	2.5	1.2	0.4	1.24	凝灰岩	
427	石核	3.6	3.9	2.7	44.90	凝灰岩	
428	剥片	1.8	1.6	0.6	1.03	サヌカイト	使用痕あり
429	剥片	1.2	1.3	0.3	0.53	サヌカイト	

吉田遺跡第I地区A区の調査

法量()は復原値

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
430	剥片	2.2	4.2	0.8	8.91	サヌカイト	2次加工あり
431	剥片	2.5	1.7	1.7	7.14	サヌカイト	金山産か?
432	剥片	3.0	1.4	0.5	3.34	サヌカイト	
433	剥片	2.8	1.9	0.5	2.13	サヌカイト	
434	剥片	1.9	3.2	0.4	2.20	サヌカイト	
435	剥片	1.9	1.7	0.6	1.53	サヌカイト	
436	剥片	2.3	1.2	0.5	1.27	サヌカイト	
437	石核	2.7	4.0	1.8	14.48	黒曜石	
438	剥片	2.1	3.4	0.7	5.62	黒曜石	
439	剥片	3.0	2.3	0.6	5.36	黒曜石	
440	剥片	2.5	2.0	1.0	4.50	黒曜石	
441	剥片	3.1	1.7	0.7	2.96	黒曜石	
442	剥片	3.7	2.1	0.9	6.76	黒曜石	
443	剥片	2.9	1.9	1.7	7.23	姫島産黒曜石	
444	剥片	2.3	2.4	0.6	4.27	姫島産黒曜石	
445	剥片	4.2	1.4	1.4	6.98	姫島産黒曜石	
446	剥片	4.3	1.9	0.9	6.28	姫島産黒曜石	
447	剥片	4.0	2.9	1.0	7.60	姫島産黒曜石	
448	打製石斧	9.0	5.0	1.8	96.93	結晶片岩	
449	打製石斧	8.9	4.7	0.7	48.38	結晶片岩	
450	打製石斧	6.9	4.4	0.6	32.85	砂質頁岩	
451	磨製石斧	7.4	6.2	2.7	185.27	凝灰岩	
452	凹石	12.9	10.2	3.2	646.5	凝灰岩	
453	凹石	9.5	6.4	4.3	556.66	斑状閃緑岩	
454	敲石	6.5	3.8	2.8	88.27	凝灰岩	
455	敲石	8.4	5.2	3.1	171.75	凝灰岩	
456	石庖丁	6.5	6.5	1.0	60.19	カクセン石安山岩	
457	石庖丁	8.0	5.4	0.7	43.91	砂質頁岩	
458	石庖丁	1.6	1.8	0.3	1.93	頁岩	
459	扁平片刃石斧	2.4	2.0	0.8	5.09	頁岩	
460	不明磨製石器	5.1	3.2	1.0	25.57	カクセン石安山岩	
461	砥石	8.3	2.8	2.1	75.34	アブライト	
462	砥石	3.9	4.2	4.0	47.40	カクセン石安山岩	風化著しい
463	砥石	9.6	6.7	5.2	314.87	凝灰岩	
464	砥石	9.2	7.7	4.8	575.07	珪長石	中世以降か?



(1) 吉田遺跡第Ⅰ地区A区の全景

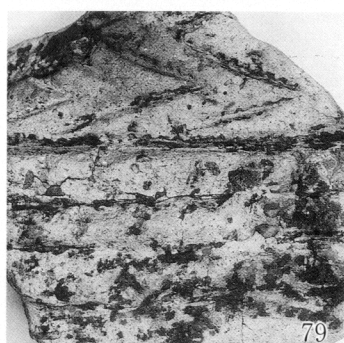
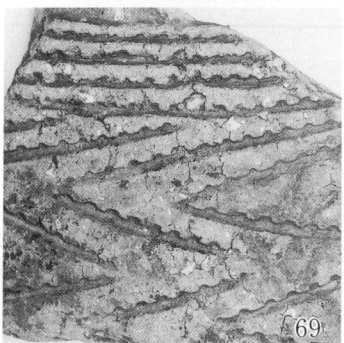
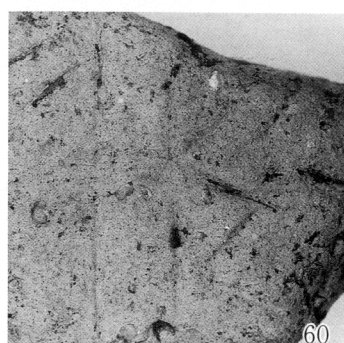
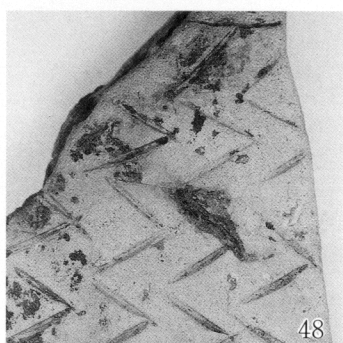
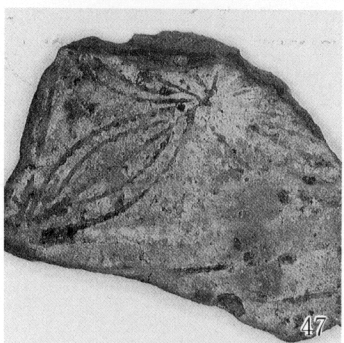
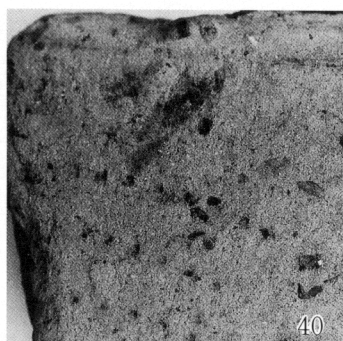
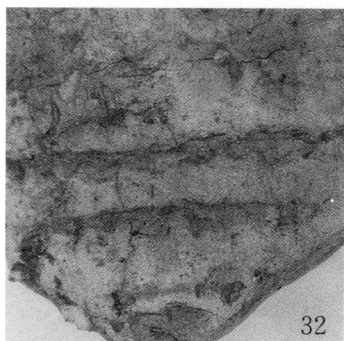


(2) A区の「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピット」出土状況

PL. 8

吉田遺跡第1地区A区の調査

(2)



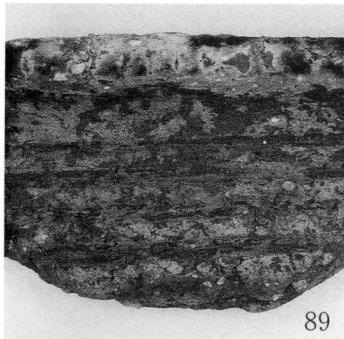
出土遺物 (1)



21



27



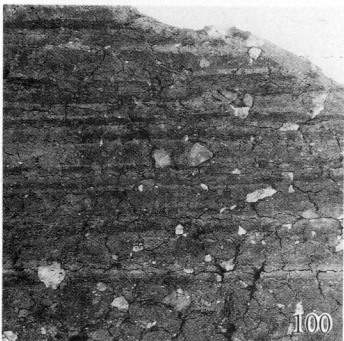
89



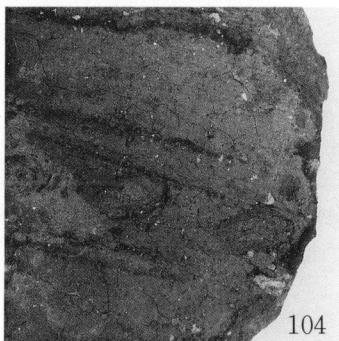
91



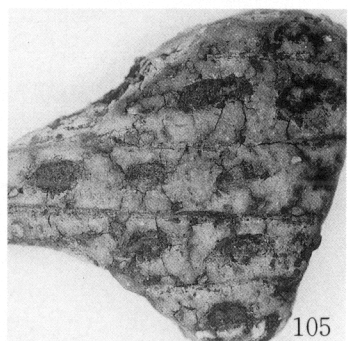
92



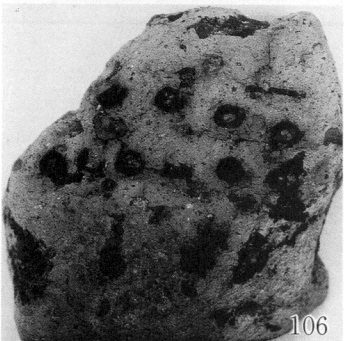
100



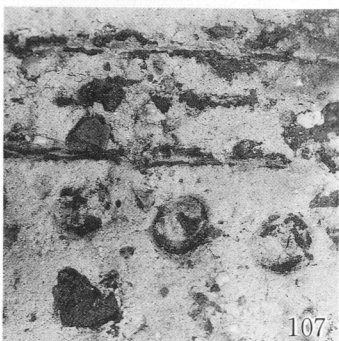
104



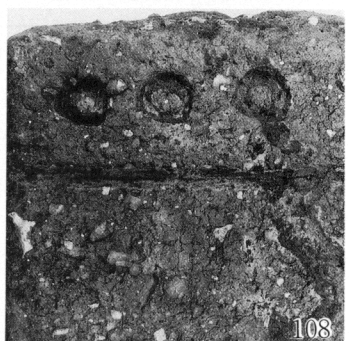
105



106



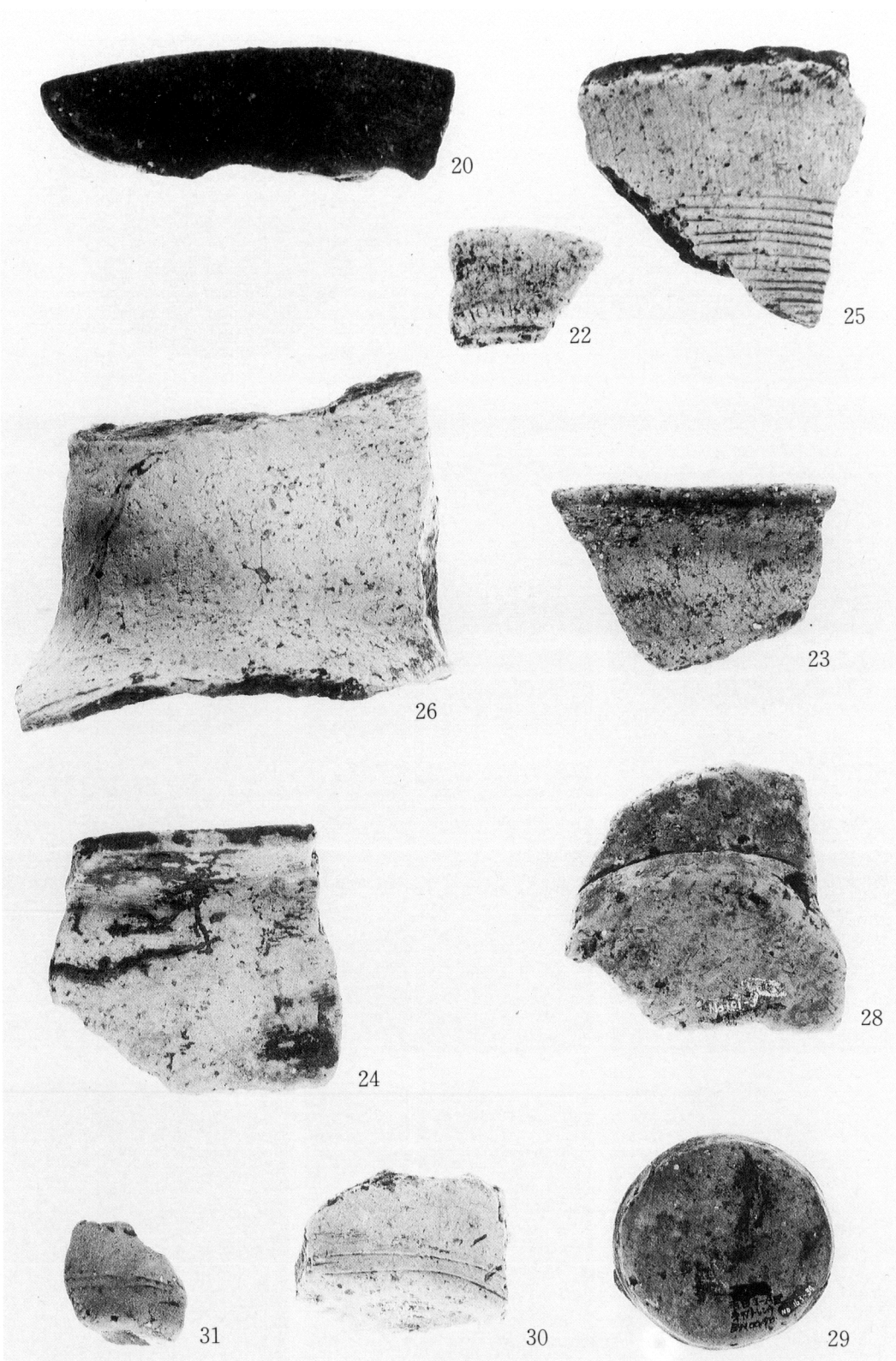
107



108

PL. 10

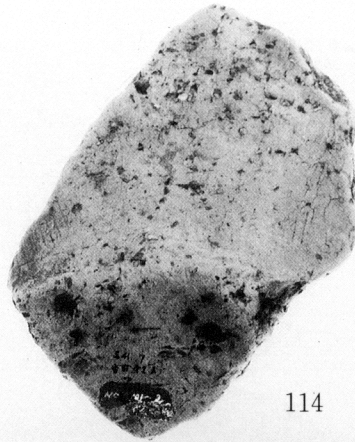
吉田遺跡第1地区A区の調査
(4)



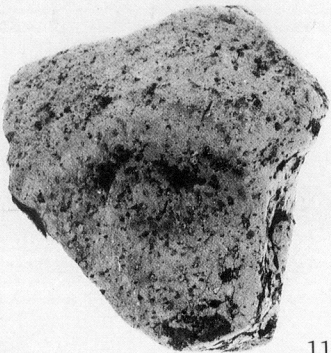
出土遺物 (3)



111



114



115



112



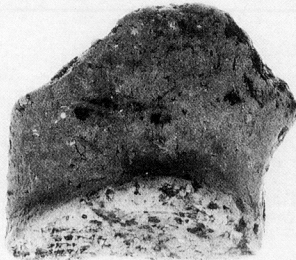
113



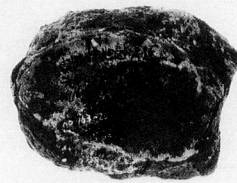
116



117



119



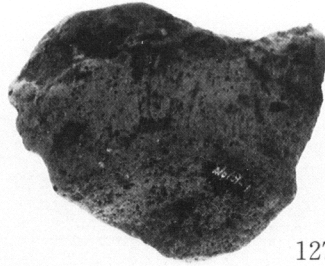
118

PL. 12

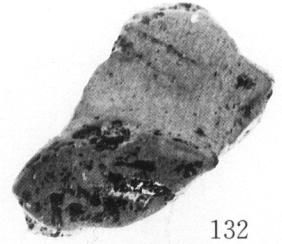
吉田遺跡第I地区A区の調査
(6)



128



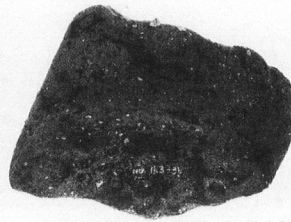
127



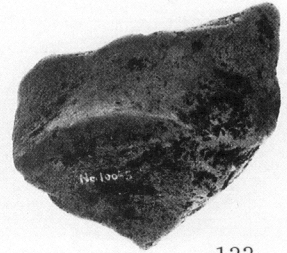
132



123



129



133



126



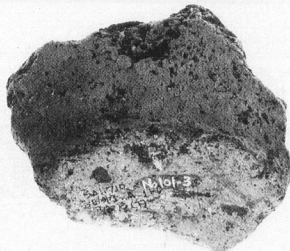
130



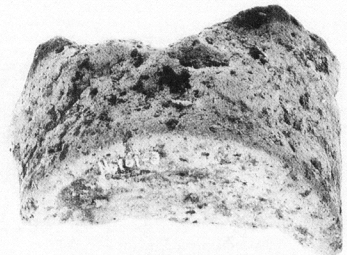
134



125

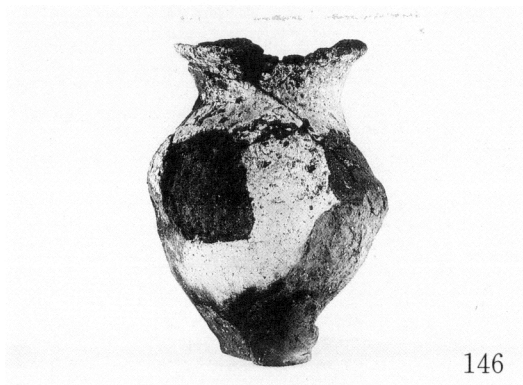
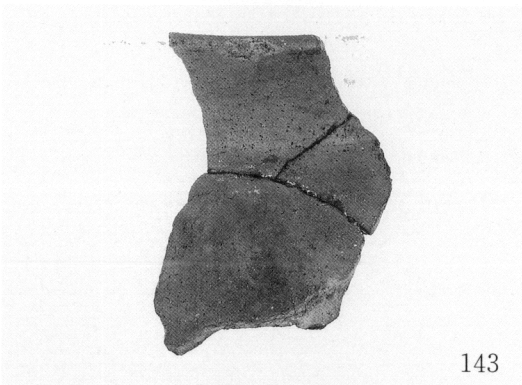
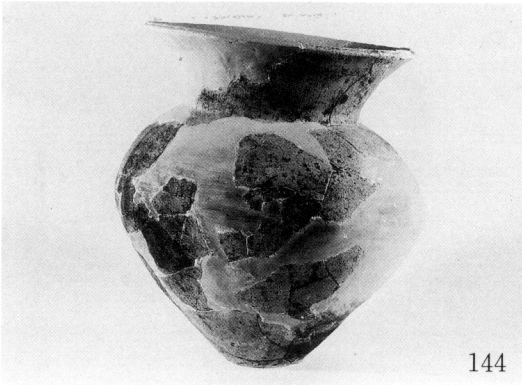
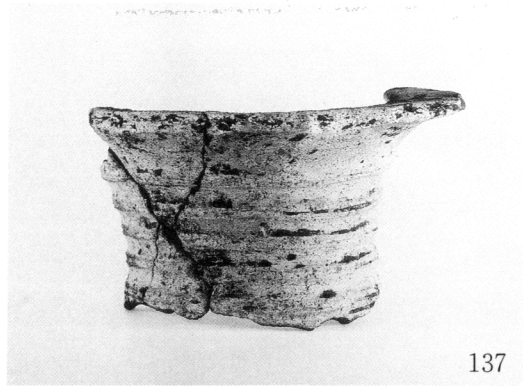
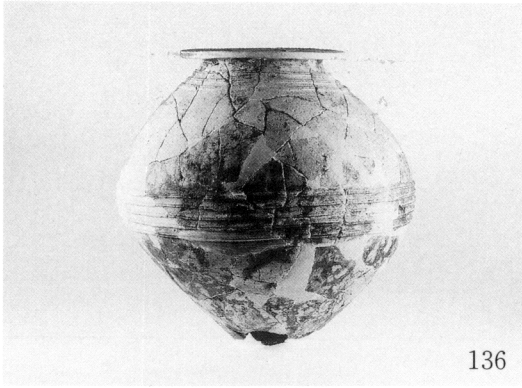


131



135

出土遺物 (5)



PL. 14

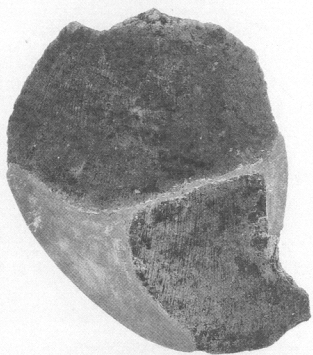
吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査
(8)



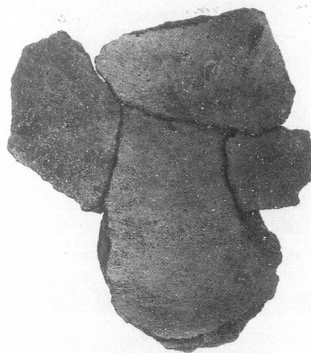
148



162



164



166



167



165

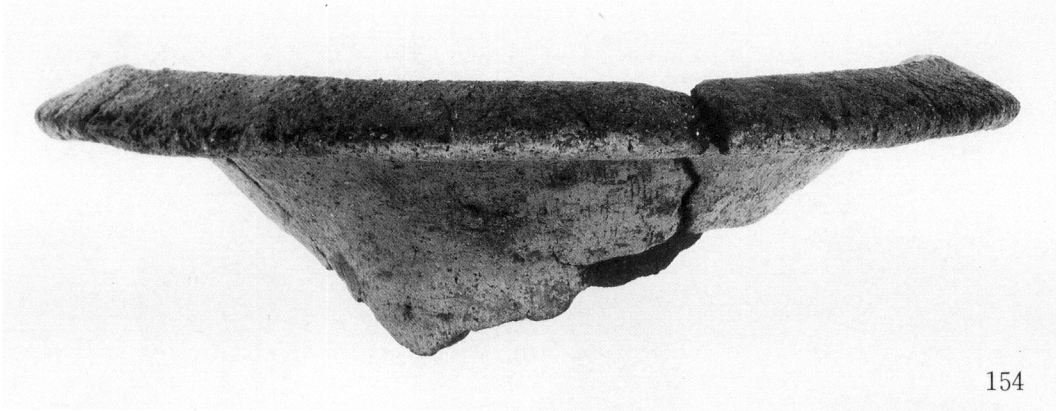


163

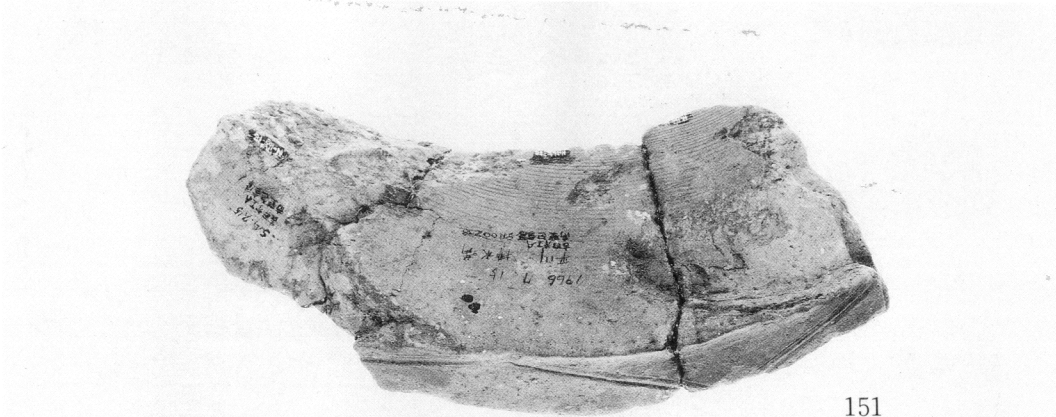


171

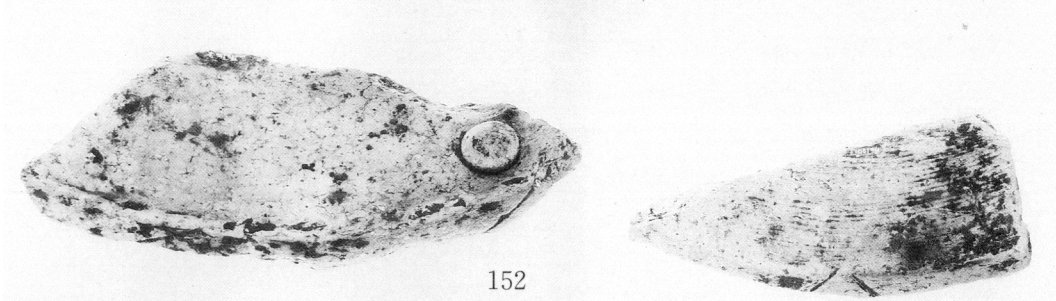
出土遺物 (7)



154



151



152

153

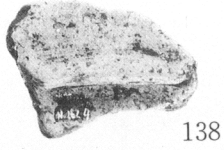


149

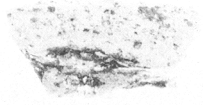
150

PL. 16

吉田遺跡第I地区A区の調査
(10)



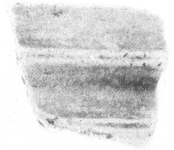
138



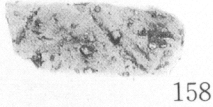
139



140



141



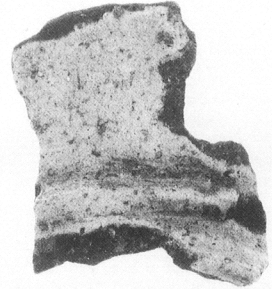
158



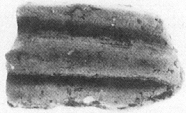
157



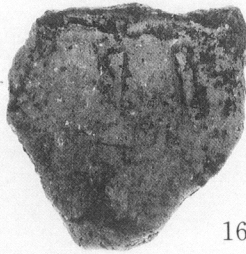
156



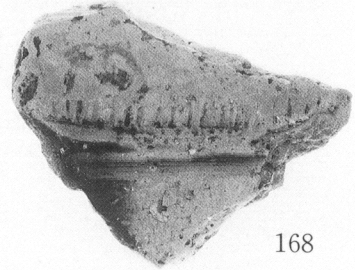
155



159



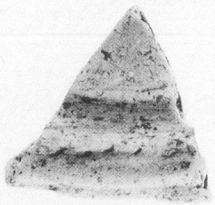
161



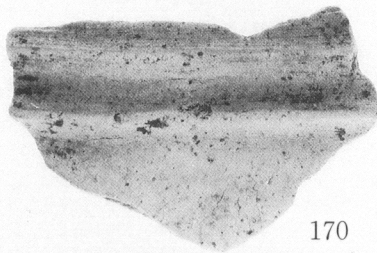
168



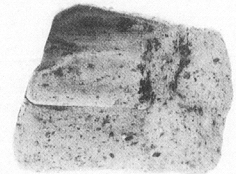
160



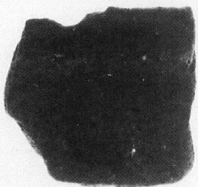
169



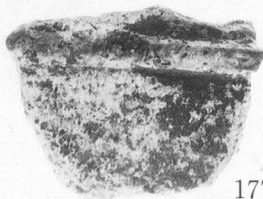
170



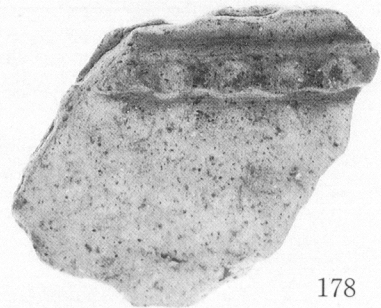
175



176

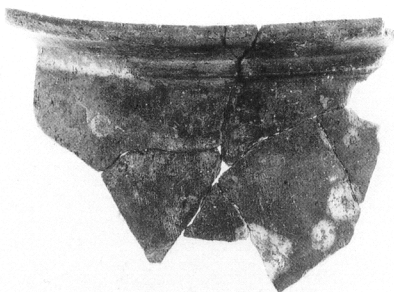


177



178

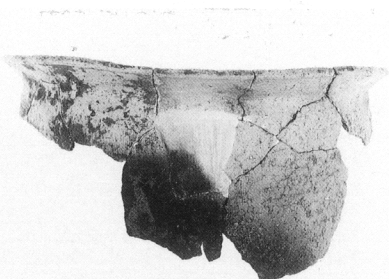
出土遺物 (9)



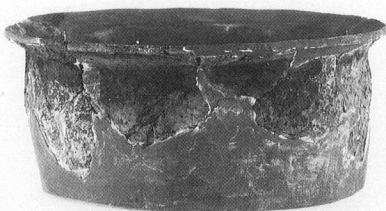
174



173



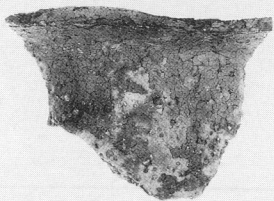
196



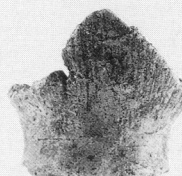
198



172



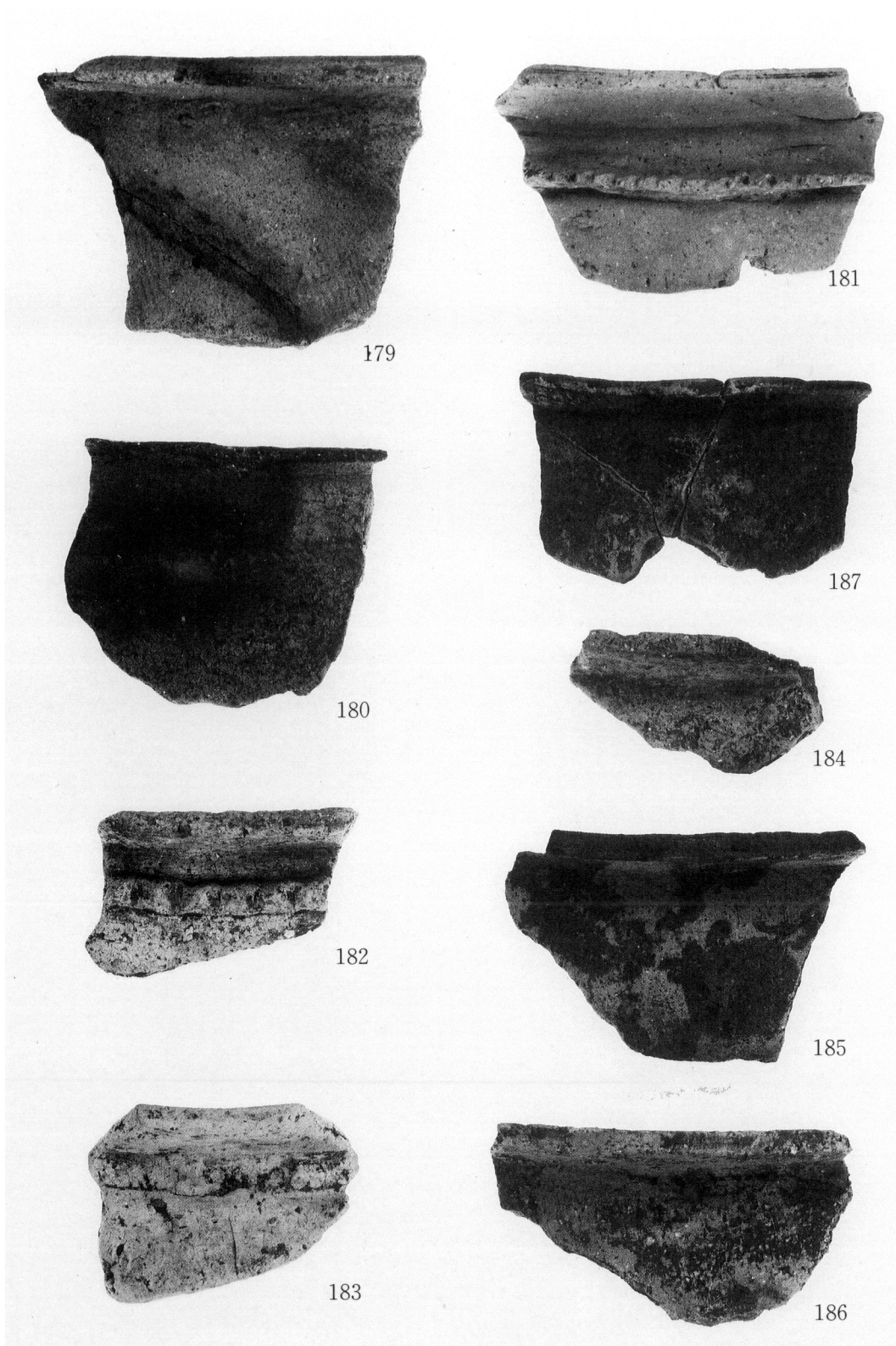
203

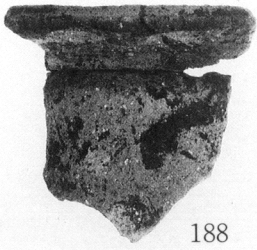


204

PL. 18

吉田遺跡第I地区A区の調査
(12)





188



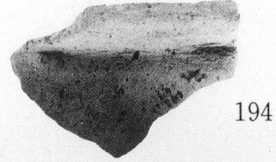
190



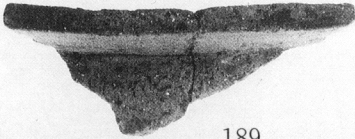
192



191



194



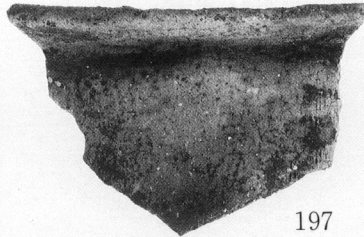
189



193



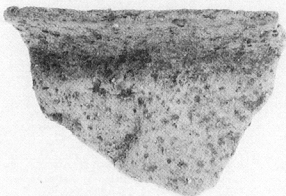
195



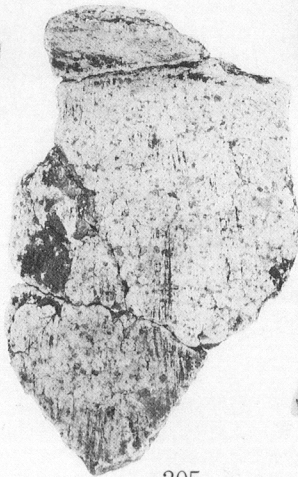
197



199



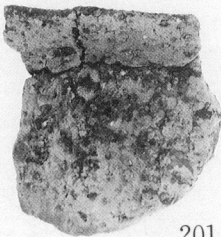
200



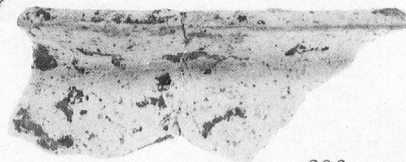
205



202



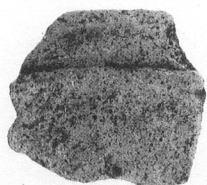
201



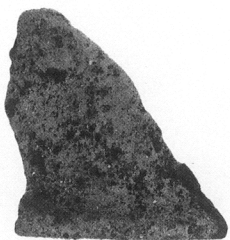
206

PL. 20

吉田遺跡第1地区A区の調査
(14)



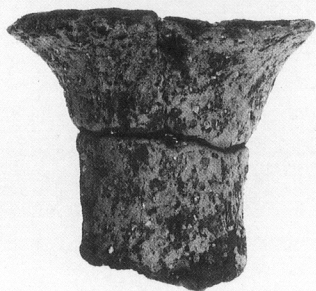
207



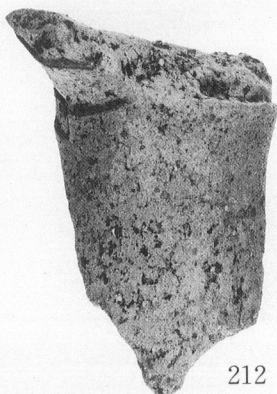
209



210



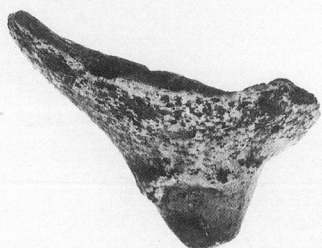
215



212



213



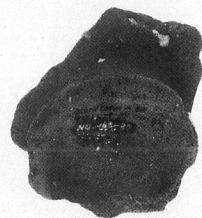
211



217



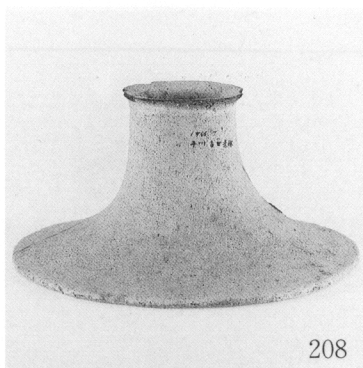
218



219



214



208



216

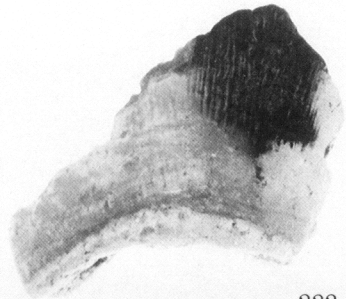
出土遺物 (13)



220



221



222



224



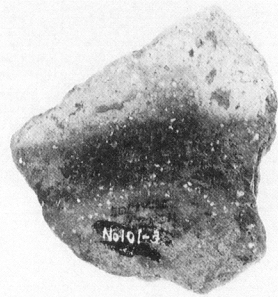
235



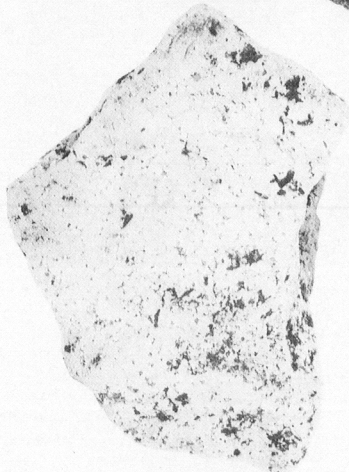
229



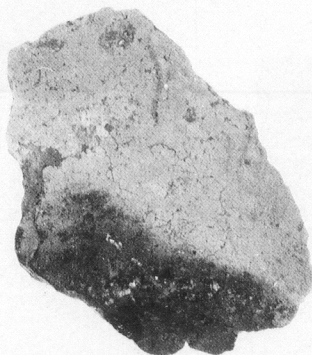
226



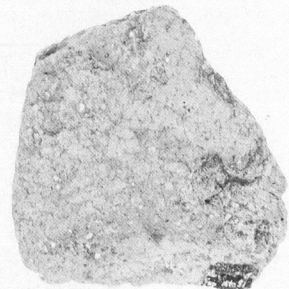
227



231

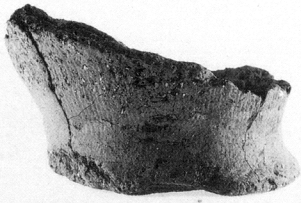


232



233

吉田遺跡第I地区A区の調査
(16)



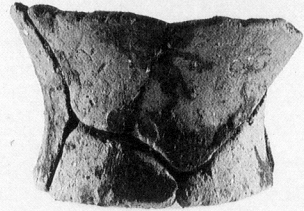
240



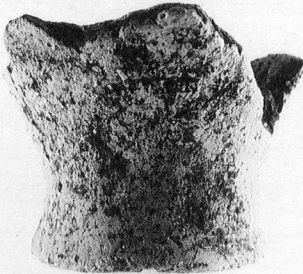
242



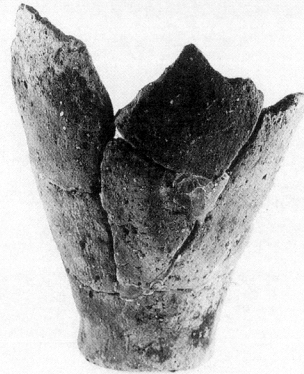
245



250



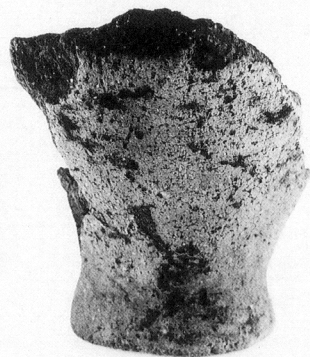
247



252



253



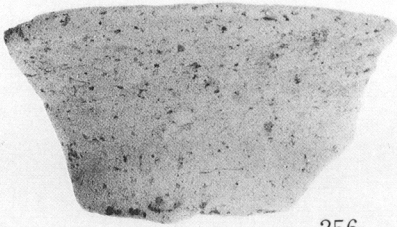
254



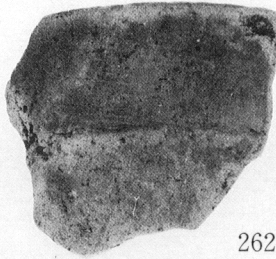
255



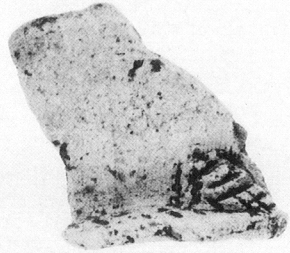
259



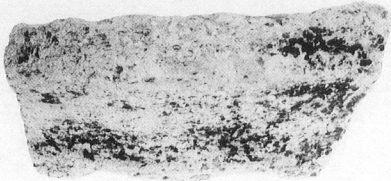
256



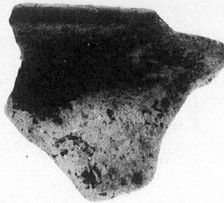
262



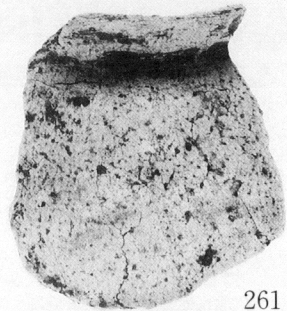
258



257



260



261



263



265



264

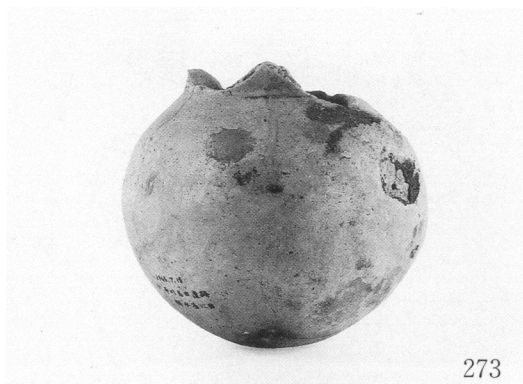
PL. 24

吉田遺跡第1地区A区の調査

(18)



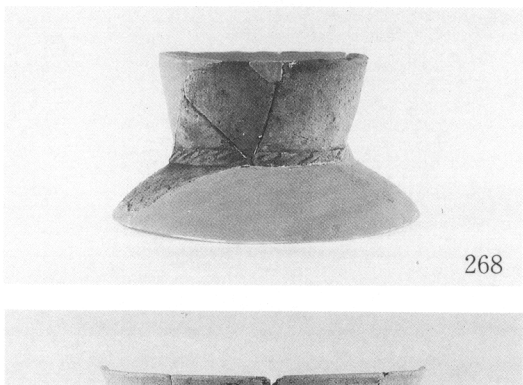
270



273



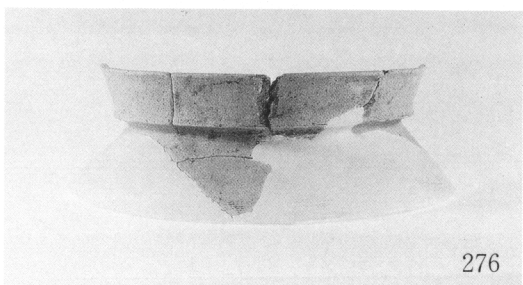
271



268



272



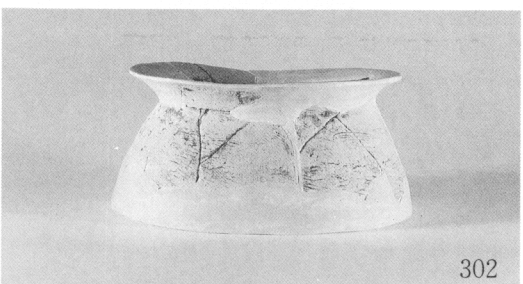
276



327

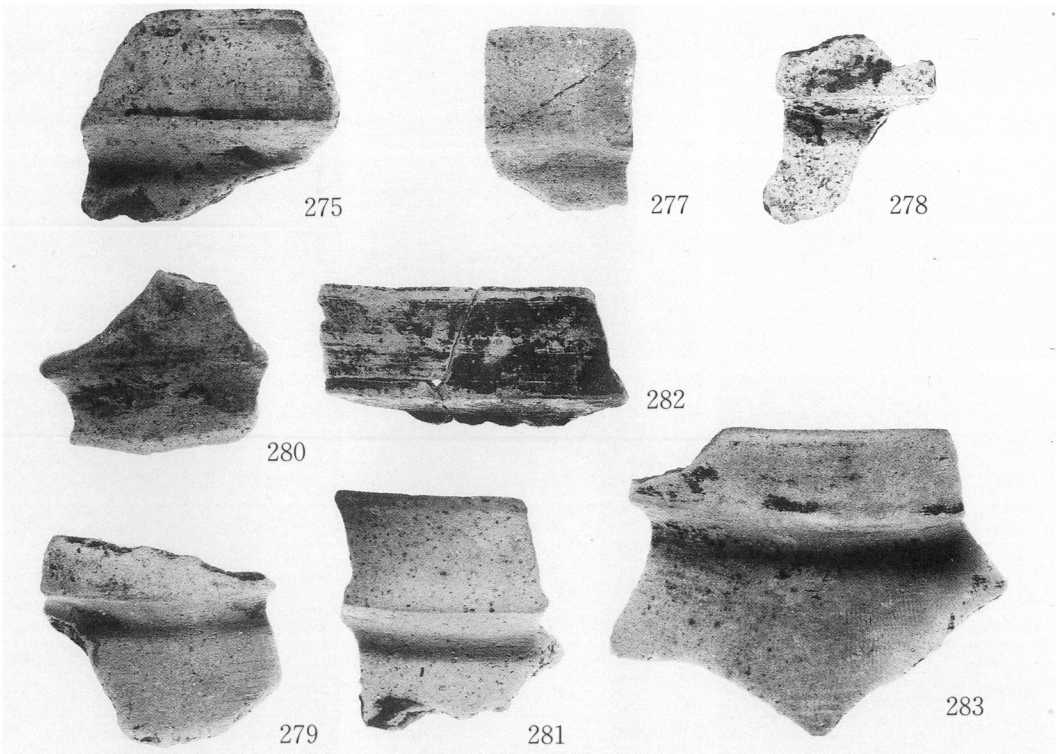
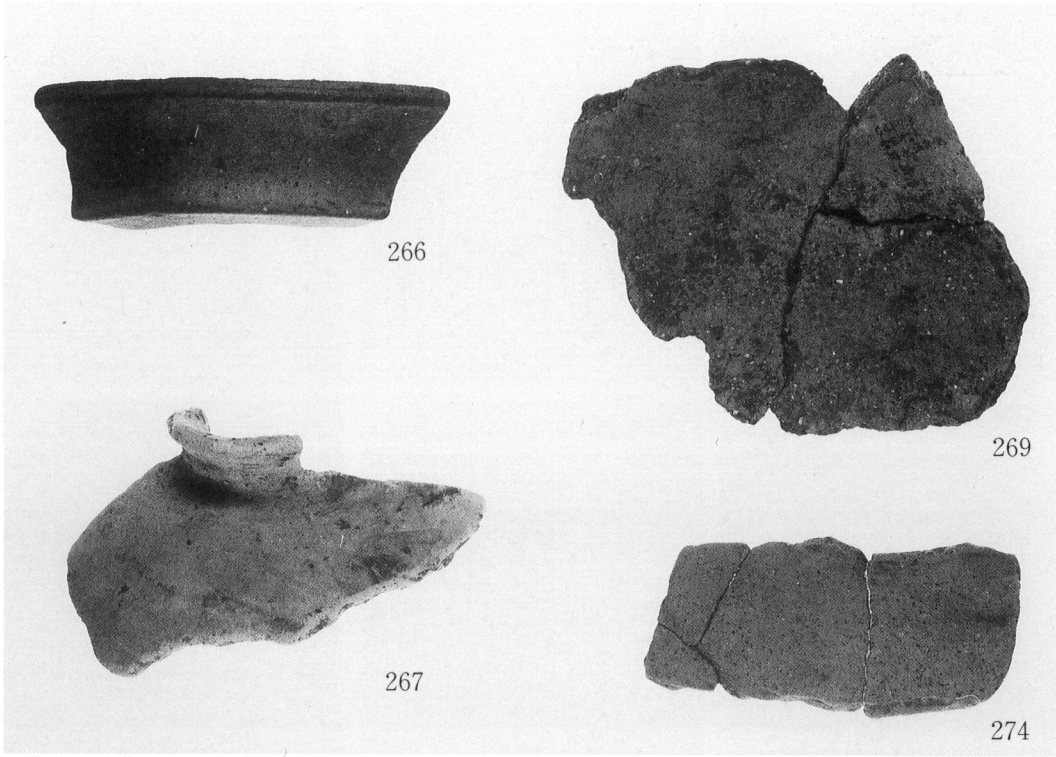


300



302

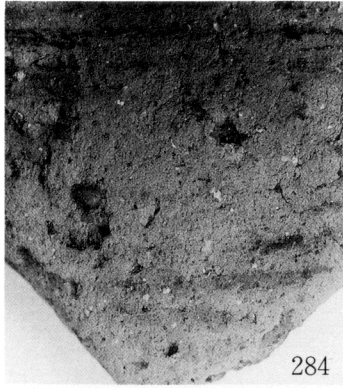
出土遺物 (17)



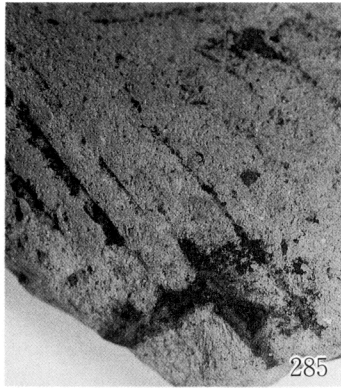
PL. 26

吉田遺跡第I地区A区の調査

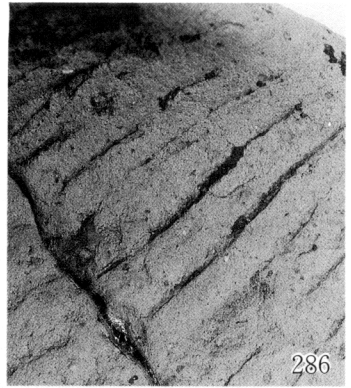
(20)



284



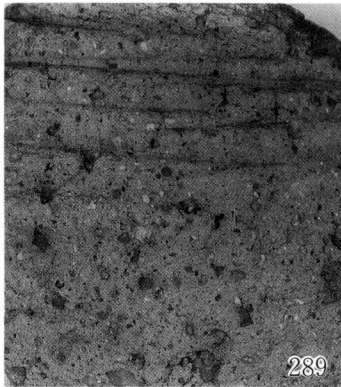
285



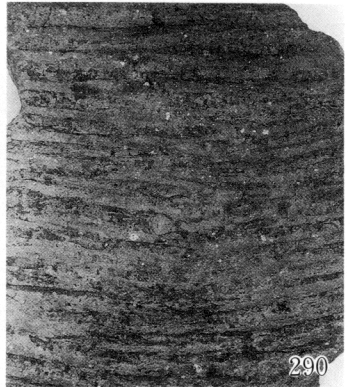
286



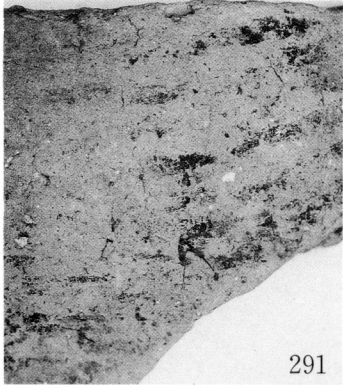
288



289



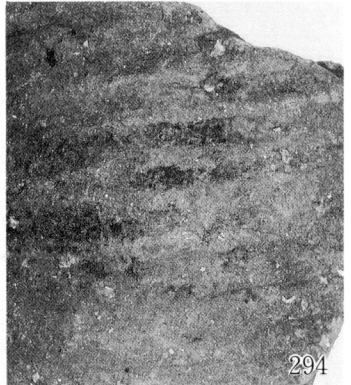
290



291



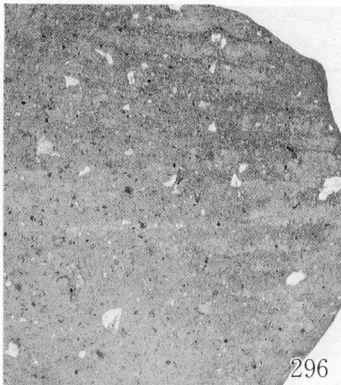
293



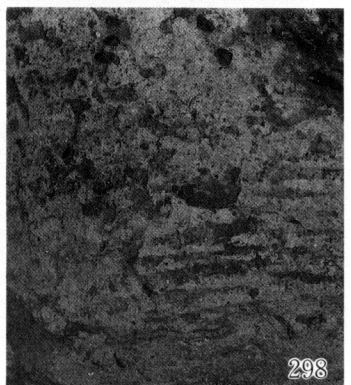
294



295



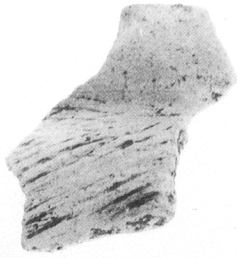
296



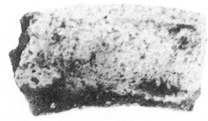
298



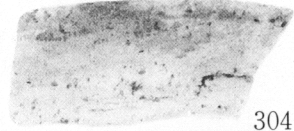
299



303



304



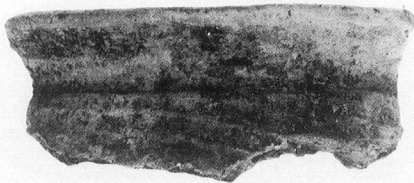
305



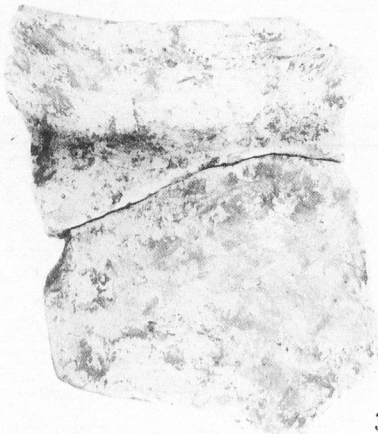
306



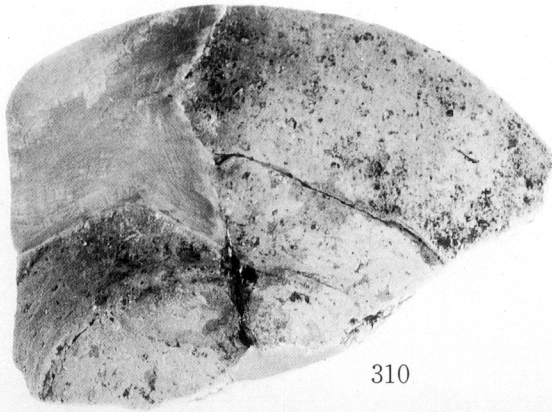
301



307



308



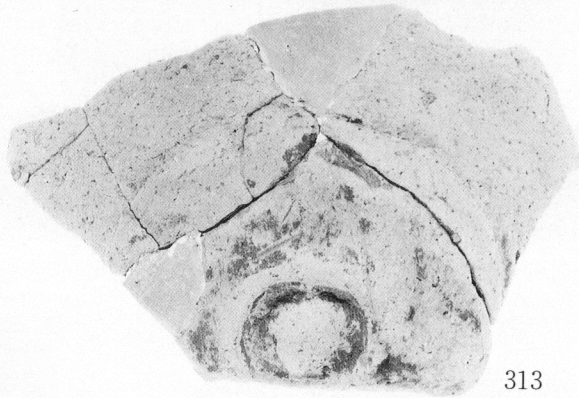
310



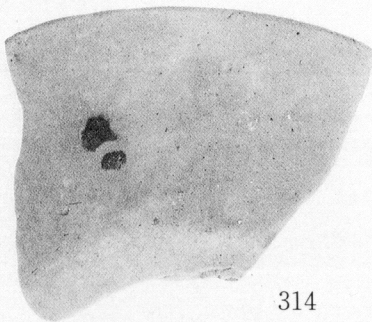
311



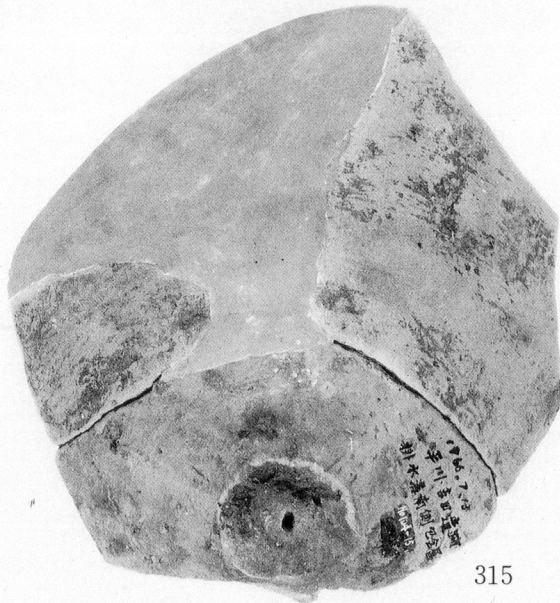
312



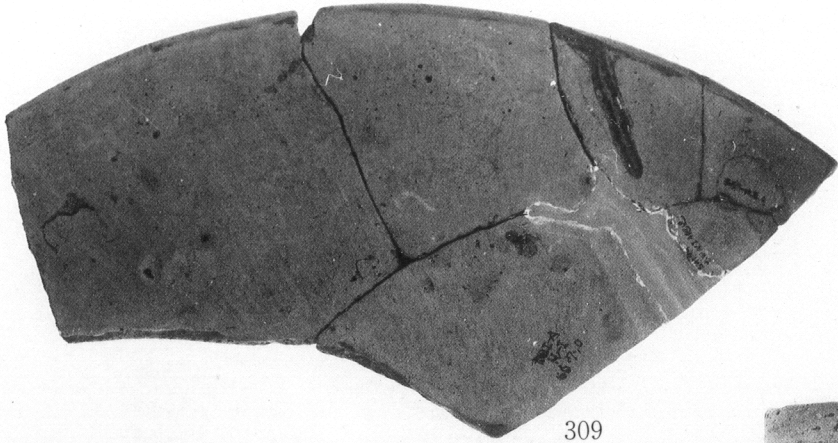
313



314



315



309



316



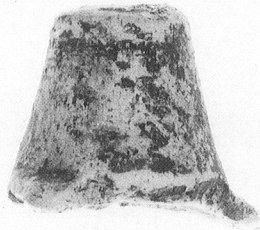
317



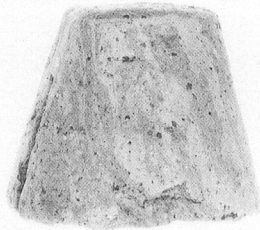
323



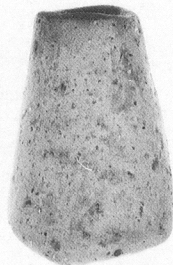
324



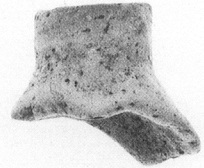
318



319



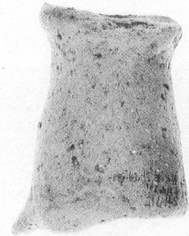
320



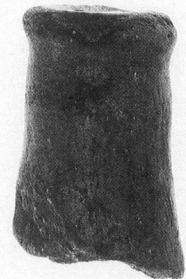
322



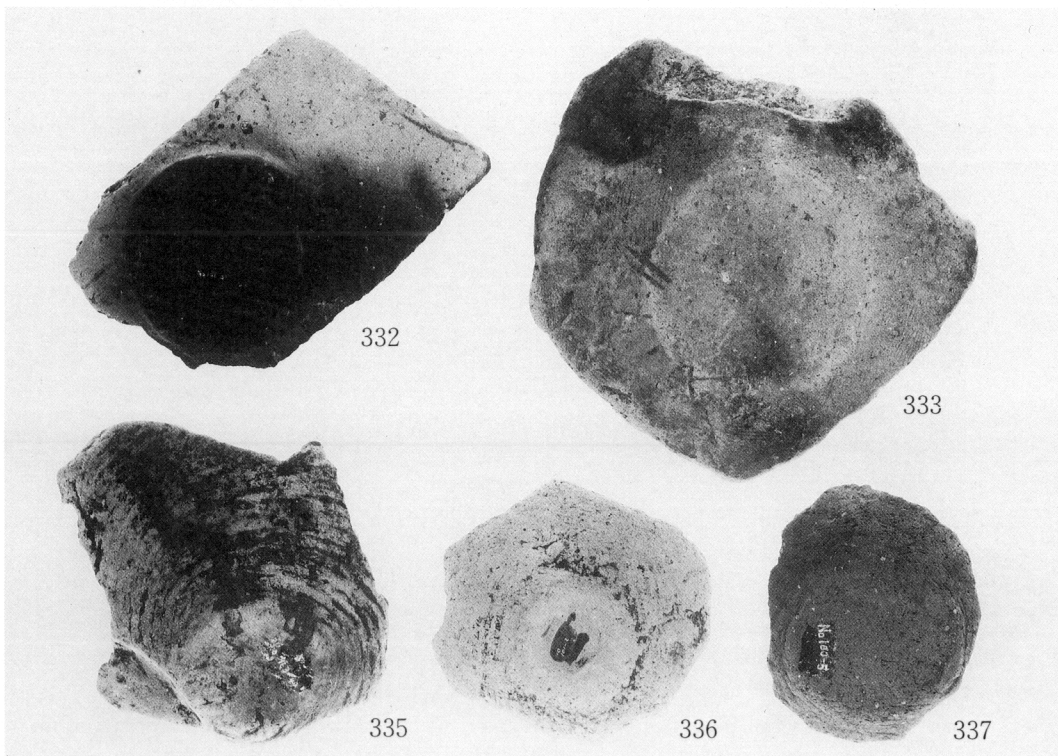
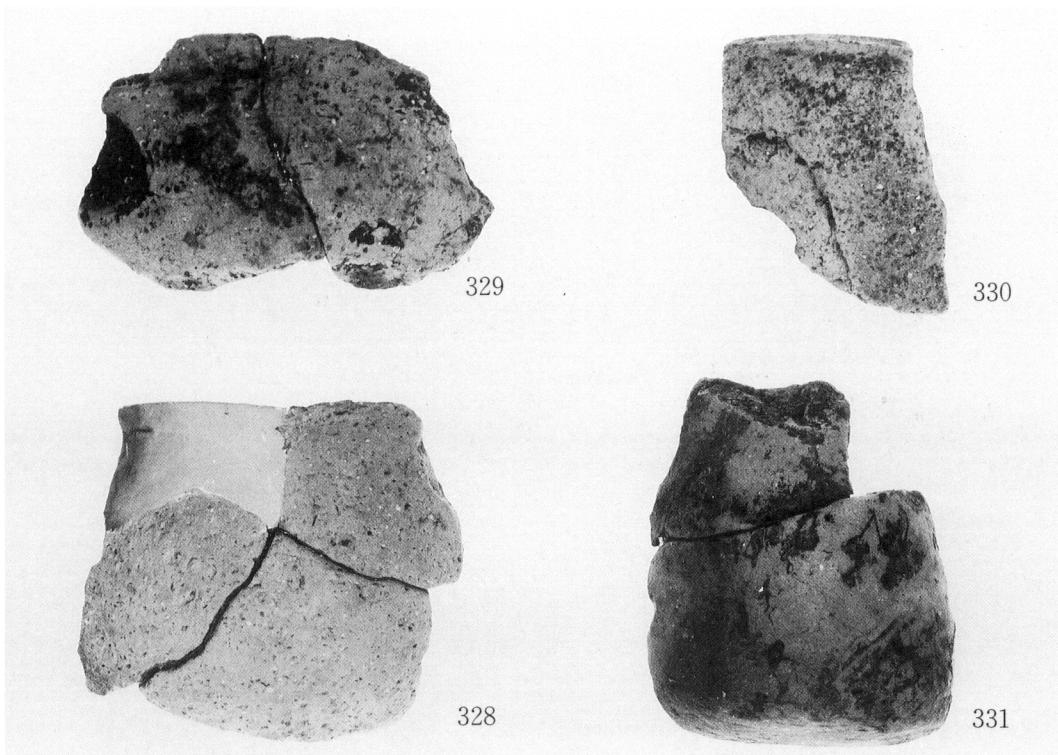
321

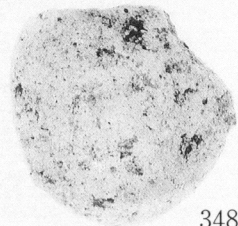
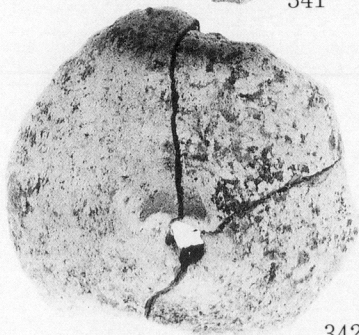
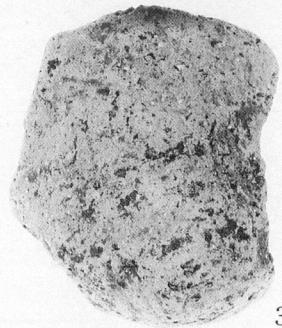
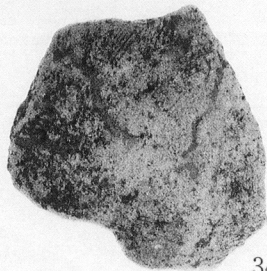
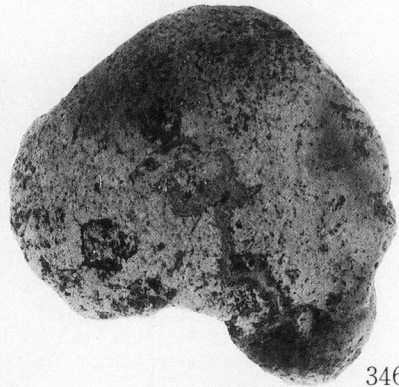
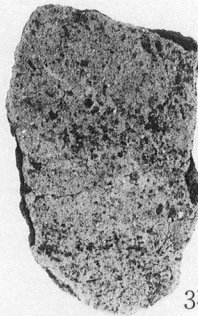
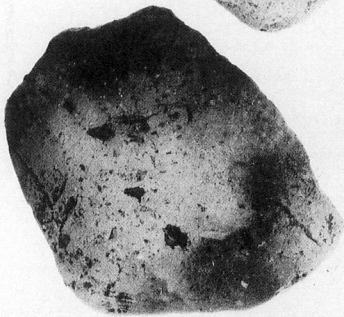
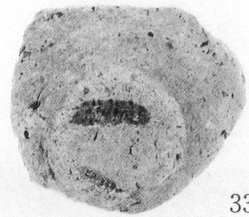
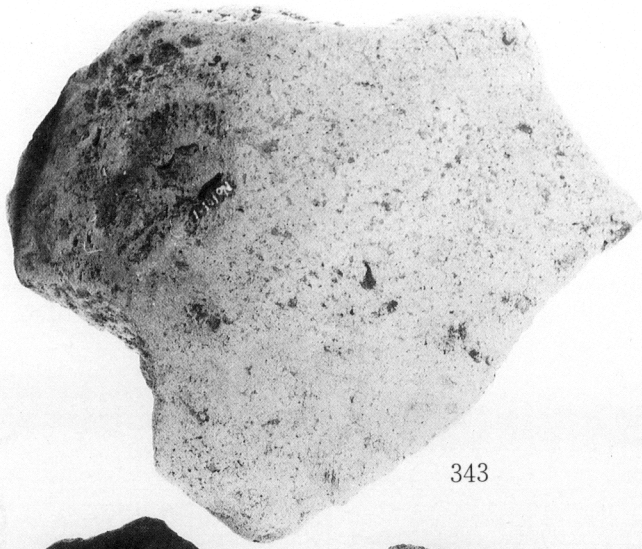


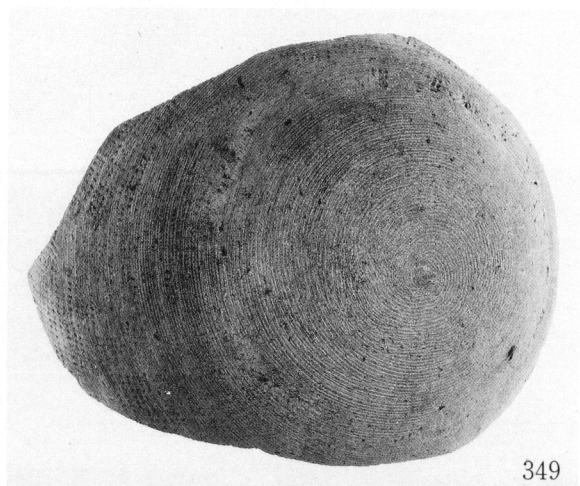
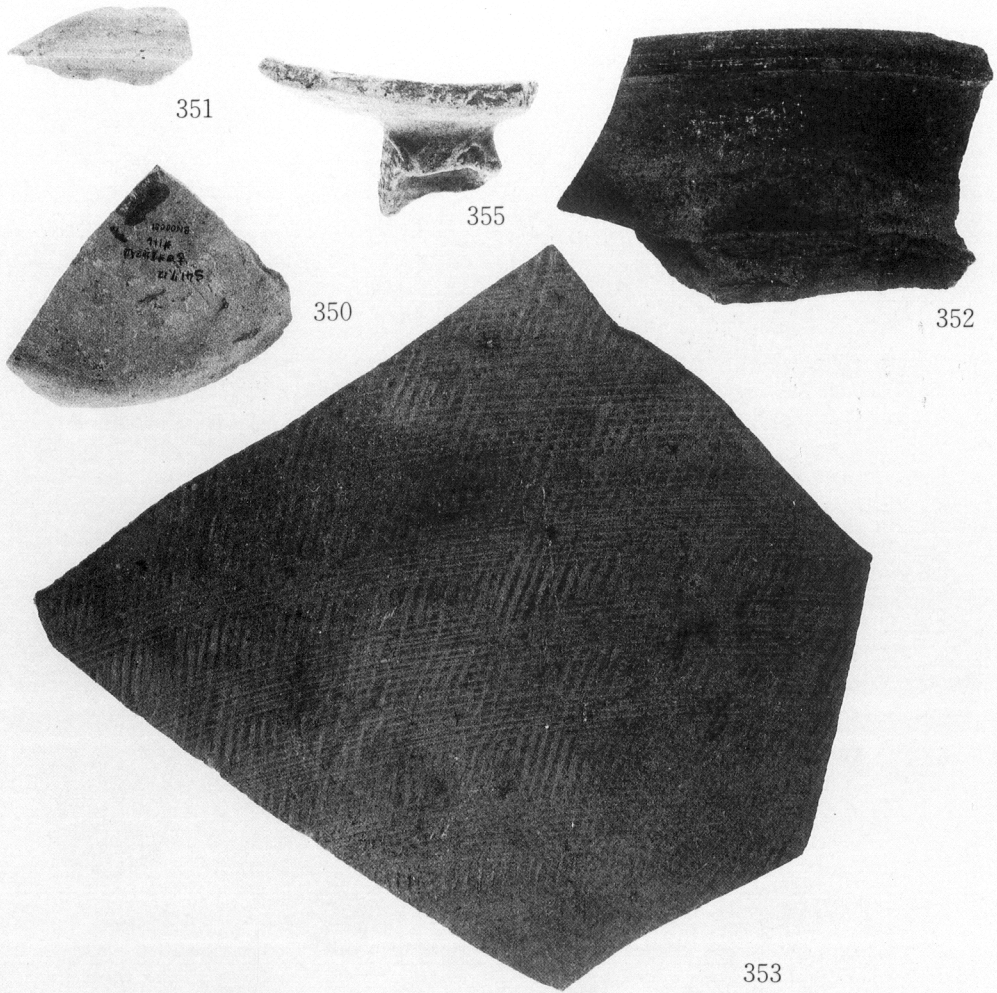
325

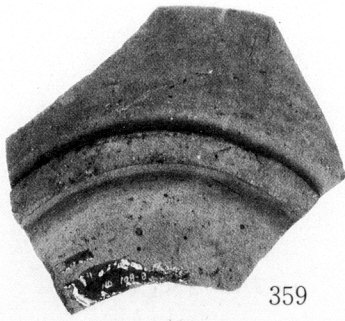


326

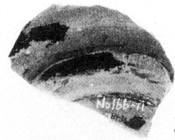








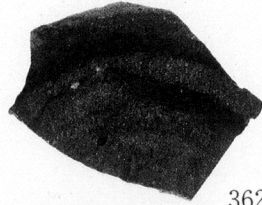
359



361



365



362



366



360



363



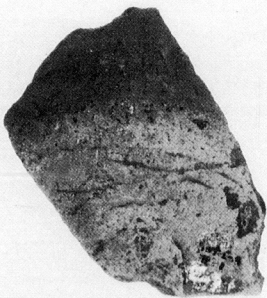
367



364



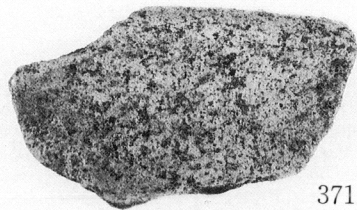
368



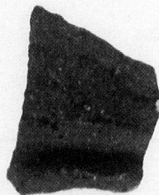
358



357



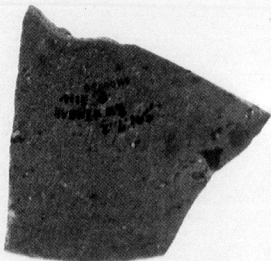
371



369



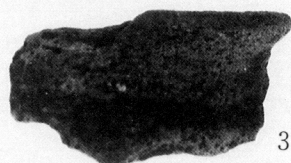
372



356



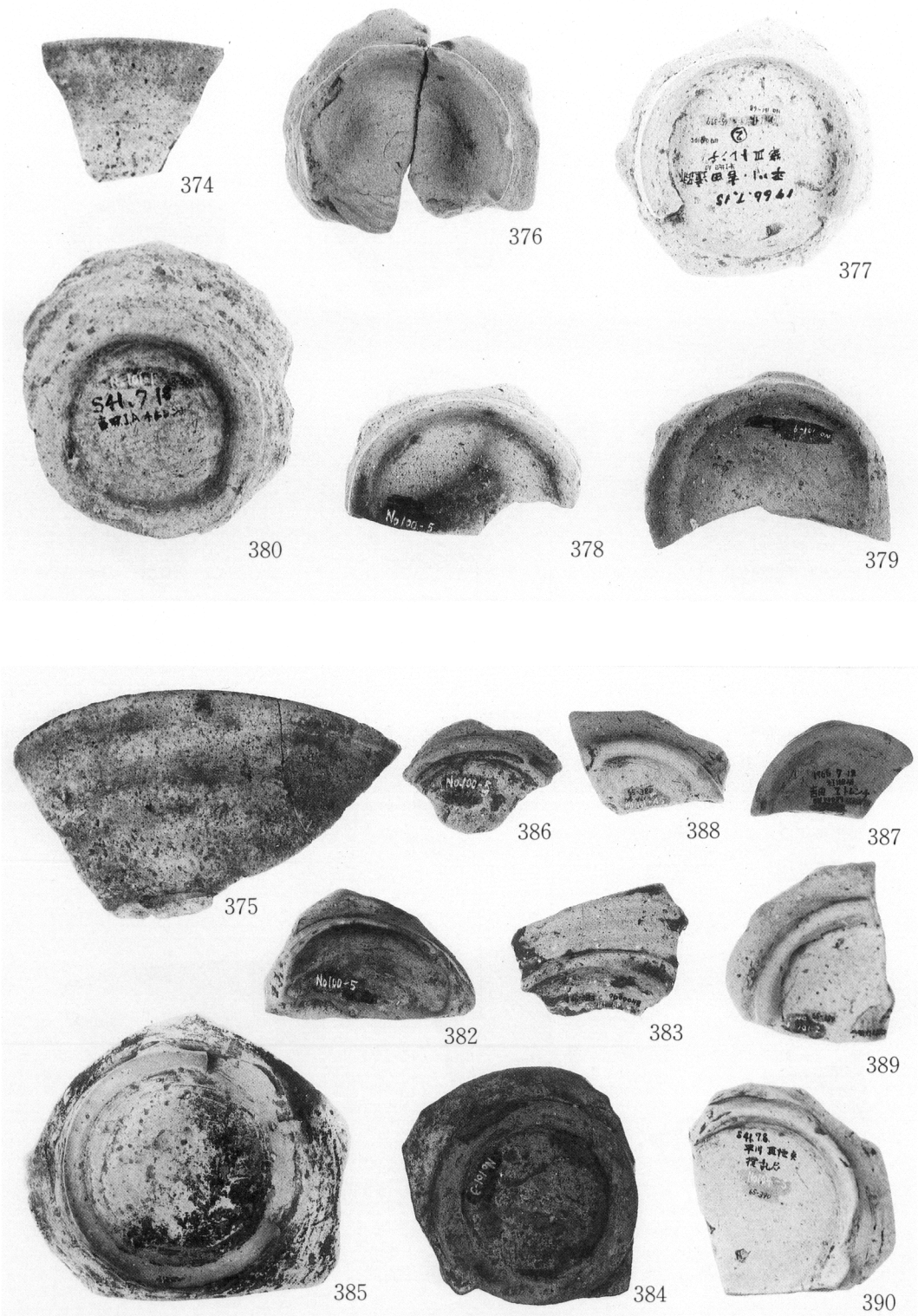
370



373

PL. 34

吉田遺跡第I地区A区の調査
(28)





391



394



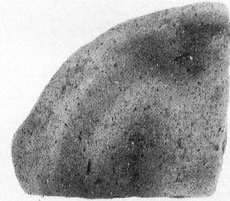
397



392



395



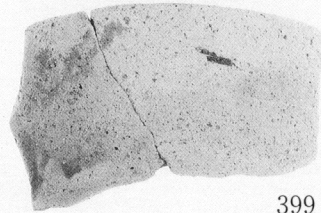
398



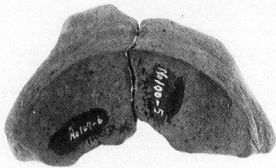
393



396



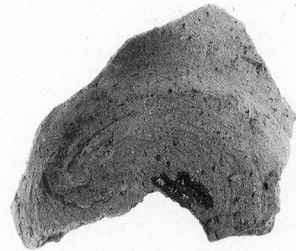
399



400



403



406



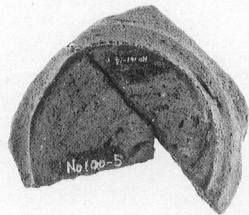
401



404



402



405

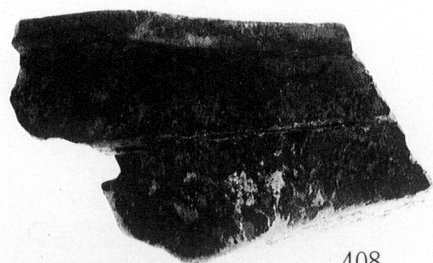


407

PL. 36

吉田遺跡第I地区A区の調査

(30)



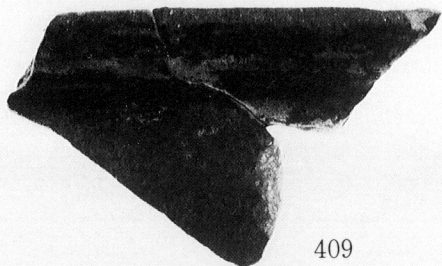
408



411



410



409



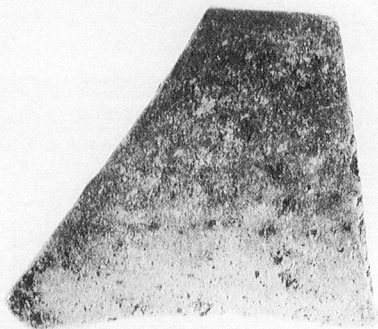
411



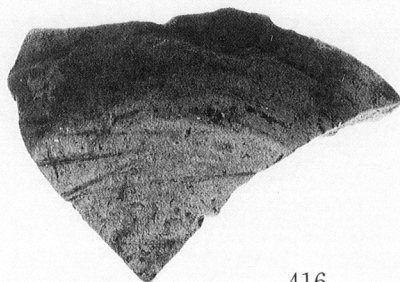
412



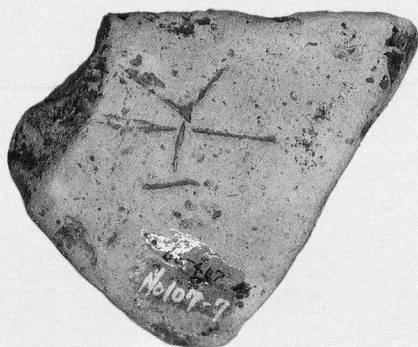
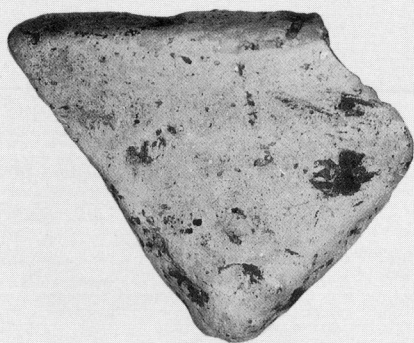
414



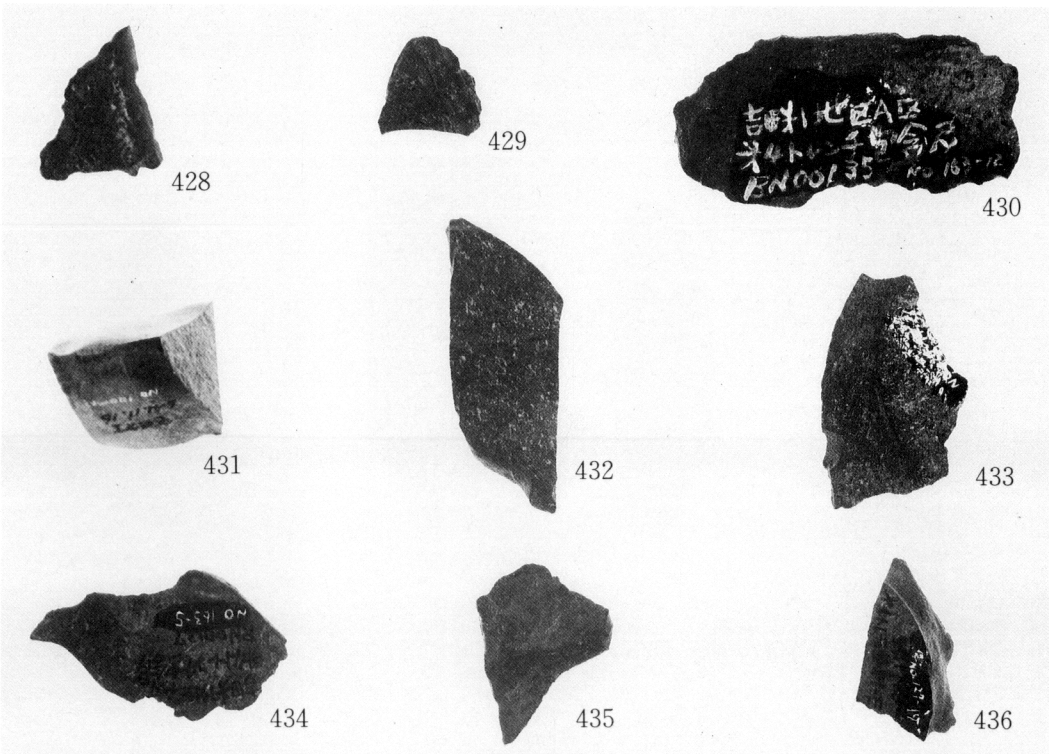
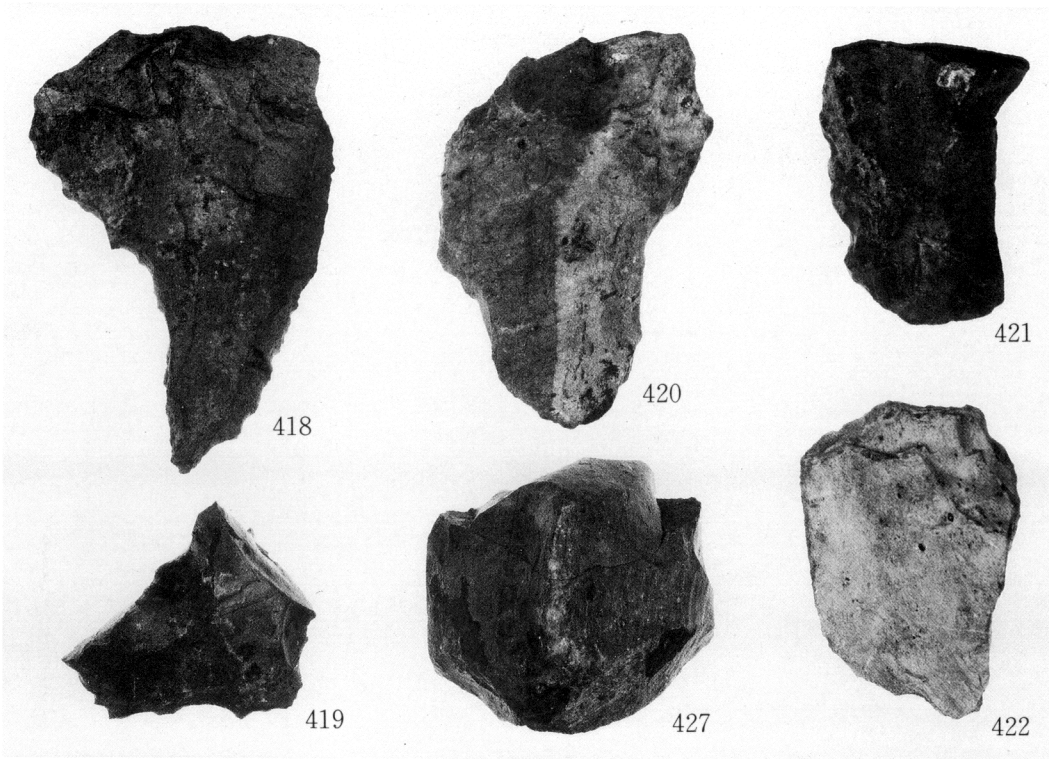
415

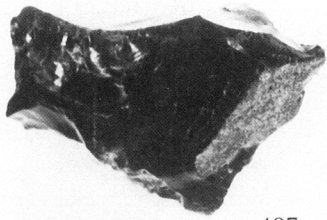


416

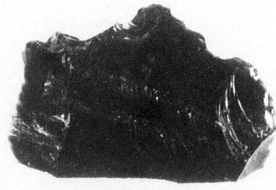


417

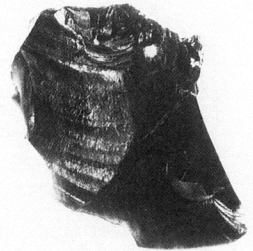




437



438



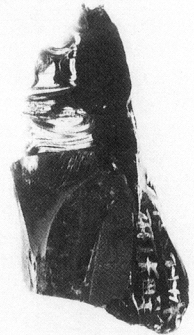
439



440



441



442



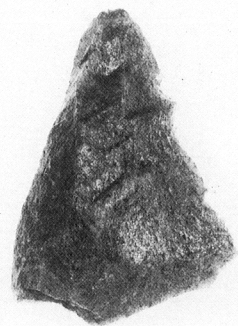
443



445



446



447



444



448



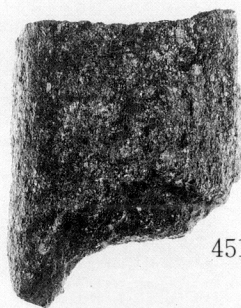
449



450



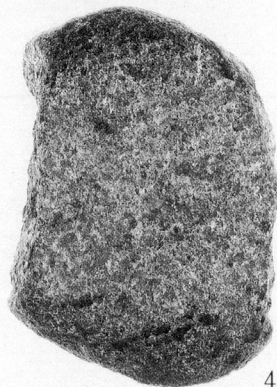
452



451



454



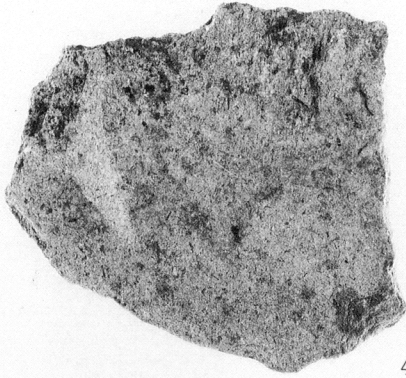
453



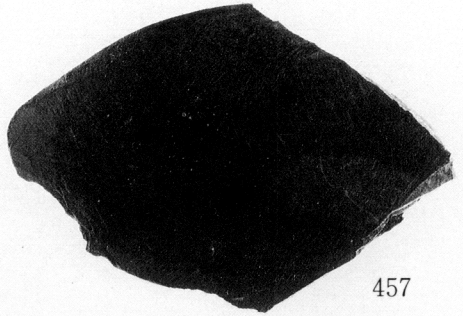
455

PL. 40

吉田遺跡第1地区A区の調査
(34)



456



457



459



458



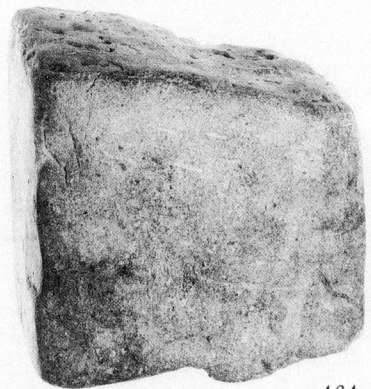
460



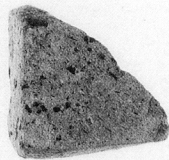
461



463



464



462